

---

# みんな仲良し

小仁沢 為絵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みんな仲良し

### 【コード】

N8817P

### 【作者名】

小仁沢 為絵

### 【あらすじ】

とある私立中学に通う男子7人の日常をそれぞれの視点から紹介します。

泣いて笑って怒って落ち込んで、何だかんだで今日も彼らは生きてます。

俺がまだ幼稚園に通ってた頃だったと思う。

ある年の夏休みに、親戚のおじさんが一家総出で家に遊びにやってきた。

おじさんの子供のハルちゃんは俺より四つ年上の女の子。いつも白いレースのついたふわふわのワンピースなんかを着てた気がする。一番印象に残っているのはハルちゃんの長い髪。背中まであったハルちゃんの髪は黒くて艶やかで、きれいだった。

そんなある日、ハルちゃんが突然、髪の毛をばつさり切ってしまったのだ。一人でお風呂に入ったときにやったと言うから、もちろんまわりの人間はそんなこと知らされていなかった。

背中まであったハルちゃんの髪は耳の下までになつており、後ろから見るとまるで男の子みたいだった。

おじさんはただただ呆気にとられていて、おばさんはハルちゃんの勝手な行動をひたすら嘆いていた。

そして更にまわりを驚かせたのが、ハルちゃんのこんな言葉。

「あたし、今日から女の子やめて、男の子になる。もう髪だって伸ばさないし、ワンピースも着ない。これからは男の子として生きていく」

その時のハルちゃんの凛とした態度を今でも覚えている。あれから九年、ハルちゃんには一度も会っていない。今、ハルちゃんはどうしているんだろう。

「真田くん？」

声を掛けられてはつと我に返る。紫音さんが心配そうに俺のことを見ていた。

「大丈夫ですか？ 疲れたなら先に帰ってもいいですよ」

「え？ ああ、大丈夫です」

「いかんいかん。単純作業だからつい寝てしまった。」

「三日月祭まであと少しですから頑張りましょうね」

紫音さんにはにっこり笑って、花作りを再開する。

ちなみに三日月祭というのは俺らの学校で毎年三月、卒業式の前々日に行われる、三送会のこと。

三送会と言うよりはミニ文化祭と言ったほうがわかりいいかも。

一年・二年の各クラスで出し物を用意して、卒業して行く三年生に感謝の気持ちを込めて、それを披露するんだ。

うちのクラスはもともと何か飲食店を出す予定だったんだけど、生徒会の審査に落ちて、今回は展示係になった。

展示係。三日月祭から卒業式までの三日間、校内を紙で作った花や、ちぎり絵や在校生からのメッセージや三年生の思い出の写真やらで飾りつけをする係。校内と言っても主に三年生が使っていた教室前の廊下や体育館など限定された場所だし、大きなものを作るんでなければただひたすら紙を切ったりちぎったり貼ったり折ったりするだけだから楽と言えば楽。地味と言えば地味。

「こう言ったらあれかもしれないけど、俺、部活に入ってたわけでもないんで今の三年生に世話になった覚えとかないんですよね。」

正直、卒業するなら勝手にしてくれて気分です」

「そう思ってる人いっぱいいますよ。だけどこうして放課後はちゃんと居残って花を作るんだから、真田くんは真面目ですよね」

「真面目っていうか、サボる勇気がないだけなんです」

一番楽そうな花係を選んだのに、それでサボったら他の係の奴らに後で何言われるかわかったものじゃないし。

そう言おうと口を開きかけると突然、携帯が鳴りだした。

「すみません」

「どうぞ」

ディスプレイには新着メールの表記。差出人は母ちゃんだった。内容は『大至急帰ってきなさい』の一言だけ。いったい何だったいうんだ。

「どうかしました？」

紫音さんに今着た母ちゃんからのメールを見せる。

「何があつたかわかりませんが、とにかくすぐに帰った方がいいですよ」

「いや、家の母ちゃんのことだから、そんな大した用事ではないと思います」

「でも『大至急』をつけるくらいですから、絶対何かあつたんだと思いますよ。ここは私がやっておきますから、お母さんのためにも早くお家に帰ってあげてください」

紫音さんにそう言われ、俺もなんとなく不安になり、作業を切り上げて帰ることにした。

メールには大至急とあったから、学校から家まで早歩きで帰った。本当は走った方が早いんだけど、走るのはあんまり得意じゃないから。それでも普通に歩いて帰るよりは早く着く。

いつもなら三十分かけて帰る道のりを今日は二十分で帰った。

「母ちゃん、ただいま」

声をかけても返事はなかった。もう一度大きな声で「ただいま」を言ってもやっぱり返事はない。

大至急って言ったから作業切り上げて帰ってきたのに、母ちゃんはいったい何処にいるんだ。

「おばさんならちよつと前に買い物に出かけたよ」

突然聞きなれぬ声が出て立ちすくむ。見れば階段の一番上に、知らぬ女が腰かけていた。

相手は俺がいることもおかまいなしに、ポケットからタバコを取り出した。

口に一本くわえ、慣れた手付きで火をつけて、めんどくさそうに煙を吐き出し、極めつけに大きな欠伸を一つ。

相手のあまりのマイペースぶりに思わず脱力した。何か緊張してる俺がアホみたいだ。

階段の下から相手をまじまじと見つめる。

さらさらのショートヘアにヨレヨレパーカー、膝の部分が擦りきれたジーンズ。

壁に寄りかかり、足を投げ出して座る姿は気だるげで、見た目だけだと俺よりも年下に見える。

あ、でも年下ってことはないか、普通にタバコ吸ってるしな。

「ここは禁煙か？」

話しかけられてまたぎょつとした。一瞬、それが誰に向けられた言葉なのか解らず、後ろを振り返ってしまった。

「お前に言ってるんだよ」

階段の上で呆れたように相手が言う。

俺以外に誰もいないんだから当たり前だよな、なにやってんだ俺は。

「別に禁煙ではないと思うけど」

「そうか」

それじゃ遠慮なくといった感じに、また盛大に煙を吐き出した。女が俺に目を向ける。

「そんなとこ立ってないで、自分の家なんだから上がってくれば？」

「うん」

俺の家なのになんで知らない女が勝手に入ってるんだろ。

階段をゆっくり上がり、女と目が合うところで止まった。

「何？」

「あの、どちら様ですか？」

俺が言うつと女はおもしろそうな顔をして俺を見た。

「ほう、やっぱり解らないか」

やっぱり？やっぱりってどういう意味？

「解らない、です」

「そう。最後にあつたの九年も前だからな。覚えてなくて当然か。

俺は小春。おまえのイトコ」

今、この人『俺』って。女の子なのに『俺』って……いやいや、そんなことはどうでもよくて、

「小春？」

ふつと俺が小さかった頃の記憶が一部よみがえった。 白いワン

ピースを来た長い髪の女の子が静かに微笑む姿。 「女の子をやめ

る」と宣言したときの、凜とした態度。

「もしかしてハルちゃん？」

「もしかしなくてもハルちゃん」

なその女の正体は俺のイトコのハルちゃんだった。

俺と目が合うとハルちゃんは、何だかおかしそうに笑った。

「ハルちゃん？」

「そっだよ」

「本当にハルちゃん？」

「俺の偽者がいんのかよ？」

「いや、だって、」

俺の知ってるハルちゃんは、こんな感じじゃなかった。

あの頃はスカートしか履かなかったのに今はジーパンだし、口調だって『俺』とか言ってる、男みたいだし。

何より残念なのは、俺が大好きだった黒くて長くて綺麗な髪がさっぱりしたショートヘアになってていること。あの頃のハルちゃんは、こう・・・ふわふわした感じで、いつだって女の子らしく、可愛らしかったのに。

「ハルちゃん、すごい変わったね。全然わかんなかったよ」

「そっかあ？てかそれ言うなら、おまえのが変わっただろ。でかくなっただなあ。身長いくつ？」

「え、いくつだろ？春に測った時はたしか184とかだったと思う」

「184！お前まだ中学生だろ？何食ったらそんなでかくなんだか」「さあ？」

普通に食って、寝て、気付いたらこんな大きさになってた。

「昔の海生は泣き虫、弱虫、クモだって触れなくて、いつも俺の後ろついてまわってたのに。そいつがこんな男前になるなんてな」

ハルちゃんはため息混じりにつぶやいた。

背が高くなっても泣き虫弱虫は昔と変わらない。クモだって今だに触れない。格好わるいから言わないけどさ。

ハルちゃんの隣り、人ひとり分開けて、座り込む。

「えっと、ハルちゃん、一人で来たの？」

「そっだよ」



「何で？」

「何で一人で来たの、てことか？」

「違う。9年も会ってなかったのに、突然来るからどうしたのかと思ってる」

昔はお盆やらクリスマスやらお正月やら、何かしらイベントがあるたびに家に来てたのに、あの夏以来まったく連絡よこさなくなっちゃって。

「そりゃあ、お前との約束を守るためにさ」

「約束？」

約束ってなんだっけ？俺、何かハルちゃんと約束したっけ？

「何だよ。最後に会った日に約束したじゃん。まあ覚え得なくて当然か、9年前の話だし、海生も小さかったし」

「それにそれだけが理由ってわけでもないし」とぶつぶつ言いながらハルちゃんは煙草を足もとのコーラの缶の中に押し込んだ。

「俺、来ない方が良かったかな」

「そんなことないよ！」

俺がハルちゃんとした約束を忘れたせいでハルちゃんがショックを受けたのかと思ってる慌てて否定した。

「俺、一人っ子だし、友達少なかったし、あの頃ハルちゃんが遊んでくれて本当に嬉しかったんだよ。俺にとってハルちゃんは優しいお姉さんであり、かけがえのない友達でもあったんだ。それなのに会えなくなっすぎてすごく寂しかったんだよ」

もちろんついさっきまでハルちゃんのこと忘れてたけど、あの頃本当に寂しかったのは嘘じゃない。

「海生だけだよ。そう言ってくれるの」

ハルちゃんは微笑み「ありがとな」と言った。

「俺と久しぶりに会えて、嬉しいか？」

「うん、嬉しいよ」

出来たらあの頃のまんまのハルちゃんに会いたかったけど。

「じゃあ、俺がしばらくここにいて言ったら海生は嬉しい？」

「え？」

「俺、しばらくここに置いてもらうことになったから」

「何で？」

「家でてきたから」

「家出てきた？」

ハルちゃん新しい煙草に火をつけて言った。

「家出てきたんだよ。勢いで飛び出てきたんだけどさあ、行くところないからまいっちゃって」

「ハハハ」と笑いながら話すハルちゃんは、たいしてまいっているように見えない。と、言うかこれって笑うような話じゃない気がする。

「何で!？」

俺、バカの一つ覚えみたいに、さっきから「何で」ばっか繰り返してる。だけど仕方ない、ハルちゃんの言うこと突拍子のないことばかりなんだから。

「何で家出なんかしたの？」

「そーゆーお年頃だから」

「ハルちゃんね、俺は真面目に聞いてんだから、」

その時玄関のドアが開き、大きな買い物袋を手下げた母ちゃんが入ってきた。

「あら、海生。帰ってたの。そんなところに座り込んで何してるの？」

「想い出話に花を咲かせてたんですよ」

俺の後ろからハルちゃんが顔を出して言った。

「そう。9年ぶりなものね。ハルちゃんが家に来るの・・・海生、感動のあまりハルちゃんに抱きついたり小さい子みたいに泣きわめいたりしなかつた？」

「するわけないだろ！」

「何でもいいから降りてらっしゃい。ケーキ買ってきたから一緒に食べましょ」

母ちゃんが奥に引っ込むを見届けてから、ハルちゃんに訪ねる。

「母ちゃんは、ハルちゃんが家に来てるの知ってるんだね」

「あたりまえだろ。おばさんがいなくなったら、誰が俺をこの家に入れるんだよ」

そりゃそうだ。

「母ちゃんは、ハルちゃんが家を出てきた理由知ってるの？」

「知ってるよ」

「何で？」

「俺が言ったから」

「そうじゃなくて、『何で俺には教えてくれないの?』の何で」

「海生にも言ったじゃん」

ハルちゃんはニヤリと不敵そうに笑い、

「そーゆーお年頃だから」

と言った。

何だかなあ。

母ちゃんはハルちゃんから本当に「そーゆーお年頃だから家出した」としか聞いていなかった。

「それだけ聞いて、二つ返事でハルちゃんの申し出を受け入れたのかよ」

「あら、何か問題でもある？」

近所でまずいと評判の、ケーキ屋『絵留』のメロン小豆ケーキをおいしそうに食べながら母ちゃんは言った。母ちゃんは味覚だけでなく、頭までおかしくなってしまったのか。

「普通何か言わない？」

「何かって何？」

「何かもつと、いろいろ詳しい事情聞いたりさ、お家の人心配するから帰った方がいいとか」

「海生、俺がここにいたら邪魔か？」

ショートケーキ（これは割とおいしい）をつつついていたハルちゃんが、少し哀しげな目で俺を見たもんだから慌てて否定する。

「そんなことないよ！ハルちゃんが家に来てくれて、俺は本当に嬉しいよ」

「俺も嬉しい」

優しい目をしたハルちゃんはじつと俺を見つめて、

「海生のその素直で真っ直ぐなところは9年前とちつとも変わらないのな。何か嬉しい」

そんなことを言った。

「嬉しいなら問題ないじゃない。何がそんなに気にくわないのよ？」

「だから別に気にくわないとかじゃないんだって。ただちよつと、ハルちゃんの家出の理由が気になるだけで・・・」

ちらりと視線を投げ掛ける。

「母親と喧嘩したからだよ」

俺とは目を合わさずにケーキにフォークを突き刺してハルちゃんは静かに言った。

「ハルちゃん、お父さんの部屋片付けたから荷物移動させていいわよ。お父さんの部屋はわかるわよね？」

ハルちゃんは頷き、席を立つ。

ハルちゃんがいなくなるなり、俺はなぜか母ちゃんに頭をはたかれた。

「お馬鹿」

「なんだよ、いきなり」

「あんたはもう少し空気を読みなさい。しつこく家出の理由なんて尋ねて」

「だってハルちゃんが『そーゆーお年頃だから』なんてふざけたこと言っつて、はぐらかすから」

「あの真面目なハルちゃんがそんなこというくらいだもの、人には言えない深刻な理由があるにきまつてるじゃないの。あんたそんなこともわからないの？」

母ちゃんに言われてハツとした。

「そーゆーお年頃」だなんて話をはぐらかすハルちゃんの気持ち俺は全然考えてなかった。

「だからあんたはモテないのよ」

「ハルちゃんに謝ったほうがいいよな？」

「そう思うならハルちゃんを手伝ってきなさい」

使った食器をまとめ、母ちゃんは台所に消えていった。

父ちゃんの部屋を覗き込むと、ハルちゃんは畳に座っていた。

座っていたというより、うなだれていたというほうが正しいのかもしれない。

胡坐をかいて、肩を落として、下を向くハルちゃんは何だかすごく疲れているように見えた。

「ハルちゃん？」

声をかけるとハルちゃんはぱつと顔をあげた。

「おう、海生か。どうした？」

「いや、何か手伝うことあるかなって思ってた」

「そうか。ありがとな。でも大丈夫。荷物って言うってもこれだけだから」

そう言うってハルちゃんはそばに置いてあった大きなドラム缶型のバッグを叩いて見せた。

「ならいいんだけど。あのさ、」

「うん」

「さつきはごめんね。俺、余計なこと聞いちゃったみたいで」

「おばさんになんか言われたのか」

「うん。空気読めって」

「いいよ。別に気にしてないから」

ハルちゃんが笑って許してくれたからよかった。

と同時に俺の中で「何でお母さんと喧嘩したの？」という疑問が浮かんだ。

もちろんさつき母ちゃんに怒られたばかりだから口にする気なんてさらさらなかったんだけど、ハルちゃんにはわかったらしい。

「性転換手術をしたいって言ったんだよ」

今のは聞き間違いだろうか？

「何だって？」

「性転換手術をしたいって言ったんだよ。したら家のババアがキレてさ。両手に皿持って投げつけてくんだよ。親父と姉貴たちが止めてくれなかったら、たぶん顔中傷だらけだったよな。で、逃げ出してきたってわけ」

「それって何処までが本当の話？」

俺がそう聞くと、ハルちゃんは平然と、

「全部本当の話だけど」と言った。

「あ、そう」

いきなりそんな話されて「そうなんだー」と納得できるほど俺の頭は柔らかくない。

聞き慣れない言葉もいくつかあった。

性転換、ババア、両手に皿・・・ババア？

「ハルちゃん、自分のお母さんのことをババアなんて言うのはよくないよ」

「そこを突っ込むのか」

「いや、他にも聞きたいこと、言わなきゃいけないことがたくさんあるってのは解ってるんだけど、今、何かそこがすごい気になった」  
だって普通自分の母親のことババアなんて呼ばないだろ。

「ていうか、それより何で性転換？そんなこと言われたらおばさんもびつくりするし、怒るのも当たり前だよ。気まずくなる前に謝った方がいいよ」

「何で俺が謝らなきゃいけないんだよ？」

少し、ハルちゃんの声に怒気が混じったのを感じた。

「だって喧嘩の原因はハルちゃんにあるじゃないか。性転換手術したいだなんて、きつと大変なことだと思う。そんな軽々しく冗談みたいに言っていていいことじゃない。それに、ハルちゃんは女の子じゃない。せつかく女の子に生まれたのに、何でわざわざ手術してまで男になる必要があるのさ。そんなこと言ったらおばさんも悲しむよ」  
「お前にはわかんねーよ」

ハルちゃんが真つすぐ俺を見る。俺のことを軽蔑するような、冷たい目をしていた。

「お前みたいに恵まれた奴には、俺の気持ちなんて解らないんだよ」  
ハルちゃんはそっぽを向いて、それきり何も言わなかった。

何だかんだで昨日はハルちゃんとそれきり口を利かなかった。

風呂から出てハルちゃんの部屋を覗いたときにはもう灯りは消えていた。時間はまだ九時半くらいだったと思う。

まさかこんな早く寝るなんて思ってなかったから何か拍子抜けして、俺も早々に床についた。

朝、まだ寝呆けてふらふらな状態で下におりていくと、ハルちゃんがいっつも俺が座る席の隣の席に座って新聞を読んでいた。

俺が少し控えめに、「おはよ」と言うと、ハルちゃんは新聞から目を離し、笑顔で「おう」と返事をした。

昨日はなんか怒ってるのかと思っただけ、俺の気のせいだったのか。

いつものように始業十五分前に学校に行くと、先に来ていた紫音さんが笑顔で俺を迎えてくれた。

「真田くん、おはようございます」

「おはようございます。昨日は先に帰っちゃってすみませんでした」「いいえ。気にしないでください。至急の用事とやらは大丈夫だったんですか？」

「至急って言っても別にたいした用事じゃなかったんすよ。イトコが遊びに来てて相手をさせたかったみたいで」

それから俺はハルちゃんのことを紫音さんに話して聞かせた。

話をしている思い出した。そういえば家に帰る前、教室でちょっと居眠りしたとき、ハルちゃんの夢を見たっけ。あれはいわゆる虫の知らせ的なものだったんだろうか。



「ハルさんのこと気になりますね。性転換や家出もそうですけど、真田くんと交わした約束っていうのも」

「俺は全然覚えてないんですけどね」

「ハルさんに最後にあつた日、真田くんの家でいたい何があつたんですか？」

「覚えてませんよ。まだ五歳だったんですから」

ただあの日、何か怖いこと、嫌なこと、悲しいことがあつたって言うのは覚えている。

その何かが原因でハルちゃんが突然「男の子になる」て言いだしたのもなんと覚えてる。

ただそれが何だったのか。

「嫌なことはすぐに忘れる質なんです、俺は。だからハルちゃんに会えなくなることがわかつたあの日のことを忘れちゃったんだと思います」

紫音さんは感心したように、「とてもいい性格ですね。羨ましいです」と言ったが、本当は俺がただの切り替えが早い単純バカなだけなんだけど。

チャイムが鳴り、先生が入ってきたので紫音さんとの話はそこで打ち切った。

突然だが、俺は園芸部に所属している・・・と言ってもまだ正式な部としては認められてないんだけど。

部員は二人。俺と、一年時のクラスメイトで、俺が園芸部に入るきっかけを作った部長の桜井亮揮。

当然だが、たった二人しかない園芸部はたいした活動はできない。部室なんてものもないし、正式な部として認められていないため生徒会からの補助金だって出ない。

ついでに言うと、俺ら園芸部はある理由から生徒指導部の先生方あまりよく思われていない。特に部長の関口先生は俺らを目の敵にしている、授業で会ったり、廊下ですれ違ったりするだけでも必ず一言二言嫌味を言ってくる。時にはあからさまに園芸部の活動を邪魔したり、潰しにかかったり。

この前だって桜井と二人、生徒指導室に呼び出されて約二時間俺たちがやるうとしていたことがどれだけ無駄なことか説教も交えて説明された挙げ句、「それでも園芸部を続けたいならもつと部員を集めて正式な部として認めてもらうように努力しろ。例えば進んで奉仕活動をするとか。そういえば、体育館裏の草がかなり伸びてきていたな。きつと通りかかった生徒や先生方から興味を持ってもらえろぞ」

体育館裏なんて滅多に人が通らないのに、そんなところで草むしりをして誰が園芸部に興味を持つんだよ。そう言い返してやりたかったが、逆らったら待ってるのは廃部の二文字。結局、関口先生の言う通り体育館裏の草むしりをした。もちろんその日、俺らが草むしりをしてる最中に体育館を通った奴はいなかったし、その後、園芸部に入りたいと言ってきた奴もいない。これこそ関口先生の言うところの無駄ってヤツだと思う。

でも桜井は、「無駄なんてことはねーよ。体育館裏はすつきりし

たんだし。用務員のおっさんは喜んでくれたんじゃないかねえの？」だって。桜井のこーゆーところ見習わなきゃなと思う。

昼休み終了間際、いつものように裏庭に行った。いつからか俺たち二人は交替で裏庭の見回りをしている。天気の良い昼休みにはお弁当やら購買で買ったパンやらを持った生徒達が裏庭に集まってくる。飯を食ったらゴミが出るのは当然だが、出たゴミを自分で片付けるのは今の世の中当然でわけではないらしい。だから昼休み終了間際に俺たちがゴミを片付けるため裏庭を見回っている。裏庭は俺たち園芸部のグラウンドみたいなものだから。

今日は珍しくゴミが落ちてない。雨が振り出しそうな天気だったし、みんな裏庭に来なかったのかも。

そう思ってたら、突然頭に軽い衝撃が来た。

かぼんと間抜けな音をたてて空のペットボトルが地面に落ちる。何なんだ。

「おや、あたっちゃったかい」

ぎよつとして振り返るとペットボトルを投げた格好のまま微笑む一人の少年。同じクラスの倉本礼央だった。

「やあ真田。今日も裏庭の見回りご苦労さまだね」

倉本は爽やかな笑みを浮かべこっちへ歩いてくる。

「うん。まあ」

落ちていたペットボトルを拾い上げ倉本に渡す。

「ペットボトルは投げるものじゃない。ゴミはちゃんとゴミ箱に捨てようね」

「ここはゴミ箱みたいなものだろ。毎日清掃係がゴミを集めに来るんだから」

倉本はそう言っつてペットボトルを受け取るのを拒否した。清掃係てのは俺と桜井のことだろう。

「しかし物好きだね。こんなとこ毎日見回って掃除したって誰かに感謝されるわけでもないのにさ」

「別に感謝されたくてやってるわけじゃないよ。ここは園芸部のグラウンドみたいなものだから」

「ああ、裏庭に花壇を作ろうとしてる奇人変人部。馬鹿なことしてるよね」

一部の女子から絶大な支持を得ている愛くるしい笑顔（人呼んでエンゼルスマイル）を浮かべ倉本はさらりとひどいことを言った。

「花壇のために人を集めて正式な部にして生徒会の予算を勝ち取るうとしてるんだっけ？馬鹿じゃないの？君たちはよっぼど暇なんだね。そんなことしても時間の無駄。それよりも他にもっとやることあると思うよ？」

畳み掛けるような言い方。言葉につまっつてしまふ。いつものことだけど、可愛い顔して倉本は本当に言うことがキツイ。

「真田。君たち奇人変人部が周りの人間からなんて言われてるか知ってる？」

黙って首を横に振る。知らないけど、想像はつく。

「あいつらは頭がおかしい。生徒指導部を敵に回してまで花壇を造りたいなんて訳わかんないってさ。僕も同感。君たちは気違いじみてるよ」

頭がおかしいとか気違いとか、何でたかだか学校の裏庭に花壇造ろうとしただけでそんな言われなきゃいけないんだろ。花壇を造るのってそんなにいけないことなんだろうか。

「ねえ、真田。君はもつと自分の立ち位置を考えたほうがいいよ。周りの人間が君たちをどう見ているか考えたほうがいい。背が高い以外になんの取り柄もない平凡を絵に描いたような君が、学校一の悪党とつるんで裏庭に花壇を造ろうだなんて。いい顔する人なんていないにきまつてるじゃないか」

また何か失礼なこと言われた気がしたけど、倉本のこの程度の嫌味なら慣れてるから怒る気にならない。

「桜井が気の弱い真田を脅して無理矢理園芸部に入部させたんだって。桜井が真田を入部させたのはもちろんパシリにするため、財布代わりに替わりのため、色々な悪事を手伝わせるため、ストレスが溜まったときのサンドバックの代わりにみたいなの話もあった。こんな程度ならまだいいよ。君が桜井とつるんで注目されたり、畏怖の目で見られてることが気に食わない奴らの中には、真田は普段おとなしそうに見えるけど、実は桜井以上の不良で、桜井と二人でヤバいものを造るために園芸部なんて発足したんだって言う輩もいるんだよ」

「ドラマの見すぎなんじゃないの？普通の中学生がそんな学校の花壇でヤバいものを造るわけじゃないじゃないか」

口ではそう言ってみたものの内心ショックだった。全然気付かなかったけどそんなふうに見られていたなんて。

怒ったり落ち込んだりはしない。そんな権利俺にはない。でも心のなかの動揺は倉本にわかってしまったらしい。目が合った瞬間、倉本は口元を歪め、満足そうに頷いた。

「だから言ってるんだよ。君みたいな地味でなんの取り柄もない、ウドの大木の代名詞みたいなのへたれが妙なことをするんじゃないっ

て。頭の悪い真田にはわからないかもしれないけど、この世界には順位が存在するんだよ。いついかなるときも常に自分の順位を把握し、自分より格上の者には逆らわず、格上の者よりも目立たず、日陰に隠れて地味におとなしく生きていかなければならないんだ。自分の順位を守ることとはつまり秩序を守ることでもある。今の君は秩序を乱している。秩序を乱したものはこの社会から追放される運命なんだ。追放ってどういうことか、頭の悪い君にも想像はつくだろう？悪いことは言わない、追放されたくないかったら、桜井とはすっぱり縁を切って地味に生きるんだな」

「わかったかい？」と聞かれたけど、すぐには返事が出来なかった。わかったようなわからなかったような、曖昧な感じだった。

「倉本は俺に『目障り』だってことを言いたいのか？」

「言いたいんじゃないやなくてさっきからそう言ってるんだよ」

どっちにしるひどいこと言ってるには変わりない。

「倉本って意地悪だよな」

「それは心外だな。僕ほど心優しい人間なんてこの世界に二人と存在しないと思うけど」

「倉本は俺のことが嫌いだからそうゆうこと言うのか？」

倉本はわざとらしく肩をすくめ、困ったように笑いながら、

「何がいいたいのかよくわからないんだけど？」

「倉本は俺のことが嫌いだから言わなくてもいいような意地悪を言うんだろって。倉本の言うとおり、俺は頭悪いし、地味だし、へたれだけど、はっきり言われればそれなりに傷つくんだよ。人を傷つけるようなことわざと言って、倉本はまるで俺が傷つくの見て楽しんでるみたいだ」

「そのとおりだよ」

目を細め、口元を歪め倉本は愉快そうに笑う。

「僕は人の傷ついた顔見るのが好きなんだよ。僕が君に言葉を投げ付ける。君は僕の言葉に傷つく。僕が君を傷つける。僕は言葉で君を支配したんだよ。君が傷つくことにより、君は僕に敗北を認め、僕の前にひれ伏したも同然さ。言葉というのはいいね、いつでもどこでも簡単に相手を屈服させることが出来る。素晴らしく、とても危険な武器さ」

なんだかすごく楽しそうに怖いことを語る倉本は、その見た目の麗しさもあり、「愛くるしい天使」というより「妖艶な悪魔」といった感じだった。

「だけどね、勘違いしてもらっちゃ困るんだよね」

妖しげな笑顔をしまい、また愛くるしいエンゼルスマイルを浮か

べた倉本は、

今までのこと何でもなかったかのように、「ちょっとそこにしゃがんでくれる?」と言った。

「は?何で?」

「いいから。しゃがんで」

いったい何をするつもりなのかわからなかったけど、とりあえず言われた通りしゃがみこむ。

倉本は俺の前に立ち、俺の手からペットボトルを取り上げると、腕を高く振り上げてペットボトルを頭に叩きつけた。

空の500のペットボトルだったから、叩かれてもそこまで痛くはなかったけど、とにかくびっくりして茫然と倉本を見つめてしまった。

倉本はエンゼルスマイルを浮かべながら、「今、何時だと思う?」と尋ねてきた。

「え?」

「時間。今何時?」

「ええっと・・・一時半だな」

「僕が真田の姿を見つけてここに来たのが1時20分くらい。つまり僕がここに来てから約10分経ったわけだよ。さて、これが意味することは何かな?」

「何って?」

何もないだろ、倉本と俺が約10分ここで立ち話をしたっただけの話。

「お前、本当に頭が悪いね」

倉本の口調が変わった。嫌な予感がして、立ち上がるうとした瞬間、倉本に右の耳をこれでもかというくらいに引っ張られた。

「痛っ!倉本、耳!」

「このほうがよく聞こえるだろ?いいかい、真田。僕が今からお前にとっても大事な話をしてやるからちゃんとして聞くんだよ?それから、僕が話し終わるまでは口を開いちゃいけないよ?万が一僕の話



をさえぎるような真似したらこれで口を塞ぐからね？」

500mのペットボトルをちらつかせながら、倉本は爽やかな笑顔でとんでもなく恐ろしいことを言う。俺は自らの口を手でしっかり、無言で首を縦に振る。

「いいか？昼休みに購買までパンを買いに行った僕が、偶然お前の姿を見付けた。無視するのも可愛そうだからと、ついでに言うならただ声をかけるだけじゃ面白くないからと、ペットボトルを投げるといふ、ユーモア溢れるイタズラを提供してやった。そのうえ、何の得もないのに10分もの間話相手になってやったんだよ、馬鹿で阿呆でのろまで図体でかいわりに蟻んこみたいに気が小さい、愚かなお前の相手をしてやったんだよ、この僕がっ。その僕に対して何て言った？『倉本は意地悪だよな』。は？お前どれだけ頭が悪いんだろうねえ？菩薩のように慈悲深い僕がお前のことを心配して忠告してやったのに、言うにことかいて『嫌いだから意地悪言うんだろっ』とは。まさに失礼千万、無礼極まりない所業だよ」

倉本はそこで一度言葉を切り、俺の耳元に口を寄せると、おぞましいくらいに低くどすの利いた声で、

「この大馬鹿者が。身の程をわきまえろ」

そう言っつてようやく倉本は手を離れた。

耳は解放された後もじんじん痛いし、笑顔で俺を見下ろす倉本が怖くて思いがけず涙が出てきた。

「さて真田、ここまで言っただから頭の悪いお前にもわかるだろう？僕に何か言うことあるよね？もちろん『意地悪』以外の言葉でね」

「え？」

爽やかな笑顔を浮かべる倉本につられて、俺も引きつった笑みを浮かべた。

何か言わなくちゃいけないらしい。だけどその何かがなんなのかわからない。

「はい、時間切れ」

まだ5秒くらいしかたつてないのに、やっと解放されたと思ったのに、今度は嫌というほど両頬の肉を真横にひっぱられた。

「何でかな、何でわからないかな。命短い花のごとし、十代の輝ける時間は一分一秒も無駄に出来ないんだよ。さっき言ったよね？頭の悪い君の話に慈悲深い僕は10分も付き合っただよ？その僕に『わたくしのような愚図のためにレオ様の貴重なお時間を割いて頂き、感謝の言葉もございません』ぐらい言えないのは何でなの？ひよっとしてアレ？真田は僕に頬の肉をひっぱられるのが好きなのかな？きつとそうなんだね。真田が望むならいつまでもこうしてやっててもいいよ。なんだか僕もすっごい楽しくなってきたからね」

いつの間にか妖しい悪魔のような微笑みを浮かべていた倉本はなんととも言えず、楽しそうに俺の頬を引っ張る。痛いのに、涙出てるくらい痛いのにやめようとしてくれない。

「ね、真田。痛い？それとも嬉しい？」

痛いに決まってるだろ、馬鹿野郎！なんて心の中で叫んでみても倉本に伝わるわけがない。喋りたくても倉本に頬の肉をひっぱられるから喋れない。痛いんだよ、本当に。やめてくれよ。誰か倉本にこの想いを届けてくれ！

「何してるの？」

そんな声とともに、突然パツと手が放され、二回目の尻餅をついた。三回目を恐れ、慌てて立ち上がり倉本から離れる。

「そんなに嫌がらなくてもいいのに」

慌てて逃げた俺を見て、倉本は冷ややかに笑う。さっきまでの危険な雰囲気は消えていた。

「何してるの？」

声が出たほうを見ると同じクラスの花菱聖が目を真ん丸くして、じーっとこっちを見ていた。

「やあ、花菱。昼休みも生徒会の打ち合せかい？大変だねえ」

「そうでもないよ」

花菱はとことこ歩いて、立ち足はだかるように俺と倉本の間に入り込む。爽やかな笑顔を浮かべた倉本の眉が一瞬だけピクツと動いた。「まさかとは思いつけど、レオ、海生のこと苛めてるんじゃないよね？」

「何でそう思うんだい？」

「だって、さっき海生の頬を引つ張っていたじゃないか」

「あれはスキンシップだよ。友好の証さ」

「でも、すごく痛そうだったよ」

「真田は痛いのが好きなんだよ。ねー、真田？」

俺に変な趣味があるみたいない言方するなて言い返したいけど、倉本の楽しそうな笑顔には妙な圧力があつた。

「そうなの、海生？」

眼鏡の奥の無垢な目で花菱は俺を見上げた。答えるわけにもいかないから、適当に笑ってごまかす。

「海生、涙ぐんでるよ」

「悦びの涙だよ。真田は痛いのが涙が出るくらい嬉しくて大好きな

のさ」

「そうか、そうなんだ。痛いのが好きで嬉しいだなんて、すごいね。僕は痛いの大嫌いだから羨ましいな」

無邪気な花菱は心底感心したように「すごいなあ」と繰り返す。

別にすごくないし、それじゃあただの変態だよ。何でそんな簡単に倉本の言うこと信じちゃうんだよ、花菱。何か変だなとか思わないのか。

「でもよかった。てっきりレオが弱い者いじめしてるのかと思って心配しちゃったよ」

弱い者いじめ。そうか俺は弱い者いじめを受けていたのか。いや、わかってたけどさ。

「失礼な奴だな。僕はここを通りかかったら真田がいたから声をかけただけだよ」

「そうだよ。レオがそんな酷いことするわけないよね。ごめんね。海生も邪魔しちゃったみたいで悪かったね」

「あ、いや」

俺としてはむしろ助けてもらって感謝したいくらいだよ。倉本の前じゃそんなこと口が裂けても言えないけどさ。

「ところで、海生はこんなところで何してるの？」

「真田は裏庭の見回りに来たんだって」

倉本の言葉に花菱は目を丸くする。

「裏庭の見回り？何で？」

「真田が園芸部に所属してるからだよ」

「園芸部？海生が？」

「そうだよ。花菱、知らなかったの？」

自分で言うのはあれだけど、けっこう有名な話だと思ってたのに。「学園一の不良・桜井くんがなにやら良からぬ企みをしていて、そのために園芸部を設立しようとしてるってのは知ってるよ。そういえば最近桜井くんが舎弟を手に入れて、園芸部設立に向けて手伝わせてるって話を聞いたけど、海生が園芸部にいたってのは初耳だな」

首を傾げたまま三秒、花菱は目を見開き、

「そうか！桜井くんの舎弟で海生のことだったんだね！」

「舎弟って、」

そんな無邪気に言わないでくれ。倉本は花菱の言葉に満足そうに笑っている。

「すごいな、海生。まさか桜井くんの舎弟が海生だったなんて。みんなの注目独り占めだね！うちの顧問の関口先生も園芸部には一目置いてて、『あいつらいつになったら園芸部を諦めるんだ。しぶといやつらめ』てぶつぶつ言ってるよ」

そういうのって一目置いてるって言っただろうか。

「でも何で桜井くんの舎弟になったの？何がきっかけで桜井くんと知り合ったの？あ、そうか。海生と桜井くんは一年の時同じクラスだったんだよね。それで、園芸部でどんな活動してるの？正式な部として認められてないからたいした活動出来てないって聞いたけど、その辺は大丈夫なの？」

目をきらきらさせながら花菱は迫ってくる。まるで新しいオモチャをもらった子どもみたいだ。

「真田、花菱。楽しそうに話をしているとこ悪いんだけどさ、もうすぐ予鈴が鳴るよ」

校舎からチャイムの音が聞こえる。

「僕は先に行くよ。英語準備室に今日の授業で使うプリント取りに行かなくちゃならないんだ。真田と花菱も早く教室に行ったほうがいいよ」

前に向き直るその瞬間、倉本が俺を見てクスツと笑った。すごい意地の悪い笑い方だった。

「レオはすごいいい子なんだよ」

「は？」

何の脈絡もなく、花菱は突然そう言った。

花菱は俺と目が合うと、ニコニコと人懐っこい笑顔を浮かべてもう一度、

「レオはいい子なんだよ」

「そう、か」

去りゆく倉本の後ろ姿に視線を投げ掛ける。倉本がなんの反応も示さないってことは、たぶんこの距離じゃもう聞こえていないってことだろう。

「え、それで、それがどうかしたのか？」

「別に。ただ海生に言っときたかったただだよ」

「ああ、そう」

花菱が何を言いたかったのか、どういう意味なのか、よくわからなかったけど、もう倉本の話はしたくなかったから聞かなかった。

「そういえば、海生。今日は部活あるの？」

また急に話が飛んだな。

「あるよ」

「遊びに行ってもいい？」

「は？」

「ダメ？」

「ダメじゃないけど、」

「じゃあ、決まり。部活行くときに僕も連れて行ってね。楽しみだなあ」

こどもみたいにはしゃいだ声を出し、花菱は嬉しそうに微笑む。

今日も今日とて例のごとく関口先生から嫌がらせみたいな雑用押しつけられたから、園芸部らしいことは何もしないのに、そんなに楽しみにして後でがっかりしなきゃいいけど。

放課後、花菱をつれて裏庭へ行つた。

いつも必ず授業が終わつた後、ここに集合することになっている。一度裏庭に集合して、出来ることがあつたら活動、出来ることが何もなかつたらその日は解散。

今日は関口先生から体育館の脇にある、使用禁止のトイレの掃除をするように言われている。何で使用禁止のトイレを掃除する必要があるんだよという文句は飲み込み、いつものところに集合など約束したのは一限終了後の休み時間だった。

真面目で几帳面なあいつが約束を忘れるわけがないのに、裏庭に来てから30分、桜井はまだ現れない。

「どうしたんだらうね、桜井くん」

「わからない」

「忘れちゃつたのかな」

「桜井に限ってそんなことはない」

「じゃあ、トイレ掃除が嫌で逃げ出したとか」

「もつとないな。あいつはそんな無責任なヤツじゃない」

「ふーん。そうなのか」

視線を感じて、顔を横に向ける。花菱がニコニコ笑いながら俺を見ていた。

「なに？」

「海生は桜井くんのことすごく信頼してるんだね」

「へ？」

信頼。まあ確かに同じ部活の仲間だし、桜井は良い奴だし、信頼はしてるけども、そんなのわざわざ口に出して確認するものでもないだろう。

「花菱は恥ずかしくならぬのか？」

「ん？何が？」

「『信頼してるんだね』って。昼間だつてレオのこと『いい子』とか言つてたし、なんかその表現が気になつて。聞いてると時々恥ずかしくなるというか」

「そうかな？じゃあ、言い換えようか」

空を見上げ、うーんと唸りながら花菱は代わりの言葉を考えだした。

「桜井くんと海生は『仲良し』なんだね。これでどう？」

「いや、その、」

仲良して、中二男子が口にする言葉じゃないだろ。

「ダメか。じゃあ、次はね」

「花菱、もういいから」

「そう？まあとにかく海生は桜井くんと仲良しで、信頼しあつて、いい友達でなんだか羨ましいなつて話さ」

もういいつて言つたのに。最後にまとめるなよ。

「桜井くんが来るまでまだ時間かかりそうだからさ、二人で先に掃除しちやつたほうがいいんじゃないかな」

「え？いいよ。花菱は帰りな。きつともう少しすれば桜井来ると思うし、とりあえず俺一人で掃除するから」

園芸部でもない、ましてや関口先生が顧問を務める生徒会の会長さまにトイレ掃除なんてさせられない。

「気にしないでいいんだよ。僕が好きで言ってるんだから。ただぼーっと桜井くん待つてるだけじゃ時間がもつたいないでしょ」

「いや、でもさ」

「じゃあ、こうしよう。今日僕は仮入部にきたつてことで、園芸部の仕事の一巻として、トイレ掃除もする。ほらこれなら問題ないよ」

「そうかな」  
「そうだよ。話してる時間がもつたいない。早く体育館に行こう」  
声をかける間もなく花菱は体育館に向かって走つていつてしまつた。

あんな勢い良く走つていつて、あいつ途中で転ばなきゃいいけど。





用務員のおじさんから掃除に必要な道具、バケツやらモップやら雑巾やら、ついでにマスクとゴム手袋を借りて、俺たち二人はトイレ掃除を開始した。

使用禁止のいわく有りげなトイレなんていうから、汚くて臭くて目もあてられないひどい有様を想像してびくびくしていたのに、実際に入ってみると以外と綺麗でなんだか拍子抜けしてしまった。ここ二年ばかり使われていないとか言ってたっけ。使う人がいないとトイレが汚れることもないか。

「ねーねー、何でこのトイレ使用禁止になったか知ってる？」

「花菱は知ってるのか？」

「そりゃもちろん」と花菱は得意げに笑った。

「あのね、夏の暑い日にこのトイレの前を通るとね、とてもおぞましい声が聞こえるんだよ。誰かが苦しそうに呻いてる声が」

「たぶんこれは怖い話なんだろうけど、ニコニコ顔の花菱がお伽話でも聞かせるみたいに話すから、ちつとも怖くない。しかし、怖い話が苦手な俺にとっては逆にありがたい。」

「本当の話か？」

「本当だよ。何人もの人が聞いたって話だし、僕だってこの耳ではつちり聞いたもの」

「うえーまじかよ。どんな声がしたんだ？」

「なんかね、二日酔いのおじさんがトイレで便器にしがみつきなから胃のなかのものを必死に吐き出してる時の、あの苦しそうな声だったよ」

「なんじゃそりゃ」

「あんまり苦しそうだったから心配になって、中を覗き込んで『大丈夫ですかー？』て声をかけたんだ。少しだけ荒い息遣いが聞こえ

ただけど、すぐにびたつとやんじゃって、待てど暮らせど誰も出てこなかったから、おかしいなと思って先生に報告したんだ。そして僕以外にもあのトイレはおかしいって言ってる人たちがいたらしくて、先生たちがすぐにトイレを調べに行ったんだけど、トイレには誰もいなくて、残っていたのは胃液特有のあの酸っぱい香りだけだったんだって」

「やーめーろ。怖いうえに汚い話は嫌いなんだ」

「そんなことがあって以来ここは使用禁止になったんだよ」

全然知らなかった。というか知りたくなかった。そんな話聞いちやったら落ち着いてトイレ掃除なんかできないじゃん。

「あの声の主は人間だったのかな。それとも人ならざる何かだったのかな」

「花菱、やめろっての」

「ごめんごめん」と謝りながらも花菱の顔は微笑んでいる。絶対悪いとか思っていない。とにかく早く掃除を終わらせてとつとこの場を離れなくては。

「どうして海生は園芸部に入ったの？」

トイレのおっさんから、またすっごい話が飛んだなー。

「植物とか好きだったっけ？」

「いや、そんなに興味はない」

「不思議なんだよね。僕も噂で聞いた程度だけど、園芸部って関口先生に睨まれてしょっちゅうこんな嫌がらせみたいな雑用させられてるんでしょ？毎回部活動が掃除とか雑用とか嫌にならないの？」

「そりゃあ嫌だけどさ、仕方ないんだ。園芸部を認めてもらうためには頑張らなくちゃ。それに俺なんか桜井に比べたら睨まれてるうちになんか入らないし。部長の桜井が頑張るって決めたんだから、部員の俺は黙っても桜井についてくだけさ」

「そうなんだ」

花菱はまた嬉しそうにニコニコ笑って、

「海生は本当に桜井くんのこと、」

「あ、それ以上言わなくていいから」

「何で？」

「恥ずかしいから」

花菱は目を丸くして不思議そうな顔した。「何が恥ずかしいんだろ？」とでも言いたげな顔だった。

「でも本当に仲良いんだね。海生と桜井くんて一年生の時から仲良しなの？」

だから、仲良しと言っなよ。

「一年生の時は全然」

「仲悪かったんだ？」

「悪いというか、交流がなかったんだよ。半年前までほとんど口をきいたこともなかった」

「それはそれは。なら余計に不思議だね。何で海生は園芸部に入っただの？何がきっかけで桜井くんと友達になったの？」

花菱の目が好奇心からキラキラと輝いている。

「花菱はさあ、桜井のことどう思ってる？」

「どうって？」

こんなこと聞いていいのかどうかわからないけど、

「桜井のこと怖いと思ったことはない？」

「何でそう思うの？」

「何でって、そりゃ桜井が不良だからだよ」

今更こんなこと説明したってしょうがないと思うんだけど、桜井は学園一の不良として恐れられている。

短く切った髪はマスタードみたいな黄色。まだ中学生なのに両耳に二つずつピアスをつけて、獣のような鋭い目つきで周りを威嚇（？）し、何故かTシャツの上に『神明学園 籠球部』と書かれたジヤージを羽織って校内をうろつき、しょっちゅう他校の生徒に呼び出されては喧嘩をし、勝ってんだか負けてんだかはよくわからないけれど、土と血と埃にまみれボロボロになっている。

うちの学校は自由な校風が売りだから服装や髪形の規定など、たぶん他の中学に比べたらそんなに厳しくないと思う。だけど桜井の何処にいてもわかる派手な格好（黄色の髪とかピアスとかジャージとか）は「自由」を通り越して「無秩序」だと、先生方はあまりいい顔をしない。ましてや他校生との喧嘩などもつての外だと、桜井は少なくとも週に三回は生徒指導室に呼び出されている。と言つてもそれをするのは桜井に入学当初から目を付けている生徒指導部長の関口先生だけで、他の先生はなるべく桜井と関わりを持たないよう避けているようだ。幸い桜井が他校生と喧嘩をしているという決定的な証拠がないため、これまでのところ退学だの停学だの大きな事にはなっていない。

俺ら園芸同好会が生徒指導部の先生方によく思われていないのも、そうゆうわけだ。

「なるほどね。僕ね、桜井くんと小学校一緒だったから少しだけ知ってるんだ。彼は小学生の頃からあんな感じだったよ。見た目が派手で、いつつも誰かに殴られたみたいな怪我してて。僕は桜井くんと同じクラスになったことがないからよく知らないけど、クラスに友達もいなくてずっと一人だったって。みんな桜井くんのこと怖がってたよ」

「で、花菱は？」

「何でだかよくわからないけど、花菱には『怖い』と言ってほしくなかった。あの倉本のことですら『いい子』と言った花菱なら、きっと桜井のことも『いいヤツ』だと言ってくれるだろう。そうであって欲しい。」

「そうだね。怖いと思ったことはないよ。僕は桜井くんに何かされたわけじゃないから。確かに桜井くん目つきは悪いし、ちよつと近づきたい雰囲気あるし、あまりいい噂も聞かないけど、悪い人ではないんだらうなって思ってる。だって、桜井くんは海生の友達なんですよ？」

花菱は優しい微笑みを俺に向けて言う。

「海生は優しくて真面目でとても真つすぐない子だから。そんな海生の友達なもの、桜井くんが悪い人なわけないよね」

「そうじゃない？」と尋ねられても、俺はすぐに返事が出来なかった。

なんだか花菱がすごくかっこよく見えて。と同時になんだかすごく恥ずかしくて身体中がものすごく熱くなってきた。

「あれ？どうしたの海生？顔が真つ赤だよ？」

「なんていうか、花菱で、すごいな。なんかもう色んな意味ですごいよ。おまえ最強だよ」

もし、桜井本人が聞いたらどう思うだろう。あいつも顔真つ赤にしてすごい慌てるかな。それとも嬉しそうに、照れたように笑うかな。案外何事もなかったようにスルーしたりして。

「海生は桜井くんのこと怖いと思ってたの？」

「え？」

「怖いと思ってたから、一年生の時は交流がなかったのかな？」

花菱の綺麗なまん丸の目にとらわれて、一瞬言葉につまる。でも、嘘ついたらって仕方ない。

「そうだよ」

「でも今は怖くないんでしょ？仲良しだもんね」

「・・・花菱、頼むから仲良しというのやめて」  
なんか力が抜ける。

「二人は何がきつかけで今みたいな関係になったの？」

「たいしたことじゃないんだよ」

「でも聞きたいな」

「別におもしろい話じゃないぞ」

「それでも。海生が嫌じゃなかったら。桜井くんが来るまででもいいから、聞きたいなあ」

ならば掃除を手伝ってくれたお礼も兼ねて、眼鏡の奥をきらきらさせる花菱の好奇心を満たしてやるか。

「少し長くなるけど」と前置きをしてから、俺が園芸部に入ったいきさつを話して聞かせた。

あれは忘れもしない入学式のことだった。

校長先生の長い話を聞き流しながら、これから始まる中学生生活に期待と不安を感じてドキドキしていた。

同じ小学校から来たやつなんていなかったら、人見知りで口下手な俺は友達出来るかななんてことをすごく心配していたっけ。

だからその時、俺の隣に座っていたやつ（もう名前も思い出せない）に肩をとんと叩かれたときは驚いた反面、ちよつと嬉しかった。

「なに？」

「後ろ見てみるよ」

言われた通り、後ろを振り返つてぎよつとした。

体育館の出入り口に顔の腫れ上がった目付きの悪い金髪の男がいて、先生らしき人と何やら深刻そうに話していた。

青い校章てことは俺らと同じ新入生なんだろうけど。

「あいつ知ってる？桜井ていう不良なんだぜ」

「不良？」

「そう。小学校の頃から金髪だし、ピアス空けてるし。あいつしょつちゆう上級生や地元の中学生と喧嘩してたんだぜ。見るよあの顔。今日も入学式来る前に誰かと喧嘩してんだぜ」

確かに桜井の顔は不自然に腫れ上がっていた。なんだって入学式の前に喧嘩なんてしてくるんだろう。

「あいつ、桜井て言うの？」

「そう。桜井亮揮。あいつには気を付けた方がいいぞ。俺の通つた学校でも桜井に泣かされた奴いっぱいいたんだ」

「へえ」

なんとなく嫌な予感がしてちらりと空いている隣の席に目をやる。せつかくの入学式なのに欠席なんて気の毒だななんて思っていた



けど、まさか……。

先生が腰を屈めこそそこそと俺らのクラスのところにやってきた。もちろんあの不良・桜井を連れて。

「桜井くん、君の席はここだよ。真田くんの隣だ。入学式が終わったら必ず保健室に行くんだよ」

嫌な予感の中。先生は桜井を残し去って行き、桜井は無言で俺の隣に腰かけた。

隣のやつは桜井を恐れてか、もう話しかけてこなかった。

俺は俺で恐怖のあまり体を震わせながら、絶対に左を向かないようにひたすら前を向いて面白くもない校長先生の話に集中した。

「なあ」

左隣から声が出た時は本当に心臓が止まりそうになった。

向きたくない返事したくない、だけど無視したらきつとこれから始まる中学ライフが暗黒に染められてしまう。

油の切れたブリキの人形よろしくゆっくりと左を向いた。

「なに」

努めて明るい声を出したつもりだったが、たぶん、裏返ってたと思う。

桜井は真っ直ぐに俺を睨み付けて、自身の鼻から流れる血を指さし、

「ティッシュ持ってない？」

気心知れた今だったらきつと「なにやってんだよ、桜井」とか笑い飛ばせたるうけど、今よりもっと気が弱い頃、ましてや初対面で相手は不良、まごつきながら必死でポケットに入れておいた真新しいティッシュを差し出した。

「あげる」

「ありがと」

それきり左を向かなかった。もう二度と声をかけられませんようにと何かの神様に祈り、ひたすらに入学式が早く終わることを願った。

それが桜井との出会い。同じクラスだったけど、桜井とはそれきりほとんど口を利かなかった。

はじめの一週間くらいは桜井、真田で番号順に席が決まっていたから「おはよう」「じゃあな」の挨拶くらいはしたよ。て言ってもいつもそれを言うのは桜井で俺はおどおど返事をするだけだったから、席替えしてからは本当に全然口をきかなかった。

桜井はけっこう真面目に授業を受けていた。

時々遅刻して来ることはあった。桜井が遅刻するときにはたいてい他校生と喧嘩をして生徒指導室に呼び出されたときらしい。

だけど一年生の時に授業をサボったり、学校を休んだりなんてことはしたことないと思う。

入学式の登場シーン見たときから、みんな桜井を恐れていた。

あいつはヤバイ、関わらない方がいいって思ってたから、クラスの連中は桜井を遠巻きにしていた。もちろん俺も。

だから桜井はいつも一人でいた。一人で教室の一番後ろの席について、何が気に入らないのかいつもしかめっ面で窓の外を眺めていた。

桜井と次に口をきいたのは確か去年の11月。

2年になつて桜井とはクラスが別れて、顔を合わせる機会もなくなつたから、掃除の時間に裏庭であつたときは思わず身構えた。

だつて絵に描いたような不良、桜井が人気のない裏庭にいるんだよ？怖いじゃん。すごい怖いじゃん。

しかも桜井は地面にうんこ座りつての？コンビニとか路地裏とかでヤンキーがよく座り込んでるあのポーズ。今は和式のトイレが少なくなつてきてるからあんま言わないのか。まあそんなことはどうでもいいか。

しかもその桜井の足下にはうつ伏せになつて倒れてる人がいて、全然動かないんだ。ますます怖いじゃん。

状況を見て、これは絶対に桜井が倒れてるヤツを殴つて、気絶してる間に財布でもパクろうとしてるんだつて、そう思った。

身体はすくんだけど、逃げなくちゃ俺がヤバイ。

桜井に気付かれないようにそつと後退りした、次の瞬間パツと桜井が振り向いて、ばつちり目があつた。

終わつた、て思つたら、桜井が言つたんだ。

「真田、助けてくれ」

逃げようとしたのにびっくりして思いがけず足が止まつた。

助けてくれて言われたのにもびっくりしたんだけど、それよりも桜井が俺の名前を覚えてたつてことの方にびっくりだった。

「具合が悪くて倒れたんだ。保健室まで運ぶの手伝つてくれ」

「え？」

「俺一人で困つてたんだ。真田が来てくれてよかった」

「え？え？」

何がなんやらよくわからなかつたけど、とりあえず桜井を手伝つて、倒れてるヤツを保健室まで運んだ。

倒れていたのは桜井のクラスメイトで、園芸部の手伝いをしにきたら具合を悪くしたらしい。

正直その話をきいたときは桜井に部活動を手伝ってくれるような友達がいいたなんて信じられなくて、かつあげしてる現場を俺に目撃されたから適当に嘘ついてるんじゃないかって思った。

桜井のクラスメイトを保健室に運んだあと、俺は一刻も早くその場を去りたくてそわそわしてた。なのに桜井は先生が「大丈夫だから」って言うのに、ベッドの脇の丸椅子に腰掛けて、じつと気絶したクラスメイトの側についていた。

帰るに帰れなくて、俺も少し離れたところに座って横目で桜井を観察した。

「こいつもともと身体が弱くてしょっちゅう倒れてるんだ。今日もあんまり顔色よくなかったから気にしてはいたんだけど、無理させちまったかな」

困ったように眉を八の字に下げて、すごく申し訳なさそうな顔をする桜井は噂にきく血も涙もない学園一の不良とは程遠い姿だった。その時ようやく桜井の話は本当なんだって思った。

桜井でも友達が倒れたらこんな情けない顔するんだってまじまじ見てたら、桜井が急に俺の方に顔を向けた。

「なんか、真田と話すの久しぶりだな」

桜井はなんでもないみたいに言ってたけど、俺は内心ドキドキだった。久しぶりも何も一年生の同じクラスだった時からほとんど会話らしい会話なんてなかったのに、桜井はどうゆうつもりで言ってるんだろう。ひょっとして入学式以来、俺が桜井のこと怖がって避けてたのがばれたのか。

「一年時同じクラスだったよな。入学式のとくに鼻血出してる俺に新品のポケットティッシュくれてさ。初対面なのに良い奴とか思ってたんだよ」

でもそれは桜井が「ティッシュある？」って訊ねてきたからで、あの時話し掛けられなかったら俺はみずから進んでティッシュを差

し出そうとはしなかっただろう。

「真田、あの頃からかなりでかい奴だったよな」

思わず「態度が!？」て聞き返しそうになった。どう考えたって身長のことだろうに、緊張のあまり思考回路がおかしくなっていたんだよ。

「俺も中一にしてはけっこう背高いとは思ってたんだけど、真田見たときには負けたあつて思った」

「そう、なんだ」

おまえ無駄に図体でかくてうぜえんだよ、て言われてるのかと思つて変な汗が出てきた。

「いくつあんだ？」

「え？」

「身長だよ」

「春の記録で180とかだった気がする」

「おー、すげえな。成長期だからまだまだ伸びんじゃねーの?2メートルも夢じゃないな」

桜井はニツと笑つて俺のことを褒めてくれた。

俺はしどろもどろになりながら「そんなにはいらないう」て言うのが精一杯、気のきいた返事も出来なかった。

ごくあたりまえのことなんだけど、桜井も誰かを褒めたり冗談言ったり、人前で笑つたりするんだなつてしみじみ思つたことを覚えてる。

それから先生に保健室を追い出されて、何でか二人で体育館裏に戻ってきた。

もうその時には不思議とさつきまでの逃げ出したような気持ちはなくて、なんとなくまだ一緒にいてもいいかなあて気分になってた。

「悪かったな真田。掃除しに来たんだろ？俺がやつとくから帰っていいぞ」

「や、でも、」

「俺のせいで時間とらせちまったんだからいいって。どーせ俺も裏庭の草むしりしなくちゃいけなかつたし」

草むしりて普通、用務員のおじさんがやってるもんじゃないか？

「何で桜井……くんが草むしりなんか」

「桜井でいいよ。君付けされると背中が痒くなる。俺、園芸部なんだよ。て言っても正式には認められてなくて、園芸部を認めてもらいたければ学校のために奉仕しろって、よく生徒指導部の先生からこうやって雑用任されんだ。やっぱり学校側からあんまい顔されてなくてさ。まあとーせ園芸部を認める気はないんだろうけど」

「なにそれ。何で園芸部作るのにそんなことしなきゃいけないんだよ。横暴じゃん」

「そりゃ園芸部作りたいつて言ったのが真田みたいな真面目なヤツならけっこう簡単に認めてくれただろうけど、俺みたいなのが『園芸部作りたんです』なんていつて、『はい、そうですか』とはいかないだろ。実際、何を企んでるて問いただされたし」

俺みたいなのていう、自嘲的な言い方がちよつと気になった。

「どうしてそんなこと言われてまで園芸部作りたなんだ」

「んー。正確にいうと園芸部が作りたんじゃないじゃなくて花壇が作りたんだ。一年ときから思ってたんだよ。花壇を作ったらいいんじゃない

ないかなって。裏庭で人がより付かないイメージあるけど、実はけっこう人の出入りがあったさ、ここで昼飯食ってるヤツもいるんだ。そのぶん裏庭に置き去りにされるゴミなんかも多いけど、花壇があればゴミを捨ててくヤツも減るだろ？」

「そうかもしれないけど。裏庭事情に詳しいな」

「一年時の教室で窓が裏庭に面してたから」

「ああ、だからか」

一年の時、桜井が窓の外を眺めていたのはそうゆう理由だったのか。

「花壇作るには色々と材料が必要だから、早く正式な部として認めてもらって学校から補助金出してもらえるようにしたいんだ」

そう語る桜井の目はすごく真剣で、それでいてどこか楽しそうだった。

「桜井てすごいな」

「どこが。何もすごいことなんかしてねーよ」

桜井は否定したけど、その時、俺は本気ですごいって思った。

裏庭がゴミまみれだなんてそれまで知らなかったし、知ってたとしても、だから何？って感じでなんとも思わなかっただろう。

だけど桜井は何とかしようって考えて、自分一人で頑張ってる。

桜井が園芸部を作りたいがってるのはいわば学校のためなのに、学校側は知らないで、桜井に雑用ばかりやらせて、それでも桜井は文句一つ言わずに頑張ってる、それってそんな簡単に出来ることじゃないよなって思ってる。

「やっぱり桜井すごいよ」

「そうか？」

「そうだよ」

「そっか。ありがとな」

桜井はそこで照れたみたいに笑った。

学園一の不良なんて微塵も感じさせない、俺と同じ、14歳の普通の中学生の顔をしてた。

すごく単純なんだけど、保健室行って帰ってくるその短い時間で桜井の印象がすごく変わったんだ。

桜井て見た目は怖いけど、本当はすごいいいヤツなんじゃないかって、そう思ってた。

「桜井、草むしり一人でやるのか？」

「俺意外に園芸部員いないしな」

「俺も手伝っていい？」

「は？」

「いや、迷惑ならやめるけど。一人より二人のが早く終わるかなあ」と

「や、迷惑ではないけど」

「ならいいよな」

桜井はまだ何か言いたそうだったけど、無視して勝手に草むしりを始めた。

桜井はじーっと俺を見下ろして、少ししてから言った。



「真田は俺のこと怖くないの？」

「え？」

桜井は俺の前にしゃがみこんで射るような目で真っ直ぐ俺を見ていた。桜井の目を真正面から見たことなんかなかったから、鋭い目付きに背中がゾクツとした。恐怖を感じて目を逸らしたくなっただけど、それをやったら桜井に軽蔑されるだろうって思ったから、頑張っつて笑顔を作っつて、なんとか答えた。

「怖くないよ？」

桜井は視線を外して、「気を悪くしないでほしいんだけど、」と前置きして、

「俺、真田に嫌われてると思ってた」

思わず言葉につまった。

「俺っつてこんなだから、人に嫌われたり避けられたりするの慣れてるからいいんだけどさ。入学式で席が隣同士になった時から、真田、俺のこと見て泣きそうな顔してたよな。たまに廊下とかですれ違っつと思いつきり身体に力入れて緊張してるのわかつたし。ああ、俺、嫌われてんだ。まあ仕方ねーよなっつてずっと思つてたんだよ」

桜井の言葉に何も言えなかった。全部本当のことだったから。気付かれてないだろうとか思つてたけど、桜井は全部知つてて、何も言わないでいただけだったんだ。

あの頃の桜井でどんな気持ちだったんだろう。今考えると嫌なやつだなっつて自分でも思っつ。

「さっきだっつて、ここに真田が来てくれたとき、声をかけたら絶対走っつて逃げるだろうと思つた」

実際逃げようとしてたから、否定はしなかった。

「だけど真田は逃げないで俺のこと手伝つてくれたよな。保健室でも先に帰つてもよかつたのにあいつのこと心配してか一緒に待つて

てくれたし、俺が話し掛けても嫌な顔しなかった」

それは違う！そう言いたかったけど、言えなかった。ここで否定したら桜井はどんな顔するかな？そう思ったら言えなかった。

「俺、真田のこと誤解してた。真田はただ単に人見知りなだけだったんだな」

それも違うんだけど、いや人見知りはするけど桜井に対する態度は人見知りからじゃなくて、でもそう言ったらもう口きいてもらえないかもしれないと思ったたらやっぱり何にも言えなかった。

「だから今、ちよつと。というより、かなり嬉しいんだ」

桜井は馬鹿みたいに真面目な顔で、

「俺、嫌われてなかったんだーで、なんか安心した」

それから「なに言ってるんだかな」で桜井は笑ってたけど、俺は笑えなかった。

桜井は優しい奴だから、もしかしたらあの時俺が「怖くない」って言ったの嘘だって気付いてたのに、わざと気付いてない振りをしてくれたのかもしれない。

たったそれだけの短い時間だったけど、桜井といて俺がどんなに小さくて、ずるくて卑怯な人間か思いしらされた。同時に桜井っていう人間にすごく興味を持ったんだ。花菱的なストリートな言い方をするならたぶん、桜井を好きになっただんだと思う。もちろん変な意味じゃなくてな。

だから、今まであいつに対してすごく失礼な態度とってきたその罪滅ぼしも兼ねて園芸部に入った。

ちよつと前の俺みたいに桜井のことを知らないヤツは俺が桜井に脅されて園芸部に入ったんだと思ってる。

奴等は桜井を悪く言うけど、俺は責めたり咎めたりすることは出来ないんだ。

ちよつと前は俺だって同じようなもんだっただから。

いつかあいつらにも桜井が本当はどんなヤツなのかわかってもらえたらいいんだけどさ。



「とまあ、こんな話。別に面白くもなんともないだろ?」

てつきり花菱は「そんなことないよ」素敵な話だね」なんて笑つてくれると思つたのに、何故か花菱は肩を落としてうつむいていた。「花菱? どうした?」

なんか俺、まずいこと言つたかな。

「羨ましいな」

下を向いたまま、ため息混じりに花菱は呟く。

「羨ましいって何が?」

「海生と桜井くんはお互いのことをよく理解してて、認めあつててきつと二人でいるとすごく楽しいんだろ? うね。親友つて言うんだろ? うね。僕にはそーゆーの無い」

「別に俺と桜井は親友というほど仲いいわけじゃないぞ」

親友。確かにいい響きだけど、桜井とつるむようになつてからまだ半年しかたつてないし、知らないことだつてきつとたくさんある。「時間なんか関係ないよ。お互いにどれだけ相手のことを思い合つてるかが問題なんだから。海生は桜井くんとたつた数十分、時間を供にしただけで、はつきり桜井くんを好きだと言えるくらいに魅力を感じた。それはきつと桜井くんも同じはずだよ。じゃなかったらあの桜井くんが海生を園芸部に置いとくわけないもん。同じ気持ちだから一緒にいられる。僕はそれが羨ましい」

「いいなー、海生は」と花菱は下を向いたままぼそぼそ喋る。さつきまでの底無しに明るい笑顔は何処へ行つてしまったのか。

「そんな落ち込むなよ。花菱にだつてちゃんといるだろ?」

うつむいていた花菱はパツと顔をあげ「何のこと?」と間抜けな返事をする。

「花菱にもちゃんと親友がいるじゃないかって」

「親友? 親友がどうしたの?」

「だから、花菱は俺と桜井が親友みたいにお互いに信頼しあつて仲が良いのが羨ましいんだろ？自分にはそこまで親しい友達がいなからつて落ち込んでたんじゃないのか？」

花菱は不思議そうに真ん丸の目を二三回瞬きさせてから、「ああ！」と声を上げた。

「そうだ。そうだよ。僕には親友がないんだよ。ごめんね、海生」

「何を謝ってるんだよ」

「僕、自分でも何言ってるんだかわからなくなっちゃって、混乱させちゃってごめんね」

「混乱して何が？」

「何でもない。何でもないから気にしないで。で、僕の親友って誰のことかな？」

花菱はニコニコ笑って話を促したが、何か様子が変わった。何か笑って誤魔化したみたいだ。

「花菱さ、」

「うん？」

無邪気な顔して俺を見上げる花菱はいつもとんなら変わらない。何か変だと思つたのは俺の勘違いだったのか、それとも何でもないような振りをしているのか。判断がつかない。追及するのはやめたほうがいいのか。

「花菱には倉本がいるじゃないか」

「レオ？」

「花菱は倉本と仲良いだろ？」

「うん、レオとは仲良しだけど、僕よりも海生のほうがレオと仲良しに見えるよ」

「はあ！？」

また花菱は無邪気な顔してとんでもないことを言う。

「仲良しっていうか、むしろ俺、あいつ苦手なんだけど」

「ええ？ そうなの？ そんなふうには見えなかった。だって今日の昼休みだって二人で楽しそうに遊んでたから」

「昼休み？・・・あれか」

あれがどうしたら楽しそうに遊んでるように見えるんだ。耳をひっぱられ、頬をつねられ、騒いだら口にペットボトルぶちこむぞと脅迫され、なにもそこまで言わなくてもいいのにてくらしいに罵倒されたんだぞ。

「花菱は普段何を見て生きてるんだ？ その眼鏡、ちゃんと度あつてるのか？」

俺の言葉になぜだか花菱は楽しそうに笑って、

「それ、よく言われるんだよねー」

「倉本にか？」

「うん、レオもそれに近いこと言う」

レオもつてことは他にもいるんな奴らから言われてるってことだろう。

「やっぱり俺なんかより花菱のが倉本と仲良いと思うよ。花菱にとつての親友で、倉本なんじゃないのか？」

「え？」

首をかしげ固まる花菱。その間、約三秒。

「え、僕とレオって親友だったの？」

「いや、実際どうなのかは知らないけど。俺はそう思ってた」

だって桜井とは違った意味で倉本って近づきたいから。クラスで倉本が花菱以外の男子と一緒にいるとこって見たことないしな。

「何で？ レオは全然近づきがたくなってるよ？ こんなこと言ったら失礼だけど、桜井くんは見た目が怖そうだから仕方ないとしてもレオはすごい綺麗な顔立ちしてるじゃない？ 中性的で、女子の中

にはレオのことを『天使みたい』なんて話してる子もいるんだって」「そりゃ倉本の見た目がいいのは認めるけど、顔がいいぶん中身が最悪じゃないか」

「え？どこが？」

花菱、本気で言ってるんだらうか。

「全体的に」

「そんなことないよ。海生がレオのことをよく知らないだけで、レオは本当にすごくいい子なんだよ？」

そこまで言つて、ハツと花菱が口をつぐむ。

「そうか、これが。他の人にはわからないその人の魅力を自分だけが知っている。これが親友て奴なのか。海生にはわからないレオの魅力は僕は知っている。つまり僕とレオは親友てことか」

「うわぁ」と感嘆の声を上げ、目をきらきらさせた花菱は喜びいさんで万歳をする。

「僕とレオは親友だったんだ！僕にもちゃんと親友がいたんだ！」

「よかったなー、花菱」

何か違う気がしたけど、花菱があんまりにも嬉しそうな顔をしてるから余計なことは言わないことにした。

「明日、レオに会ったら教えてあげよう」

「それはやめた方がいい気がする」

倉本のことだから無邪気な花菱が「僕たち親友だよなー」なんて言つたら、馬鹿にしたみたいに鼻で笑うかもしれない。いやそれならまだしも、さげずんだ眼で睨み付けるかもしれない。いやいや、もしかしたらキレて「身のほど知らずの虫けら野郎が。僕を親友呼ばわりするなんて百億光年早いんだよ」て罵倒するかも。そんなんなつたら花菱が可哀想すぎる。

「やつだなー、海生てば」

おばさんが話をするときみたいに手をひらひら振りながら、花菱は大口をあけて笑う。

「レオがそんな酷いこと言うわけじゃないじゃないか」

「いや、あいつなら笑顔で酷いこと言うと思うぞ」

「もし言ったとしても、それは本心じゃないから僕は全然平気だよ」

「本心じゃなかったらなんなんだ」

「照れ隠しに決まってるじゃないか」

「照れ隠し、ね」

あいつが照れることなんかあるんだろうか。

「そりゃあるよ。レオだって人間だもの。僕、レオとは一年生の時から同じクラスでね、二年のクラス替えでも同じクラスになれたのが嬉しくって『今年もレオと一緒にだなんて嬉しいな。この調子で来年も同じクラスになれたらいいね』て言ったんだ」

また、よくそんな聞き方によつては恥ずかしかったり気持ち悪かったり気まずかったりする台詞をさらつと言えたもんだな。

「そしたら倉本はなんだつて？」

「引きつった笑みを浮かべて『僕はごめんこうむりたいね』だってほらね、レオだって照れるときは照れるんだよ」

はたして、それは照れてるっていつのか。

そこでふと昼間のことを思い出した。花菱が表れたとき、倉本は眉をぴくつと神経質そうに動かした。あの時、倉本が何を思ったか、今ならなんとなくわかる気がする。

「花菱つて実は天然だったんだな」

「それも、よく言われるんだよね。僕自身はそんなことないと思うんだけど。何でなんだろうね？」

そう言つて、花菱は不思議そうに首をかしげていた。



花菱が帰る時間になっても桜井は現れなかった。

「ごめんな、花菱」

「何が？」

「トイレ掃除手伝わせるだけ手伝わせて、園芸部らしいと何も紹介できなくて」

「なんだそんなことか。気にしないで。園芸部、すごい楽しかったから」

楽しかったつて、トイレ掃除がだろうか。

「僕こそごめんね。塾がなかったら桜井くんが来るまで待つてられたんだけど。まあでも、明日も遊びに行くから」

「え？」

「え、ダメ？迷惑？」

「ええ、ダメじゃないし、迷惑でもないよ。全然オツケー」

「よかったー。明日は桜井くんに会えるかな？楽しみだなあ」

ほっと息をつき、安心したように笑う花菱は俺と同じ年のはずなのに、なんだかずつと子どもっぽく見えた。

花菱を校門まで見送り裏庭に戻ると、タイミングが悪いことに見覚えのある後ろ姿があった。

「桜井！」

振り向いて、目があった瞬間、桜井はなんだかすごく心細そうので、今すぐにでも泣き出してしまっうんじゃないか、そんな情けない顔をした。

「どうしたんだよ、桜井？何をそんな悲しそうな顔してるんだ？」

桜井はうつむき、ぼそぼそと「すまねえ」とつぶやいた。

「何が？」

「便所掃除。一人で大変だっただろ？俺が今日は便所掃除だって言ったのに。約束を守らない男。最低だな俺って」

「気にすんなよ。桜井が遅れてくるってことは何か理由があるんだろ？また呼び出されてたのか？」

「関口に。ちよつと廊下を走ったくらいで呼び止められて二時間説教だよ。解放されたあとダツシユで体育館まで行っただけど・・・で、これじゃただの言い訳だな。本当にすまない」

桜井は肩を落として暗い声で俺に謝る。俺にトイレ掃除をさせるはめになったのが申し訳ないのはわかるけど、たかだかトイレ掃除くらいでそこまで暗くなることないだろうに。お先真つ暗、人生終わりってわけじゃないんだから。

「そんな時もあるって。それに俺、一人でトイレ掃除してたわけじゃないしさ」

「は？」

桜井が顔を上げて訝しげな顔をする。獣のような鋭い目付きに深く刻まれた眉間の皺。

桜井のこーゆー顔って普通の人なら眼もあわせられないくらいに怖いんだろうな。桜井とつるむようになって半年たつけど、俺だつてたまにびくつくときがある。

「一人じゃないって、誰か来てたのか？」

「うん。同じクラスの、知ってるかな？花菱 聖って言うんだけど」「花菱？」

桜井の眉が釣り上がり、瞳孔開き気味の眼がさらにくわつと見開かれ、思わず身構える。

「・・・ごめん、俺、何か悪いこと、言った？」

「ああ、ごめんな。怖がらせようと思ったわけじゃないんだ。ちよつとびつくりしただけで」

「俺こそごめん。怖がって」

桜井は少しだけ微笑んでまたすぐ真顔に戻った。

「花菱って、生徒会長のあの花菱だよな？」

「その花菱だよ」

「あー、そう」

桜井は地面を睨み付け吐き捨てるように、

「関口の息がかかった奴がいったい何しに気やがったんだ」

「何って、園芸部の仮入部？」

てことにしてトイレ掃除を手伝ってくれたんだよな。結局花菱は何が目的で園芸部に来たんだろつ。

「明日も来るって」

「はあ！？」

すごく嫌そうな声、表情にたじろぐ。俺、もしかして余計なことしたかな？

「あ、や、別にいいんだけども」

「花菱、トイレ掃除しただけなのに『楽しかった』って言ってた。けっこう園芸部に興味持ってくれたみたいだったよ」

「そうか。そいつはよかった」

よかった、て言うならもう少し嬉しそうな顔をしたらしいのに。

明らかに桜井は迷惑そうな顔をしている。

「花菱は桜井のこと良い奴みたいに言ってたよ」

珍しく桜井がきよとんと気の抜けた顔をした。「突然何を言いだすんだ」って顔だった。花菱と一緒にいたから唐突に話をする癖がうつったのかも。

「それがどうかしたのか？」

「いいや、別に」

花菱は桜井にも園芸部にも興味を持ってくれた。桜井のことは素敵な人だろうとも言っていた。花菱はすごくいい奴なのに、よく知りもしないで、生徒会の人間だからって嫌な顔することないじゃないか。て、思っても口にするには出来ない。ちよっと前の俺だつて桜井のこと嫌だなんて思ってたから。でもな。なんかな。そんなあからさまに嫌な顔することないのにな。

「じゅめん」

桜井がまたなんだかすごく心許ないような、申し訳なさそうな顔で俺を見ていた。

「花菱は海生の友達なんだよな。それなのに嫌な顔してごめん」

桜井、嫌な顔してるとって自覚はあったのか。

「俺、別に何も言っていないんよ？」

「顔に出てた」

「そうか・・・何かごめん」

「いや、俺のほうこそ本当にごめん」

「いやいや・・・て、收拾つかなくなりそうだからやめよう」

なんとなく気まずい空気になって、お互い黙り込む。何か喋らなくちゃとは思っても、こうゆう時に自分から話をするの苦手なんだよな。ああ、ここに花菱がいてくれたら、底無しに明るい笑顔で場を和ませてくれるのに。

あ、今は花菱のことで気まぶしくなったんだっただな。

「今日はもう帰ろう」

桜井は自然な笑みを浮かべて言った。

「待たせちまったお詫びになんか奢ってやるよ」

「おお！やった」

桜井とつるみ始めて半年。まだまだ知らないことはたくさんある。花菱は俺と桜井のことを「親友」なんて言ってたけど、こんな微妙な関係を見てもあいつは俺らを親友だなんて言うんだらうか。

先に歩き始めた桜井の後ろを少しだけ離れて歩きながら、思った。

「やだあ、もう帰ってきたの?」

玄関のドアを開ける音が聞こえたのか、階段の上から母ちゃんが顔を出して言った。

「ただいま。もうって7時すぎてるけど。俺の部屋で何してんの?」

「ちよつと捜し物をね」

「捜し物?」

二階に上がると、昨日まではそこそこキレイだった部屋が今は空き巣にでも入られたかのようにぐちゃぐちゃになっていた。

「何これ」

「ハルちゃんに昔のアルバム見せてあげようかと思って探してたのよ」

「アルバム探すのにタンスの中まで見るか?」

しかも中身は全部出されてる。探し方が尋常じゃない。

「ついでにいかがわしい本でも見つけたら捨てようかと思ってたのよ」

「・・・見た?」

「まだ探し中。どこに隠してあるの?」

「聞かれて素直に言うわけないだろっ!」

「そうよねえ」

母ちゃんがふーつと長いため息を吐く。

「ハルちゃんも女の子だからねえ。色々まずいでしょ?もし何かの間違いで、そーゆーものが見つかったら考えて怖くない?だから安全な場所に移動させなきゃなーと思ったんだけど」

母ちゃんの言うことにも一理あるけど、なんか芝居臭い。

「ちなみに安全な場所ってどこ?」

「お母さんの部屋にある金庫の中とか。お母さんとお父さん以外番号知らないわよ?」

それって安全と言えるのか。むしろ危険な感じがするけど。

「まあ、気が向いたら持ってきなさい。隠しといてあげるから」  
母ちゃんはニッコリ笑って、部屋を出ていった。

「・・・て、片付けどうするんだよ!？」

母ちゃんは下に降りていき、振り返るうともしなかった。

「なんだかなあ」

散らかすのは得意でも、片付けるのが苦手な主婦でどうなんだろう。とりあえず本が見つからなかっただけよしとしよう。

適当に部屋を片付けて、そういえば家に帰ってからハルちゃんに会ってないことに気付いた。

別に用事はなかったけれど、ハルちゃんにただいまを言おうと下においていった。

ハルちゃんが今使っているのは単身赴任中の父ちゃんの部屋だ。

六畳一間の和室で、開閉式のドアなんてのはついていない。だけどハルちゃんはお客様だし、一応女の子だから、部屋に入る前に外から声をかけた。

「ハルちゃん、入ってもいい?」

部屋のなかからは物音一つしない。靴は玄関にあったからいないわけないのに。

「ハルちゃん?入るよ」

襖をひいて中に入る。手探りで電気の紐を引き、足元に転がるハルちゃんを見つけ、飛びずさる。

危うくハルちゃんを踏ん付けるところだった。何も部屋のと真ん中で寝ることはないのに。

ハルちゃんは両手両足を目一杯伸ばして、気持ち良さそうに寝息をたてていた。

近くに座り、まじまじとハルちゃんの寝顔を見つめる。

そういえば子どもの頃はいつもこうやってハルちゃんが寝てるのを眺めてたな。

ハルちゃんは俺より昼寝の時間が長くて、いつも俺のほうが先に

起きてた。

待てを言い渡された犬みたいにハルちゃんのそばに座り込んで、じーっと顔を見つめて、心の中で早く起きろーって念じながらハルちゃんが起きるのを待ってたっけ。

ちよつと懐かしくなつて、昔みたいにハルちゃんの顔に自分の顔を近付け、心の中で起きろーと念じてみた。

俺の想いが通じたのか、おもむろにハルちゃんが目を開けた。寝起き特有のぼーとした目で天井を見つめ、近くに座る俺を見る。  
2、3度瞬きをしたあと、ゆっくり身を起こし、言った。

「近くね？」

「ごめん、驚かせちゃった？ハルちゃんにただいま言っていなかったなーって思ってたんだ。ただいま」

「おかえり。遅かったな」

「部活やってきたから」

部活という名目の便所掃除だけ。

「部活？」

寝起きの一服しようと思ったのか、口にタバコを挟み、ハルちゃんには言っ。

「なに、お前部活入ってるの？」

「うん。園芸部に」

ハルちゃんはタバコを一度口からはずし、「は？」と言った。

「園芸部？」

「園芸部」

「何でまた園芸部？」

「え、ダメかな、園芸部？」

「ダメってことはないけど、園芸部。植物好きだったっけ？」

「いや、そんなに興味はない」

そういえば夕方、花菱ともこんな会話をしたな。

「じゃあ何で園芸部？」

「説明すると少し長くなるけど？」

ハルちゃんが頷いたので、俺は花菱に話したことをハルちゃんにも話して聞かせた。



話し終わったとき、肩を落としがっくりうなだれていた花菱に対し、ハルちゃんはタバコに火を点けるのも忘れてぽかんと俺の顔を見ていた。

「ハルちゃん？どうしたの？話、長すぎた？」

ハルちゃんは俺の質問には答えず、代わりに手を伸ばしてきた。

ハルちゃんの手は白くて指がほっそりしていて、とても綺麗で、女の子の手だった。そう思った瞬間、ハルちゃんの両手が俺の頬に触れて、心臓が大きく高鳴った。

「ハルちゃん？」

「海生？」

「なんでしよう？」

「お前、海生だよな？」

「そつだよ」

「本当に海生か？」

「俺の偽物とかいるの？」

あ、昨日もこんな話したな。いや、そんなことよりこの手はなんなのさ。

「いや。お前って本当に、」

ハルちゃんがニイッと口元を歪めた。と思つたら、これでもかとおもいつきり俺の頬を真横に引つ張った。本日2回目。蘇る昼間の恐怖。

「なんだよまあ！9年も会わないうちに本当に男前になりやがって嬉しいとおりにして何かムカつくなあ！昔はいつも俺の後くっついて歩いてたあの海生が、近所の悪ガキに意地悪されるといつも泣きながら『ハルちゃん助けてえー』とか言つてたあの海生が、まさかこんなカツコよく成長するとはな。時の流れとおつそろしいな。なんか悔しいな」

ハルちゃんは女の子のらしかぬ豪快な笑い声を上げ、俺の頬を引っ張った。そして一度手を離して、もう一度優しく俺の頬に手を添えた。

「その桜井くんとやらもカッコいいけど、お前もすげえカッコいいよ。漢だな」

優しい顔したハルちゃんに真っ直ぐ見つめられて、よくわからないけど、なんだか恥ずかしくって目を逸らしたくなった。

「俺は、桜井に比べたら全然かつこよくなんてないよ」

「そんなことねえって。友達のために全てを捨てて一緒に戦う、なかなかできることじゃないぞ。美しい友情じゃねーか」

「ハルちゃん大げさだよ。俺は何も捨ててないし、戦ってもない。美しい友情とか言われても、桜井ともちゃんと話すようになってまだ半年だし」

「大げさなもんか。実際桜井くんとつるみ始めて、お前の生活変わったんじゃないの？どつちかという悪いほうに？」

ハルちゃんの目の中に情けない顔した俺が映る。我慢できずに目を動かしたらハルちゃんが静かに笑った。

昔からこうだ。ハルちゃんの目は何でも見透かしてしまう。何も言っていないのに、全部わかってしまう。俺が隠していること言いたくないこと、すべて言い当ててしまう。

「ちょっとだけ、変わったよ。今まで普通に接してくれた友達がよそよそしくなったり。逆に先生からはよく声をかけられるようになった」

今ではクラスの奴とは必要最低限のことしか喋らない。今までと変わらず友達感覚で話してくれるのは花菱と紫音さんくらいだ。

「海生は嫌じゃないのか？桜井くんと一緒にいたら周りの奴らから白眼視されるんだぞ？」

「いい気分はしない」

「ただ責めることは出来ない。何度も言っただけど、少し前の俺もそうだったから。」

「桜井くんから離れようとは思わないのか」

「それ昼間も言われたな」

「誰に？」

「クラスメイトに」

そこでまたふと思い出す。桜井とつるみ始めて半年。クラスの友達は桜井を恐れてか俺に話し掛けてこなくなつたのに、逆に半年前まではあんまり話したことがなかった倉本がやけに俺に絡んでくるようになったな。理由はわからないけど。

「俺は桜井のこと友達だと思ってるし、これからもいい友達でいたいと思ってるから、離れようとは思わないよ」

というか変な話、今の俺には花菱と紫音さん、それから桜井以外友達らしい友達がいない。それなのに桜井から離れたら俺はまた一人友達をなくすことになる。

「それを聞いて安心した」

頬から手を離し、ハルちゃんは優しく俺の頭を撫でながら微笑んだ。

「そうゆう気持ちがあるなら、大丈夫だな。周りが何を言おうと、お前たち二人をどうゆう目で見ようと、そのうち気にならなくなる。その頃には海生も桜井くんと心を通わせた、本当の友達になれるよ」

「そうだね」

ただ、それはお互いに友達だと思っていればの話で、正直、桜井は俺のことをどう思ってるのかよくわからない。

桜井は部活の時以外、例えばたまたま廊下ですれ違っても、偶然学食や購買で会うことがあっても、反応を示すことがほとんどない。俺から声をかけても、いつもと変わらない獣みたいな鋭い目で一瞥し、ちよつと手を挙げて、何も言わずに去っていく。

始めのうちはあまりの反応の薄さに、もしかして俺って嫌われてるのかなって心配になったりもした。

だけど部活のことで用があれば、申し訳なさそうな顔しながらも自分から話し掛けてくるし、むしろ部活中だと桜井のほうから話をふってくることが多いから嫌いとか嫌だとか思ってるわけではないんだろう、たぶん。

「でもやっぱり不安になるんだ。俺が園芸部に入りたいって言った時、桜井はすごく動揺して、渋ってたから」

どうしてもって言う俺に桜井は困ったみたいに笑って、仕方ないなって感じで「いいよ」って言った。

あの時もしかしたら、桜井は内心では俺のこと嫌がってたんじゃないか。

半年間毎日顔を突き合わせた結果、慣れてしまったけど、本当はあの時、内心では迷惑だつて思ってたんじゃないか。

桜井は優しい奴だから、口にしなかったただなんじゃないか。でもまさか桜井にそんなこと面と向かって聞けるわけもなく、桜井が何を考えているのかわからないからますます不安になる。

俺、園芸部にいいのかな。桜井と一緒にいて本当にいいのかなって。

「なんか、お前ら付き合い始めて1ヶ月のカップルみたいだな」  
「カップル？」

けたけた笑いながらハルちゃんは俺を指差す。

「相手の気持ちが変わらなくて不安になっちゃってる彼女がお前。私は毎日好きって言うてるのに彼は何も言ってくれないとか、本当は一線こえたいのに、奥手な彼氏にじれったくなっちゃったり。しまいにゃ、ねえ私のことどう思ってるの？本当に好きでいてくれるの？とか逆ギレするんだよな。女々しいお前にはぴったりじゃん」

「女々しいって、」

これはもしかしてバカにされてるんだらうか？  
あんまりにも楽しそうに笑うハルちゃんを見ていたら倉本の意地悪な笑みとだぶって見えて、気分が悪くなった。

「ハルちゃん。俺、マジメに話してるんだけど」

「だってお前見てると面白くてさ。異性間での恋愛ならまだしも、野郎同士の友情話で『不安になる』なんて言葉を聞くとは思わなかった」

「悪かったね、女々しくて。俺なんかよりハルちゃんのがズーっと雄々しいよね」

そういえばハルちゃんは昔からこんな感じで人をからかうのが好きだったな。

見た目はおとなしくて可愛らしい女の子なのに、人をからかったりいたずらするのが大好きで、ガキの頃はしょっちゅうハルちゃんにからかわれた。ハルちゃんにからかわれると、悔しいっていうよりハルちゃんに馬鹿にされたってショックが大きくて俺はいつもぴーぴー泣いてたっけ。

そんなこともあつてか、好奇心旺盛で気が強くて元気いっぱいなハルちゃんと、臆病で気が弱くて体力もなかった俺は、いつも周りに「ハルちゃんが男の子で、海生くんが女の子ならよかつたのにな」って笑われて。でもそう言われるのが、ハルちゃんも俺も実はすごい嫌だったんだよな。

「大丈夫だよ。海生のことが本当に嫌だったら園芸部に入りたいたって言った時点で迷惑だって断ってるだろ。それを言わなかったって

ことは、桜井くんはお前のことを嫌っちゃいないよ」

小さい頃の記憶に馳せていた俺はハルちゃんという言葉を理解するまで、少し時間が掛かった。

「でも、それは桜井が優しいから本当は迷惑なのに口にしなかっただけかもしれない」

「そうか？」

「そうかもしれないじゃない？」

「それはない」

「何でそう言い切れるの？」

「お前は桜井くんを信用してないのか？」

「質問を質問で返すのは反則だよ」

「誰がそう決めたんだ？」

「ハルちゃん、だから俺は真面目に話してるんだってば」

「俺だって超真面目に話してるぞ？」

ダメだ。やっぱりハルちゃん俺のことをからかって遊んでる。俺は本気で悩んでるのに、ハルちゃんだからと思って誰にも言ったことない気持ちを話したのに、ハルちゃんは俺が悩んでるのが面白くて仕方がないんだ。からかうネタが欲しかっただけなんだ。

「もういいよ、ハルちゃんなんか」

「拗ねるなよ」

「ハルちゃんは俺のことからかいたいだけなんだろ」

「そんなことないって」

ハルちゃんは否定する、が、そう言う顔がすでににやけてる。

「そうやっていつまでも馬鹿にして笑ってればいいだろ」

ハルちゃんなんか大嫌いだ・・・とはさすがに恥ずかしいから言わなかった。

それを言っているのは小学生までだろう。

「待ってって」

顔をがっちり手で押さえこまれ、またハルちゃんと正面から見つめあう形になる。だけど今度は恥ずかしくて目を逸らしたいなんて

気分にはならなかった。

からかわれた怒りからハルちゃんを真正面から睨み付ける。ハルちゃんの顔はもう笑っていなかった。

「桜井くんはお前が『怖くないよ』って嘘ついたときなんて言った？『嫌われてたんじゃなくて安心した』って言ったんじゃないのか？」

「え？」

「そうだ、確かに桜井はそう言った。『嬉しい』って、大真面目な顔して『安心したって』」。

「普通に考えて、自分が嫌いな人間にそんなこと言うと思うか？いくら桜井くんが優しい性格で、お前に対して気をつかっていたとしてもそんな誤解を招くような発言しないと思うぞ」

「誤解って？」

「『嫌われてたんじゃなくて安心した』って、海生には嫌われたくなかったってことだろ？言い方を変えれば海生には自分のこと好きでいて欲しかったってことじゃん？もっというなら桜井くんは海生と友達になりたかったってことだ」

「それは意識しすぎだと思うけど」

でも本当に桜井がそう思っていたとしたなら、嬉しいような、気恥ずかしいような、申し訳ないような、やっぱり嬉しいような。

「それなら何で桜井は部活以外で会うとあんなにそっけないんだろ？まるで俺と一緒にいるのを見られるのが嫌みたいに。」

「さあ？気になるなら聞いてみれば？」

あっけらかんと言いつつ放つハルちゃんに思わずため息が出る。

「他人事だと思って簡単に言うてくれるよね。それが出来たらこんなに悩まないよ」

桜井は何で部活以外で会うとあんなにそっけないんだ？なんてずばつと聞けるほど仲が良いわけじゃないし、そもそもつい半年前まであいつのこと怖がって避けていた俺があいつにそんなこと言う権利はない。もしそんなことをきいたら今度こそ桜井に軽蔑される。



それにそんなこと聞いたら、俺が桜井のことを信用してないみたいで失礼だ。

「仮に、」

手を離し、ハルちゃんは畳のうえに放りっぱなしだったタバコを拾い上げた。

「もし本当に桜井くんが優しい振りして実はお前のことを嫌がっていたとしたら、お前は どうするんだ？」

「え？」

きつと俺みたいなのを現金なヤツって言うんだろう。ハルちゃんがそう言った次の瞬間にはもう、

「ハルちゃんてば、何言っちゃってんの？」

「は？」

「桜井はねえ、すごい良い奴なんだよ。真面目だし、気配り上手だし、男気溢れてて俺とは比べものにならないくらいにかっこいいんだ。その桜井が優しい振りしてだなんて。桜井は本当の本当に優しい奴なんだ。桜井がそんな簡単に人のこと嫌ったり避けたりするはずがないじゃないか」

「は？いや、だってお前が」

ハルちゃんは何か言いたげに口を開いたが、それ以上は言葉にならず、代わりに盛大なため息を吐いた。

「要はあれだな、海生は桜井くんのことが大好きで、すごく信頼していて、自分で文句つけるのはいいけど、人にけなされるのはすごく嫌なんだな」

「やめようよ、そうゆうストレートな表現。それに俺は桜井のことけなしてるわけじゃないよ。ちょっと不安になるって言っただけでそれに桜井のことよく知らないハルちゃんに、あいつのこと悪く言われたくなかったから」

「ダメな彼氏のムカつくところを散々愚痴って、話を聞いてた友達が賛同して何か言っと、『でも優しいところもあるんだよ？』とか言つて、結局惚気話にすり替えちゃうザッパルの彼女みたいなもんだ

な

「カップルに例えるのもやめようよ」

「真面目に話を聞いてやった俺が馬鹿だった」

「あれのどこが真面目だったのさ？」

「でも、それだけ彼を信頼してるなら大丈夫だな」

「だから、桜井と俺はカップルじゃないってば！」

「今言った『彼』はそっちの意味じゃねーよ」

ハルちゃんは一瞬本気で嫌そうな顔してから、俺の頭をぐりぐり掻き混ぜるように撫でて笑った。

「お前の話聞いただけだと、本当に桜井くんがお前に対してそっけない態度をとってるのかどうかはつきりわからん。もし仮にそうだとしても、きっと桜井くんには桜井くんなりの事情があるんだよ。お前が彼のことを大事な友達だと思ってるなら、この先どんなことがあっても彼を信じてやれ。お前が桜井くんのこと想ってるのと同じくらいに、桜井くんもお前のこと大事な友達だと思ってるはずだからさ」

不思議だ。花菱に同じようなこと言われたときにはこっぴげずかしくて居たたまれない気持ちになったのに、ハルちゃんに言われると素直に「そうなのか」と納得してしまう。

「友達は大事にしろよ」

「うん」

「もう悩むのもやめろよ」

「うん。大丈夫」

俺が頷くのを見て、ハルちゃんも満足したみたいに頷いた。

「しかし、よかったなあ。昔の海生はチビで弱虫だったから近所のガキどもにいじめられてばっかで、俺以外に遊ぶ相手なんていなかったから。桜井くんみたいな強くてカツコいい友達が出来て、本当によかった」

ハルちゃんはようやっとタバコに火をつけ、口にくわえると、すぐに静かに煙を吐き出した。

「な、写真とかないのか？」

「桜井の？あるよ。そういえばハルちゃんたち子ども頃のアルバムも探してたんでしょ？せっかくだからそっちも見ようよ」

一度自分の部屋に戻り、枕の下に入れておいたポケットアルバムを取り出す。

学校の写真は母ちゃんに見つからないようにいつもここに隠している。というのも以前、紫音さんと二人でとった写真が母ちゃんに見つかって、何で二人だけで写真をとったんだ、この子はお前の彼女なのか、片思いしてる相手なのか、なんて名前なんだ、どこに住んでるんだなど質問攻めにあい散々な思いをしたことがあるから。

だから母ちゃんには園芸部に入ったことは言っていない。ミィーナ母ちゃんに園芸部に入ったなんて言ったらまたしつこく色々聞かれるだろうし、桜井のことが知れたら絶対家に連れてこいなんて言ひ出すに違いない。そんなことになったら面倒だ。

ポケットアルバムを上着の内側に隠し、いそいそと階段を降りる。

「ハルちゃんおまたせ」

「おー。あれ？アルバムは？」

「桜井のは持ってきた。子どもの頃のやつはこの部屋の押し入れにあるんだよ」

押し入れの上段、ボール箱のなかに目当てのアルバムがあった。

「おばさんは絶対海生の部屋にあるからって言ってたのに」

「去年の年末の大掃除の時に場所を変えたのを忘れてたみたいだね」  
「・・・いや、あれは実は体のいい口実で、本当は俺の部屋の散策がしたかっただけだったりして。母ちゃんならありえるな。」

「まあいいや。とにかくアルバム見よ」

それから二人で部屋の真ん中に座り、アルバムを広げた。

一番最初に載っていたのは夏に海に行ったときの写真だった。

ヒトデを捕まえたハルちゃんが、ヒトデを振り回しながら、逃げ惑う俺を追い掛けている。

「この頃いくつだったけ？」

「俺が五歳くらいの時だと思うよ」

花火をしたとき、西瓜割りをしたとき、七五三や、冬場、雪が降ったときに雪合戦をしたときの写真。

ハッキリとは覚えていないけど、かすかに記憶の隅に残る楽しかった思い出が、一冊のアルバムに写真という形でたくさん詰まっていた。

「懐かしいね」

「こんな時があっただんな」

ページをめくると、今まで二人一緒に写ってきていた写真が、突然、ハルちゃん一人しか写っていないものに変わった。と言っても、ハルちゃんが1人で写ってるのはその一枚だけで、アルバムの一番最後のページに貼り付けてあった。

写真の中のハルちゃんはなんだかすぐくつまらなさそうな顔でピアノを弾いていた。

「何でハルちゃんしか写ってないんだろう？それにハルちゃんピアノなんかやってたっけ？」

「ガキの頃、ホントにちよつとの間だけな。これはうちの親父がとったやつだよ。俺がピアノを始めたのと親父が新しいカメラを買ったのが同じ頃だったから、記念にな」

「なんだかハルちゃん不機嫌そうな顔してるね」

「ピアノが嫌で嫌でしょうがなかったんだよ。ババアに無理矢理ピ

「アノ教室に入れられたからな」

「そうだったんだ。俺、ハルちゃんがピアノやってたの始めて知ったよ」

「忘れてるだけだよ。海生の前でピアノ弾いたことないから忘れて当然だよな。あの日も結局ピアノの発表会に行かなかったし」

あの日。たぶん俺とハルちゃんが最後にあつた日のことだろう。

「ハルちゃん、俺さ、あの日のこと、本当に全然何も覚えてないんだけどさ、何があつたの？」

ハルちゃんの顔から笑顔が消える。

「うわ、また何か聞いちゃいけないこと聞いちゃったのか。何で俺ってこう空気読めない奴なんだろう。」

一瞬反省をして、すぐに思い直す。聞いちゃったものは仕方ないし、それに初めから聞かれたくないことなら、思わせ振りにあの日の話なんかしなければいいんだよ。そう思って自分勝手な考えにまた反省した。俺ってやっぱりデリカシーない、嫌な奴かも。

「あの日、何があったか知りたい？」

ハルちゃんはいたずらっ子みたいな笑みを浮かべ、俺の目を見た。

「聞いてもいいの？」

「いいも何もお前だって知ってる話だよ。忘れてるだけで」

「あ、そうか。そうだよ」

でも少しだけ覚えてる。何があったのかは覚えてないけど、あの日、何かとても嫌なことがあったって。その嫌なことがあったから、ハルちゃんは女の子をやめて男になると宣言をして、ハルちゃんと俺は離ればなれになって、悲しい気持ちになった俺は、結局あの日のことを記憶の片隅に追いやってしまったというわけだ。

「あの日のことを聞いたら、ハルちゃんがどうして男になる決意をしたかわかるんだよ」

ハルちゃんは少し考えてから、「まあそうだな」と言った。

「俺があの日のことを聞いたからって、誰かが嫌な思いをすることはないんだよ」

「何の話だよ？」

「だって母ちゃんは教えてくれなかったんだよ」

ハルちゃんはどうして女の子をやめちゃうの？ハルちゃんはどうしてお家に帰っちゃったの？ハルちゃんとは今度いつ会えるの？、何度も何度もしつこく尋ねても母ちゃんは「ハルちゃんはそのうちまた遊びに来るから」としか言わなかった。

頭の悪い俺でも、母ちゃんが何か隠してるってことはすぐにわかった。何で隠す必要があるのか、さすがにそこまでは思いつかなかったけど、あの頃の俺はただ単純に母ちゃんが俺に意地悪してるんだと思って、母ちゃんのことをバカだの意地悪だの散々罵って泣き喚いて困らせたっけ・・・今更だけど、母ちゃん、本当にごめん。

「母ちゃんはある日にながかったか知ってるんだよ」

「そのはずだよ」

「じゃあやつぱり隠してたんだね」

今ならなんとなくわかる気がする。母ちゃんはハルちゃんに対してなのか、ハルちゃんの家族に対してなのか、はたまた俺に対してなのかはわからないけど、誰かに対して気を遣って本当のことをあえて俺に言わないでいたんだ。

「母ちゃんが隠してたこと俺が聞いても、いいのかな。俺が聞いたことで何かまずいことが起こったり、ハルちゃんやハルちゃんの家やうちの母ちゃんが何か嫌な思いをしたりとか、そうゆうことはないのかな」

「そうだな」

ハルちゃんは俺の目をじっと見て、ふっと軽く笑った。

「あの日の約束も忘れてた割りには、予想を遥かに上回る男前に成長したな」

約束。そうだ最後に会ったあの日に俺とハルちゃん、何か約束をしたんだっけ。内容はおるか約束を交わしたことですら俺は覚えてないけれど。

「もうやめるか、この話」

あ、まずい。話が終わっちゃっ。

「待って。一個だけ聞きたい」

学校でやるみたいに、勢い良く手を挙げて言ったらハルちゃんは笑って、

「はい、真田くん。一個だけ質問をどうぞ」

「はい、えー、最後に会ったあの日に俺とハルちゃんがした約束って何でしたっけ？」

「さあ何でしょう？」

「・・・ハルちゃんねえ」

真面目に聞いているんだから、ふざけるのやめてくんないかな。

「こつやっつてね、」

ハルちゃんはおもむろに立ち上がり、正面から俺のことをぎゅっ

と抱き締めた。と言っても俺のが背も高いし身体も大きいから、首に腕を巻き付けて抱きついてきたって言うほうが正しい。

一瞬なにが起きたのかわからなくてポカーンとしていたら、耳元でハルちゃんが俺の名前を呼ぶのが聞こえて、そしたら急に心臓がバクバク突っ走り始めた。

「ね、海生。約束しよ。いつかね、海生が今よりもっと大きく、ハルちゃんよりもずっと大きくなって、ハルちゃんを守れるくらい強い男の子になったら、あたし必ず海生に会いに来る。だから海生も、あたしのために強くたくましい男の子になって」

ささやくようなハルちゃんの優しい声。ハルちゃんの体温。女の子特有のふわりと甘い香りに、柔らかい身体。意識するなと言われども、ついつい考えてしまう、ハルちゃんは女の子なんだ。俺、女の子に抱きつかれてるんだ。

マラソンしたときみたいに胸が息が苦しくて、身体が熱くて、まるで身体中の毛穴が一気に開いたみたいに変な汗がだらだら出てきて、くらくらとめまいがする。

てか、どうしよう!?!俺、どうすればいいんだろう!?!



「海生、どうした？」

ハルちゃんがやっつと身体を離して、不思議そうに首を傾げた。

「ハルちゃんこそどうしちゃったのさ!？」

突然抱きついてきて、何事かと思ったよ。

「どうもしないよ。海生があの日した約束って何だったっけって言うから、教えてやったんじゃないか。あの日と同じシチュエーションなら海生も思い出すかと思って。場所は違うけど」

「だからって!そんな、何の前触れもなく、抱きつくなんて、自分で言って、恥ずかしくなってまた身体が熱くなってきた。」

「顔真っ赤だぞ。何を焦ってたんだよ、これくらいで」

ハルちゃんはいたずらっ子の笑みをうかべながら、俺の頭をくしやくしや撫でる。汗かいてるし、今は触らないでほしいんだけどな。

「ハルちゃんにとってはこれくらいでも、俺にとっては焦っちゃうようなことなの」

女の子に抱きつかれたなんて初めてだし、あんなに女の子と接近するのも初めてだから、すごいドキドキした。

「女の子に初めて触った感想はいいから、」

「そうゆう言い方やめてよ」

「約束、思い出したか？」

「へ?ああ、」

そうだそうだ、ハルちゃんに抱きつかれた衝撃が大きくて、そんな話してたのすっかり忘れてた。

「ごめん、思い出せなかった」

「だろうな」

「俺、そんな約束したんだ？」

「したんだよ。この約束をした時、しばらくこの家に来れなくなる

ってわかってたから、長く会えなくなる口実を何か考えなきゃって  
思ってた」

「咄嗟に思い浮かんだのがこれだったんだ？」

「咄嗟に、ていうのとは違うかな？言うべきタイミングだから言っ  
たって感じ。『あたし、海生としばらく会えなくなるんだ』って言っ  
た途端に『やだやだやだー！』て泣き出したから、たまりかねてな  
ハルちゃんがやりと笑って俺を見上げてきたが、俺は「あはは  
ー」と乾いた笑いで誤魔化した。情けなさすぎだよ、俺！五歳だか  
ら仕方ないかもしれないけどさ。」

「まさかあの小さくて気が弱かった海生がこんな男前になるなんて  
思わなかったから、昨日お前を見た時には驚いたよ」

ハルちゃんはそう言ってくれたけど、実際はどうなんだろう。

ハルちゃんよりずっと大きく、ハルちゃんを守るくらいに強く  
逞しい男の子か。クリアできたのは「ハルちゃんよりずっと大きく」  
くらいじゃないか？

「そんなことねーよ。海生はちゃんと成長してる。あの頃のチビの  
海生とは比べものにならないくらい、強くて逞しくてカッコいい男  
になった」

「本当にそう思う？」

「思うって。電車乗り継いで海生に会いに来てよかったって、本当  
に思ってる」

会いに来てよかった、そう言われると嬉しい反面、また少し恥ず  
かしくなってきたてしまう。ハルちゃんに悟られないよう、「ああ、  
そう」なんて気のない返事をしておいた。

「そういえば、俺、他にも海生と約束してることあったんだよな」  
ハルちゃんがニヤニヤ笑いながら言う。何だか嫌な予感がする。

「どんな約束？」

「僕たちが大きくなったら結婚しようね〜って」

ああ、やっぱり。ハルちゃんの顔が笑ってたから、たぶんそっち  
系じゃないかなと思ってたけど……。

「俺ってばそんな恥ずかしいこと言ったんだ」

「言ったんだよ。海生、あの頃は俺のこと大好きだったからなあ。

どこ行くにもついてきて、俺の姿が見えなくなると、不安がって俺の名前を呼びながら泣いてさあ」

「全然覚えてない」

「人間、都合の悪いことは忘れちまうもんなんだよ」

「なるほど」

俺の場合は都合の悪いこと以外にも、何でもかんでも忘れすぎな気もするけどな。

「そういや、俺の初恋の相手って海生だったんだよな」

「ぬあつ!?!」

また何かハルちゃんがとち狂ったことを言い出したと思ったら、思いがけず変な声が出てしまった。

「別にそんな驚くようなことじゃねーだろ？海生はあの頃一番俺の近くにいた男の子だったし、俺によく懐いてたしな。可愛くて可愛くて、ずっと側においときたかった。それを恋だと思ってたんだよ。小さい頃なんてそんなもんだろ？」

「そうだね、そんなもんだね」

そんなもんかもしれないけど、ハルちゃんけっこうすごいことをさらりと言ったな。また心臓が変なふうにドキドキしてきた。

「俺もハルちゃんが初恋の相手だった・・・かも」

「『かも』じゃなくて、そうだったんだよ。プロポーズまでしてきたんだから」

「あ、そうか」

「てか、俺ら両思いじゃん。どうする？」

「どうするって何が？」

や、なんとなく聞かなくてもわかったんだけど、勝手に変な想像して違ってたら恥ずかしいよなあって思って、一応きいところかなあって。

「本当に結婚しちゃっつ？」

「ええ！？そつちななの！？」

「何がそつちななの？」

「ハルちゃんのことだから、てつきり『付き合っ？』とか言っただ俺のことからかう気なんだと思っただから」

まさか『結婚しちゃう』なんて聞かれるなんて思わなかったから、『付き合っ』って言われても照れたり恥ずかしがったりしないように心の準備してたのに、意味なかった。

「そりゃ期待に添えられず悪かったな」

「いや、全然悪くないけど。でもあんまりそうゆうこと軽々しく口にしないほうがいいよ」

「何で？」

「例えば誰かと結婚したいって本気で思っただ告白しても、冗談だと思われちゃうから」

大事なことは本当に大事な場面で言うべきだって、何かで読んだ気がする。

「だから俺なんかにそういうこと言っちゃダメだよ」

ハルちゃんはきよとんと目を丸くしていたけど、俺が真面目に話してるのがわかったのか、柔らかく笑って、「以後気を付けます」と静かに返事をした。

夕飯の後、改めてアルバムを持ってハルちゃんの部屋を訪れた。ハルちゃんに桜井の写真を見せてあげようと思つて。

「ただ俺が行つたとき、ハルちゃんは部屋におらず、電気は消され、部屋の中は真っ暗になっていた。」

台所で洗い物をする母ちゃんに後ろから声をかける。

「母ちゃん、ハルちゃんがないんだけど」

「ハルちゃんなら出かけたわよ」

「何処に？何しに？」

「駅前のファーストフードだか何処だか。お友達に呼ばれたんだつて。九時頃までには帰るからつて」

「ふーん」

せつかくハルちゃんと二人でアルバム見ようと思つたのに。それに、出かけるなら俺にも一声かけてくれればよかったのに。

「暇なら手伝つて」

「暇じゃないよ。宿題やるんだから」

本当は宿題なんか出てないんだけどさ。

母ちゃんに何か言われる前に部屋に戻つた。机の上の時計は八時をさしているから、あと一時間くらいで帰ってくるってことか。

ベッドに横になりぼーっと天井を眺める。

ハルちゃんの友達つてどんな人なんだろう？

いつの間にか眠つてしまつていたようだ。誰かに激しく身体を揺さ振られてるなあと思つたら、母ちゃんが電話の子機を片手に俺の顔を覗き込んでいた。

「ハルちゃんから電話」

「俺に？」

「だから起こしに来たんでしょ」

母ちゃんから受話器を受け取り、耳に押し当てる。

「もしもし？」

自分でもびっくりなかつた声が出た。

『寝てた？』

「寝てた」

『起こして悪かったな。携帯忘れてきたみたいでさ、申し訳ないんだけど、部屋見てきてくれないか？』

「ちよつと待つてー」

ふらふらしながらハルちゃんの部屋に向かう。

真つ暗な部屋の中に青い光を放つ物体を発見した。

「あつたよー」

『ついでに見てもらっていいか？皆川つてやつからメールとか電話とか来てないか？』

ディスプレイには「新着メールあり」の文字。メールの画面を起動すると、確かに皆川と言う名前の人から何通かメールが来ていた。「えーとお、『ごめん、ちよつと遅くなる』7時45分。『今、バイト終わったからこれから向かう』8時2分。『電車が事故で止まっているからたぶん9時過ぎる。本当にごめん』8時17分」

『やっぱりな、8時に待ち合わせなのにおかしいと思つたんだよ』

「それからつい5分前に、『何で返事くれないの？もしかして怒つてる？』つて」

『怒つてないよ、て適当に返信しといてくれ。俺はもう少し待つてみる。おばさんに遅くなるつて伝えといてくれ』

「何処にいるの？携帯届けに行こうか？」

『駅前のドーナツ屋。だけどいい。また何かあつたら電話するからハルちゃんとの電話を終わらせ、真つ暗闇で光を放つ携帯を見つめる。』

適当に返信しといてくれつて言われても、俺が使つてる機種と違

うからいまいち操作が不安なんだけどなあ。

とりあえず暗い中で携帯いじると目が悪くなるから、部屋の電気をつけて、気合いを入れるため腕まくりして、携帯を持ちなおす。

それからたつぷり15分かけて、メールを打った。内容は「ごめん！メール着てるの気付かなかった。怒ってないから安心して。ちゃんど待つてるから気を付けて来てね」的なことを書いた。

ただこれだけの文章なんだけど、使い慣れてない携帯だということ、そしてハルちゃんが普段どんなふうにもメールを打つのか、ハルちゃんの性格からして絵文字は使わなさそうだけど、以外と記号は使うんじゃないか、とか考えながら打ってたら思いがけず時間が掛かってしまった。

自分で打ったメールをもう一度読み直し、誤字・脱字はないか確認をしてから送信を押す。

ディスプレイに「送信しました」の文字が表示され、ようやく一息ついたところで携帯が震え始めた。

「うわっ！」

一息ついたところで突然携帯が震え始めたからびっくりして手から携帯を落としてしまった。

今、メール送ったばかりなのにもう返信してきたのか？と思いきや、ディスプレイには0から始まる11桁の数字と「皆川」の二文字。

メールじゃない、電話だ！と思ったら、考えるよりも先に電話に出ってしまった。

「はい！真田です」

あ、違う、これ家電じゃなくてハルちゃんの携帯なんだった。真田ですって言っちゃったよ。

電話の向こうの皆川さんは電話を掛け間違えたのかと思ったのか、それとも何かおかしいと思ったのか何も言わなかった。

「あ、あの、えと、」

しどろもどろになりながら、これはハルちゃんの携帯で、掛け間

違えとかではないです、俺はハルちゃんのイトコで、ハルちゃんに家に携帯を忘れてそれで俺が咄嗟に電話に出ちゃったんですと、なんとか説明しようとした。

『・・・そちらは長谷部 小春さんの携帯ではありませんか？』

何かを図るような緊張した静かな声が向こうから聞こえてきた。

あれ？ってちょっと気になったけど今は説明をするのが先だ。

「そうです、そうなんです！ハルちゃん、や、長谷部 小春の携帯であってます。ハルちゃん家に携帯忘れちゃって、メール返信してきてくれて言われて、送ったら電話なって、出ないわけにいかないからって、それで咄嗟に」

めちゃくちゃで自分で何話してるんだかわからなかったけど、電話の向こうの皆川さんには一応伝わったらしい。

「そうなんだ。じゃあハルは今、家にいないんだ？」

「はい、そうなんです。・・・あ、あの俺はハルちゃんのイトコで真田 海生て言います」

今このタイミングで言うことじゃないかもしれないけど、一応言っておいたほうがいいかなって。

『イトコの海生くん。ハルから聞いてるよ。俺は皆川 修司っています』

あ、やっぱり。て思わず声が出そうになってこらえる。

母ちゃんから「ハルちゃんは友達に会いに行った」と聞いたときから、勝手に女の人だと思ってたから、電話の声を聞いたときはちよつと驚いた。

ハルちゃんのお友達の皆川さんて男だったんだ。ハルちゃんには男友達もいるんだ。

『海生くん、』

「はい！」

いかん、ぼーっとしてしまった。

『実はね8時にハルと君の地元の駅で待ち合わせて会う約束をしていたんだけど、電車が事故で止まってて復旧の目処がたってないよ



うなんだ。遅くなりそうだし、このまま待たせるのもハルに申し訳ないから、今日はやめて別の日にまた会おうって伝えてほしいんだけど。お願いしてもいいかな？」

「あ、はい。大丈夫かと思えます。ハルちゃんがいる場所は知ってるんで」

『悪いね。じゃあ頼んだよ、海生くん』

「はい。わかりました」

気のせいかな、なんとなく最後の「海生くん」のどこかこう、含んだように笑いながら言ってた気がするんだけどな。

ハルちゃんの携帯を握りしめ部屋を出る。

一度自分の部屋から上着を取ってきて、靴を履きながら奥に向かって叫んだ。

「母ちゃん、ハルちゃん迎えに行ってくる！」

聞こえているのか聞こえてないのか返事はなかったけれど、かまわず外に出る。

自転車にまたがってペダルをこぎだすと、春の匂いのする風が鼻を掠めていった。

ハルちゃんは通りに面した窓際の席について、ぼーっと外を眺めていた。

外から手を振っても気付かないから、店の中に入って、背中の方から「わっ！」と声をかけた。

ハルちゃんは前のめりになりながら身体をびくつかせ、勢い良くこつちを向いた。

「海生！何でお前がここにいんだよ？」

「迎えに来たよ」

「迎え？」

「今日は中止にしようって」

ハルちゃんとの電話を切った後のこと、どうして俺がここに来たのかを説明した。

「ごめんね、勝手に電話に出ちゃって」

「かまわないよ」

ハルちゃんは立ち上がりテーブルの上の紙袋を見せた。

「お土産買ったから、早く帰っておばさんと一緒に食おうぜ」

ハルちゃんは歩いて駅まで来たから、帰りは自転車2人乗りをした。

「つーかお前が前で大丈夫か？」

「大丈夫だよ」

「でも昔はいつつ俺が後ろに乗せてやってたのに」

「・・・ハルちゃん、気持ちわからなくもないけどさ、昔は昔、今は今でしょ。俺もあの頃よりは一応成長してるんだよ？」

「だよな」

ハルちゃんを乗せた自転車のペダルは思った以上に軽かった。

「ハルちゃん、ご飯ちゃんと食べてるの？」

「食ってるよ」

「ならいいけどさ。女の子ってこんなに軽いんだね」

「体重に男女って関係なくね？今は女より軽い男だっっていんだろ」

ハルちゃんの冷めた言い方に身体が強ばる。俺また余計なこと言っちゃったかな。

「海生の背中ではつかいなあ」

と思っただらのんきな声が聞こえていらぬ心配だったかとほっとした、と同時に手で背中を撫でる感触がして、またもや心臓が不整脈を起こした。

3月の夜空の下、自転車二人乗りの帰り道なんて、まるで少女漫画の世界だ。そんな雰囲気です「背中大きいね」なんていかにも女の子みたいな発言されたら、たまったもんじゃないよ。

「皆川、何か言ってた？」

「えー？」

「皆川が、電話で、何か言ってたかって」

聞き返したら、わざわざ立ち上がって耳元で喋ってくれた。

だから、そうゆうドキドキハラハラするようなことしないでよ。

「何も」

「なーんか話があるって呼び出されたんだよ。電話じゃダメなのかって聞いたら直接会って話したいってさ。なんだっただら？」

「さあね」

電話じゃダメで、直接会って話したい。皆川さんの何か含んだような「海生くん」て声がまた耳元で聞こえた気がした。

「告白だったりして」

「何の？」

「愛の」

一瞬間があつて、ハルちゃんはやたら陽気な酔っぱらいみたいに大きな声で笑いだした。

「ハルちゃん、近所迷惑だからそろそろやめて」

「バーカ。皆川は男だぞ？俺に愛の告白なんてするわけねーだろ」

ハルちゃんには申し訳ないけど、その理屈、さっぱり意味がわか

らない。

「だってさ、男の人が女の人、しかも仲のいい女の人に『直接会って話がしたい』って。そーゆーことじゃないの？」

「だーから、皆川は男で、俺の中学の時から親友で、俺が男になりたがってるのを知ってて、ずっと応援してくれてたんだよ。そんな奴が今さら俺に愛の告白なんてすると思うか？」

ハルちゃんは軽く笑って言ったけど、俺は笑ったら皆川さんに失礼なんじゃないかと思って思った。皆川さんがハルちゃんに恋をしようと決まったわけじゃないけど。

「今回の性転換の話も皆川だけ、俺の味方してくれたしな。皆川が健全な男子ならもうすぐ男になる女に好意なんてもたねーよ」

「だって反対したらハルちゃん怒るでしょ？」

「あ？なに？」

わざと聞こえないように小さな声で言った。

例えばもし、皆川さんがハルちゃんのこと中学生の頃から好きで、ハルちゃんと近づきたくて、ハルちゃんに好意を持ってもらいたくて、自分の気持ちに嘘ついてハルちゃんの味方をしていたとしたら？

「皆川さんはハルちゃんが男になりたい理由とか、あの日のこととか知ってるんだよね」

「そりゃあな」

「だよー」

俺は知らないのに、皆川さんは知ってる。ただそれだけのことなのに、なんか気分が落ち込んだ気がする。

「じゃあ、俺が知りたいって言ったら教えてくれるの？」

「知りたいなら教えるけどさ、おまえ自分でいいって言ったんじゃないかよ」

「そうだね」

知りたいけど、でもやっぱり自分からは聞きたくない気がした。だってハルちゃんは自分から皆川さんに話したんだろうから。

「どうした？」

「なにが？」

「なんか元気なくないか？」

「大丈夫、何でもないよ」

いや、何でもないわけじゃないんだけど、実のところ何が何なんだ  
か自分でもよくわからないんだよ。

「さあ、早く帰る。母ちゃんが待ってるから」

きっと明日になれば元気になるよ。根拠はないけど、自分にそう  
言い聞かせて、ペダルを強く踏み込んだ。

次の日。昇降口につくなり突然腕を引かれ、上履き突っ掛けた状態で、一番近くのトイレ、よりもよって職員用トイレに連れ込まれた。

まあこの時間は職員会議中だから、先生方に見咎められる心配はないと思うが、

「でもやっぱり見つかると思っぞ」

俺をここに連れ込んだ張本人・桜井は俺の言葉に苦笑いして、

「恐喝してるって勘違いされるかもな」

「そうじゃなくて。生徒の職員用トイレの使用は禁止されてるだろ」

「そうゆう意味か」

桜井はふつと柔らかく微笑んだ。

「で、何の話だ？」

わざわざこんなところに連れてきたんだから、他の人には聞かれたくない話があるってことだろ。

「たいした話じゃないんだけどさ、今日の部活のことなんだけど」

「あ、もしかして花菱のことか？」

昨日のあからさまに嫌な顔をしていた桜井のことを思い出した。

「桜井がそんなに嫌なら、花菱には遠慮してもらおうよ？」

「そうじゃない。今日は部活なしてて伝えただけ。けど、そ

れは生徒会長が来るからわざと部活やらないとかじゃないからな」

「わかってるよ。今日はやることないんだろ？」

やることないなら集まったって仕方ないもんな。

「三日月祭の準備もあるしさ。たまには休みもいいかなって」

「そうだな。じゃあ花菱には俺から伝えとく」

「悪い」

俺は別に気にしないのに桜井は二人一緒はまずいから、時間差つけて出ようと、外の様子を見ながらおそるおそる先に出ていった。

一分待つて、俺もそつとトイレから顔を出し、誰もいないのを確認してから外に出た。

桜井と一緒にいて恐喝されてるって誤解されるのも嫌だけど、ただか職員用トイレに入っただけで注意を受けるのも嫌だもんな。

「真田海生」

背後からフルネーム呼びされて身体が固まる。振り向こうとしたらぎゅつと腕をつかまれた。

「そのまま聞きなさい。君は今、職員用トイレから出てきたが、あそこは生徒の使用禁止なのは知っているよね？」

ああ、やっぱり見られていた。でも不幸中の幸いというべきか、関口先生の声ではなかった。まだ若そうだし、生物の山田先生とかな？

「少し前にB組の桜井もあのトイレから出てきたよ。彼にも話を聞こうとしたが声をかけたら逃げられてしまっただけ。君たちは何をしていたんだ？」

「別に何もしてません」

ただ話をしていただけ、やましいことなんか何も無い。

「何も無いなら何で桜井は逃げたんだ」

「そりゃ先生に怒られると思ったからじゃないですか？」

すごいくだらない規則だけど、生徒は職員用トイレ使用禁止で決まりだから。実際は中に入って話をしただけで、トイレは使っていないだけ。

「おまえたち何か隠してるんじゃないか」

「別に何も隠してません。てか先生、この体勢なんか変じゃないですか」

普通、お互いに向き合って話をするもんだらう。何で先生はそのまま聞きなさいなんて言ったんだろ。

「こつしたほうが圧迫感あるだろ」

「はい？」

捕まれた右腕、空いてた左腕もひかれ、後ろで強く捻られる。

「いつ！」

「黙つてききなさい。真田、おまえ、本当はあのトイレで桜井とよからぬ計画をたてていたんじゃないのか」

「してないです！手離してくださいっ」

「じゃあ桜井に恐喝でもされたのか？」

「されてませんから」

「口止めされたのか？」

「だからされてませんって」

「嘘をついたつておまえのためにならないぞ」

誰だか知らないけど、この先生、頭おかしいんじゃないのか？

背後を見ようとちょっと首を動かしたら、さらに強く腕を捻られた。

「痛いっ」

「じゃあ何をしていた？何か話くらいはしただろ」

「話しはしましたけど、たいしたことじゃないですよ。今日の部活はなしになったからってという連絡です」

「連絡？それだけのためにわざわざ職員トイレに隠れたのか？」

「そうです、桜井はそーゆーヤツなんです。嘘なんか吐いてませんから、手え離してくださいよっ」

どんつと背中を思い切りどつかれて、勢い余って転びそうになる。なんとか手を突いて、体勢を立て直すと、聞き覚えのある嫌味な声が出た。

「誰が先生だよ。こんな先生いるわけないじゃん」

もしかやと思い、背後を確認。目眩がして、よろよろと壁に身体を押しつけてしやがみこむ。

「倉本だったのかよ・・・」

「おはよう、真田」

倉本は何にもなかったみたいに爽やかな朝にふさわしい清々しい笑顔で挨拶をした。

「全然わからなかった」



「途中で気付くと思ったんだけどなあ。声聞いてわかんない？」

「だっておまえ、声変えてただろ」

普段聞いている倉本の声とはまったく違った。

「僕ね、演劇部に入ってるんだ。まあそれだけが理由ってわけじゃないけど、演技や声色を変えるの得意なんだよね」

「それから人を騙したりからかったりするのもね」とつけたして、倉本は三日月型に口元を歪める。

「どういうつもりだ」

「べつにー。君ら二人がこそこそ職員トイレに入っていくのが見えたら待ち伏せしてただけだよ。何してるんだか気になってね」

「だったら普通に声かければいいじゃないかよ」

「かけたさ。言つたる？君の相方の時代遅れのヤンキーに逃げられたんだよ。『ねえ』の一言でギョって睨まれて、『そこで何してたの？』の言葉でパツと走り去っていったよ。この僕が声をかけてやったっていうのにねえ。まったく無礼極まりない」

「まさかと思うけど、その腹いせに俺にあんなことしたとかじゃないよな？」

「いいや。腹いせなんかじゃないよ。ただ単に真田をからかってやりたくなっただけさ」

「あーそー。それは朝っぱらからご苦労さまです」

うざいんだよ暇人が！って思ったけど、そんなこと言ったら何をされるかわかったもんじゃなから口にはしなかった。

「時に真田、」

「はい？」

「少し、面白い話をしてやろう」

「話？」

「教室に行くまでの間で終わる。さっさと立て」

倉本はにっこり満面の笑みを浮かべながら、有無を言わさぬ口調で言った。

慌てて立ち上がり、先に歩きだした倉本についていく。

「昔々のお話さ。この学校にも園芸部があったんだよ。当然ながら超弱小だったけどね。うちの学校は生徒の自主性を尊重する教育方針うんぬんかんぬんで、昔からやたら部活動がたくさんあって、部活動の予算だけでかなりのお金がかかっていたそうなんだ。だから当時の生徒会や生徒指導部は学校にとって有益になる部活には予算を多く出して、あってもなくても変わらないような弱小部には圧力をかけて廃部に追い込んでいたらしいんだよ」

「当時の園芸部も生徒会から圧力かけられてたわけか」

「そうゆうこと」

「汚いことするな、生徒会」

いや、でも今の生徒会は違う。少なくとも花菱は俺ら園芸部のことを応援してくれている。

「その頃の園芸部は学内での活動はほぼ皆無に等しかったからね、仕方ないといえば仕方ない」

「学内での活動は皆無って、じゃあ園芸部は何をしてたんだ？」

「学校の裏に新藤さんというおじいさんが住んでいたんだ」

「おじいさん？」

「そのおじいさんの家の畑を借りて野菜を作っていたそうだよ」

「ああ、なるほど。そうゆうのもありなんだな」

「ありじゃないよ。ありじゃないから学校から圧力をかけられたんだ。学内での活動実績がないなら生徒会からは予算を出さないって。確かにおじいさんの畑で作っていた野菜の苗は生徒会の予算で買ったものだったし、出来た野菜はおじいさんを始め、近隣の住民やもちろん学内の教職員や生徒にも配られた。ただし無料でね」

生徒会で予算を出しても、出来た野菜を無料で外部の人間に配ってしまうと、学校にとっての有益な活動にならないってことか。

「で、どうしたんだ？」

「当時の園芸部の部長が、裏庭に花壇を作ろうって提案をしたんだよ。花壇と聞いてちよっとドキツとした。当時の園芸部の部長も桜井と同じことを考えていたなんて。」

「学内で園芸部の活動をしようにも学校に花壇一つないんだからね。学校からしてみれば学内で活動が出来ないという理由で園芸部を強制的に廃部にしようと考えていたから、この抵抗には驚いたみたいだね。まあでもたった一人きりの園芸部が花壇を作れって学校に申し立てても聞いてくれるわけがない。結局、卒業を待たずして園芸部は廃部においやられた。ちなみに裏の新藤さんはすでにお亡くなりになっている。全部僕らが生まれる前の話だ」

「そうなんだ」

園芸部にそんな過去があったなんて全然知らなかった。当時の部長も部存続のために、頑張っただろうに。

倉本は今の俺たちを見て、当時の園芸部の先輩みたいに頑張ったってどうせ無理なんだから諦めろって言いたくて、この話をしたんだろうか・・・そもそも何で倉本がこんなことを知ってるんだろう。

「ただこの話には続きがあったね。園芸部が廃部になったあとも、元園芸部部長はおじいさんの畑を借りて野菜の栽培を続けたいんだ」

「そうなのか？」

「もちろん、野菜の苗はおじいさんに買ってきてもらうかもしくは自腹で用意してね。それからおじいさんは亡くなる直前に自分の土地を学校へ譲渡する約束をしたらしい」

「譲渡？」

「身寄りのないおじいさんだったから、自分の土地を誰の手にも渡らず放置するよりも、学校で管理してもらったほうがいいからって是非、園芸部のために使ってやってくださいって言ってたらしいよ」  
「でもおじいさんが亡くなる前にはもう、園芸部は廃部になってたんだよな」

「元園芸部の部長がそのことをおじいさんに言ってなかったのか、おじいさんは園芸部が廃部になったのを知ってて、あえて『園芸部のために』と自分の土地を渡したのか。今となっては確認しようがない」

「そうだな・・・で、この話を俺に聞かせてどうするんだ？」

「別にどうもしないよ。ただ、気になってね」

「何が？」

「おまえさんの相方の不良だよ」

「桜井がどうした？」

「あの不良は何で裏庭に花壇を作りたがってるんだろうねえ？」

「それは裏庭がゴミまみれだから。花壇が出来ればゴミを捨てる生徒が減るんじゃないかって。ある意味では学校のためにやってるんだよ」

「ふーん」と倉本は肩をすくめて冷めた口調で言う。

「たったそれだけの理由で花壇なんか造ろうとするかな。生徒指導部兼生徒会顧問の関口を敵にまわして、嫌がらせみたいな雑用任されても、負けじとあの不良が花壇を作りたがってる理由が、裏庭がゴミだらけだからって、なんか納得いかないんだよね」

「倉本は何が言いたいんだよ」

園芸部の先輩の話だっつて、結局なんのために話したのか意図がよくわからないし。

「僕は嘘をついたり隠し事をするのは大好きなんだけど、他人が嘘をついたり隠し事してるのを見るとどうにも気になってね、いたいなげ嘘をついているのか、なにを隠してるのか暴きたくなるんだよねえ」

目を細め、口元を三日月型に歪める倉本は、すごく楽しそうに笑ってるようにも見えたし、ものすごく怒ってるようにも見えた。

「・・・なんかその言い方だと、桜井が嘘をついてて、しかも何かを隠してるみたいだな」

「さあ、どうだろうね」

教室の前まで来ると、倉本は真っ直ぐ俺を見上げて、「まあ僕の知ったこつちやないけど」と前置きをしてから、

「あの不良はおまえさんのことを利用しようとしてるよ」

「は？」

「信じる信じないはおまえさんの自由。ただ僕は僕のやり方である不良の本性暴いて、制裁をくわえてやるつもりさ。巻き込まれたくなかったらしばらくあの不良とは距離をおくんだな」

倉本はそれだけ言うと、さっさと教室に入って行ってしまった。

俺はまだ何も言っていないのに。

突然現れて人のこと脅かして腕捻りあげて突き飛ばしたかと思ったら、わけわからないこと一方的にまくしたてて結局何が目的だったのかも言わないし、桜井のことでもまた悪く言っつて、挙げ句の果てには巻き込まれなくなかったらしばらく距離をおけだなんて・・・なんなんだ、あいつ。本当にわけがわからない。

花菱はよくあんなのを良い奴だなんて言えるよな。

「なんか朝から気分悪い」

「ねえ、」

先に教室に入ったと思ってた倉本がドアから顔を出し、訝しげに俺のことを見上げていた。

「なにをばーっとつたつてんのさ。さっさと中に入りなよ。そんなとこにいたら邪魔でしょうがないだろ」

「あ、うん。ごめん」

何だよ、まだいたのかよ。今の聞かれたかな？つてドキドキしてたら、倉本は口元だけ笑みを作って、

「せつかく朝から僕がおもしろい話を聞かせてやったのに、気分が悪いとは残念だね、真田」

「え、いや。これは別に倉本の話が原因で気分が悪くなったわけじゃないわ」

「あたりまえだろ。僕は気分の悪くなるような話なんて一つもしてないんだから。しかし、慈悲深い僕がおまえのためを思って忠告してやったのに、お礼の言葉も出ないとは非常に残念だな。昨日あれだけ言ったのに」

妖しく微笑む倉本を見て背中に冷たい汗が流れる。ヤバい、また何か危うい空気になったかも。

「ごめん！や、すみませんでした！」

「何を焦ってんのさ？別に僕はおまえに謝ってほしいなんて思っちゃいないよ。それより、そこにいたら邪魔だから、さっさと教室に入るなり保健室に行くなりしたらどうだい」

「ああ、うん」

言い方はやっぱりキツいけど、倉本の怒りスイッチが入らなかつたことにほっと息を吐く。

「そうすることにする。ありがと、倉本」

そう言うなり、笑みを浮かべていた倉本の表情がとたんになんとも面白くなさそうな不機嫌そうなものになった。

「それは何に対するありがとなわけ？」

「え？心配してくれてありがとって意味で言っただけだ。保健室に行けばって俺のこと心配して言ってくれたから」

そんなに深い意味はなかったんだけどな。俺、何か変なこと言っただけかな？

「は？何？おまえは僕が保健室に行けばって言ったのを僕がおまえの身体を心配して言ったと思ってるの？」

倉本は軽蔑したような目で俺を見る。

「違うのか？」

「馬鹿かおまえは。なんで僕がおまえなんその体の心配をしなくちゃいけないんだ。嫌味で言ったに決まってるだろ。そんなことわからないのか」

「いや、その可能性も考えてはいたけど・・・」

てか何かまた倉本の怒りスイッチが入っちゃったような。昨日みたいに笑顔浮かべたまま突然実力行使されるよりはマシだけど、ずいっと体をよせて真下からねめつけるように見上げられるのもあまりいい気分はしない。

「別に僕は怒っちゃいないよ。だが心配なんかしてないのに心配してくれたなんて誤解されるのはとてつもなく不愉快だ」

「・・・すみませんでした」

この短い時間に二回も倉本に謝ってしまった。俺、弱すぎ。

「謝ってほしいとも思っちゃいけないけどね。まあいい。以後気を付ける。自惚れるなよ、阿呆」

倉本は冷たい目で俺を一睨みし、とつとと教室に戻っていった。

俺はまたも言葉もなくその場に立ち尽くすしかなかった。

お礼の言葉もないのかって嫌味を言ったり、お礼を言ったら言っただで自惚れるなって怒ったり、あいつ本当になんなの。

このまま普通に教室に入ってまた倉本に何か言われるのを恐れて、本当に具合が悪いわけじゃないのに保健室へ行つた。まだ授業が始まるまでに時間があつたし、保健室の先生とは顔馴染みだから、少しくらいならお邪魔していても文句は言われないうらう。

「あれ、海生」

保健室前まで来るとちょうどドアが開いて中から花菱が出てきた。

「おはよ。朝から保健室に来るなんてどうしたの？ 具合でも悪いの？」

「ちよつとな。そうゆう花菱はどうしたんだ？」

「鬼ごっこしてたら転んじやってね」

「ほらっ」と学ランの袖を捲り、花菱は腕に貼つた絆創膏を見せしてくれた。

「走つたら暑くなるから上着脱いでやったのが逆によくなくなつたみたいで」

「そうだな。でも何で朝から鬼ごっこ？」

「遊んでたわけじゃないんだよ。朝練してたんだ」

「朝練て？」

まさか生徒会の？

「やだなあ海生、部活の朝練に決まつてるじゃないか。生徒会が何で朝練に鬼ごっこなんてやるのさ。そもそも生徒会が朝練するのだから変でしょ。何の練習するのさ」

「そうだよな」

「海生つては本当に面白いんだから」

俺からすれば花菱のがよっぽど面白い……というかおかしいけどな。

「花菱つて何か部活入つてたっけ？」

「うん、剣道部にね」



「剣道部？つてあの剣道部？」

「たぶんその剣道部」

俺が聞き返すと、花菱は頷き、照れたように笑いながら、

「僕ね、こう見えても実は副将なんだよ」

と言ったものだから、俺は次の言葉が出てこなかった。

だって中学生生活二年目ももうすぐ終わりつてこの時期に、この学校に剣道部があるなんて初めて知ったうえに、ドジで間の抜ける花菱が副部長やってるなんて聞かされたんだ、そりゃ言葉を失うのも当然だろう？

「剣道部、あつたんだな」

「あつたんだよ。部員は三人しかいないけどね」

「三人？」

「剣道部は超弱小運動部でね、二年生三人しかいないんだ。三人だけだから試合にも出られないし、試合に出られないとやる気も出ないから、活動は週三日、体力作りていう名目で鬼ごっこやかくれんぼしてるんだ。そのせいで僕もしょっちゅう関口先生から嫌味言われてるんだ」

そりゃまあそうだろうな。真面目に練習するならともかく、遊んでばかりいるんじゃ関口じゃなくても嫌味を言いたくなる。

「よく廃部にならないな」

「剣道部員三人とも生徒会役員だからね。僕たちが抗議すればさすがの関口先生も余計なことは出来ないよ」

「・・・さようございますか」

恐るべし生徒会もとい剣道部。しかしそうゆうのって職権乱用にならないのか。

「でも勘違いしないでね。剣道部の活動費用はすべて部費でまかなってるし、予算は一銭ももらってないんだから」

気の抜けた顔の花菱が珍しく真面目な顔で言うから、これは本当の話なんだろう。

「わかってるよ」

「ならいいんだ。生徒会がズルしてるって思われたら嫌だしね」

「大丈夫、そんなことは思っていないから」

そんなことは思っていないけど、倉本の話聞いたあとだから、生徒会の印象がちょっと変わった。たぶん悪い方に。

「で、海生はどうしたの？」

「何が？」

「何がって保健室に来た理由だよ。怪我でもしたの？」

「いや・・・別に意味はないんだ。始業までまだ時間あったから暇つぶしに」

「保健室は暇つぶしする場所じゃないよ」

ニコニコ笑顔の花菱にやんわりと咎められ、本当に暇つぶしに来たわけじゃないのに何だか悪いことをした気分になる。

「ごめん・・・でも本当は違うんだよ」

「違う？じゃあやっぱり具合が悪いの？」

「そうじゃなくて、」

どうしよう。花菱に倉本のこと話していいものか。倉本にこんなひどいこと言われたんだって言うたら、花菱は嫌な気持ちにならないかな。

「もしかしてレオと何かあった？」

「え？・・・ええ！？」

「あ、やっぱりそうなんだ」

「何でわかった？」

「海生なんだかすぐく疲れたって顔してるから。昨日の昼休みも放課後もレオの話をしているとときはだいたい疲れたって顔してたから、そうなのかなあって」

「すごいな、花菱」

鈍臭くて間が抜けてて天然でどっかずれてる空気読めない奴かと思ってたのに、見てないようでちゃんといろいろ見てたんだ。剣道部副将の名も伊達じゃないな。

「で、海生はどうしたの？」

「何が？」

「何がって保健室に来た理由だよ。怪我でもしたの？」

「いや・・・別に意味はないんだ。始業までまだ時間あったから暇つぶしに」

「保健室は暇つぶしする場所じゃないよ」

ニコニコ笑顔の花菱にやんわりと咎められ、本当に暇つぶしに来たわけじゃないのに何だか悪いことをした気分になる。

「ごめん・・・でも本当は違うんだよ」

「違う？じゃあやっぱり具合が悪いの？」

「そうじゃなくて、」

どうしよう。花菱に倉本のこと話していいものか。倉本にこんなひどいこと言われたんだって言ったら、花菱は嫌な気持ちにならないかな。

「もしかしてレオと何かあった？」

「え？・・・ええ！？」

「あ、やっぱりそうなんだ」

「何でわかった？」

「海生なんだかすぐ疲れたって顔してるから。昨日の昼休みも放課後もレオの話をしてるときはだいたい疲れたって顔してたから、そうなのかなあって」

「すごいな、花菱」

鈍臭くて間が抜けてて天然でどっかずれてる空気読めない奴かと思ってたのに、見てないようでちゃんというる見てたんだ。剣道部副将の名も伊達じゃないな。

「レオに何を言われたの？」

「何ってわけでもないんだけど・・・簡単に言うなら、突然現れて脅されたかと思っいたら一方的に不愉快な話をされてよくわからない忠告とやらを受けてお礼の言葉もないのかって言うからお礼を言ったら怒られたんだ」

「ああ、そうだったんだ」

俺の話を楽しそうに聞いていた花菱は、うんうんと相槌を打ち、

そして口元に笑みを浮かべたまま、首を傾げた。

「ごめん、話がよくわかんない」

「だよな。きつとこんな曖昧で訳のわからないことを簡単に言おうとしたのが間違いだったんだよな」

「だけど、何から説明をすればいいのやら。」

「えーっと、朝、昇降口で桜井に会って、職員用トイレでちょっと話をしたんだ。話の内容はたいしたことじゃなかったんだけど、倉本が偶然俺たちがトイレに入るのを見ていて、何か人に言えないような秘密の話をしてるんじゃないかって勘違いして、トイレの前で待ち伏せして。桜井が出てきたところを声かけたのに無視されたからその腹いせ・・・かどろかは知らないけど、先生のフリをして俺の腕後ろから捻りあげてトイレで何をしていたか言えって脅されたというか、なんとというか・・・」

「それはきつと海生のことをからかいたかったんだよ」

「本人もそう言ってたよ」

「じゃなかったら、職員用トイレに入ったことを注意したかったのか」

「だからってもう少しやり方があるだろ」

「もしくはレオは海生のことを心配してトイレの様子を伺っていたとか」

「それは絶対はない」

心配してる人間の態度じゃないだろ、あれは。

「わからないよ。レオって実は心配性なところもあるからさ。レオはあんまり桜井くんのこと知らないし、怖くて悪い人だって誤解してるかもしれないし。海生のことを気にしてトイレの様子を伺っていたのに、桜井くんも海生も何事もなかったように出てきたから拍子抜けしちゃったんじゃないかな」

言われてみれば確かに桜井に何かされたんじゃないかって、けっこうしつこく聞いてきてたな。俺のこと心配してたわけではないと思うけど、やけに桜井のことを気にしてた。

「倉本って、桜井のこと嫌いなのかもな」

「レオがそう言ったの？」

「はつきり嫌いとは言わないけど、桜井に失礼なことばっかり言ってたよ。あいつは嘘を吐いて、何かを隠してるとか、俺のことを利用しようとしてるとか・・・」

あ、また余計なことを言っちゃったかな？と思ったが、花菱は別段気にした様子もなく、「それから？」と話の続きを促した。

「あとは、正体を暴くとか制裁を加えるとか。巻き込まれなくなったら桜井とは距離を置けとか」

「それは怖いね」

怖いねといいながらも花菱の顔は笑ってる。

「俺が気分悪いなあて言ったら、せつかく忠告してやったのにお礼の言葉もないのかって嫌味言われて。気分悪いなら保健室にでも行けばって言うから、今度はちゃんと心配してくれてありがとうって言ったのに、自惚れるなってまた怒られて・・・花菱には悪いけどさ、俺にはあいつのよさがわかんないよ」

まだ学校に来て30分もたたないのに、何だかもう1日授業を受けて、放課後の掃除まで終わらせたくらいに疲れた。

「レオは自分から礼の言葉はないのかって催促するくせに、本当はお礼なんて言われても嬉しくないって言うんだ。きつとあまのじゃくで照れ屋だから、お礼を言われると恥ずかしくなっちゃうんだろうね」

「じゃあ、俺が礼を言って何か怒ってたのは照れてたってことなのか？」

「たぶんね。海生にそのタイミングでお礼を言われるとは思ってなかったから、面食らったんだと思うよ」

そういうことなら納得できなくもない、かもしれないし、そんなことないかもしれない。

「桜井くんのことをあれこれ悪く言って忠告したのは、やっぱり海生のことを心配してたからだと思うよ」

「そうか？あいつのことだからただだたんに桜井が好きじゃないから悪口言いたかっただけじゃないの？」

「好きじゃないからって理由で、意味もなく誰かの悪口を言いたがる人はいるよね」

花菱はにっこり笑って、けどすごく静かな口調で言った。

「でも、レオはそんなことするような子じゃないよ」

「・・・ごめん」

笑顔だったけど、花菱はたぶん俺の言葉に気分を害した。倉本のことを悪く言われて嫌な気持ちになったんだろう。

「花菱が倉本のこと庇う気持ちはわからなくもないけど、俺だって倉本に俺や桜井のことあーだこーだ言われるのは気分よくないぞ」

「そうだね。でも、なんの根拠もなく桜井くんのことレオが悪く言うはずがないよ。桜井くんを見て、何かを感じて、それが海生に関わることだったから、忠告とやらをしたんじゃないかな？」

倉本の冷めた目が頭の中に蘇る。

『僕には知ったこっちゃない』と前置きしたのも、『信じる信じないはおまえの自由だ』って突き放すように話したのも、本当は心配してるのに素直になれないあいつのひねくれた性格のせいだったのか？



「花菱は何だつてあいつの味方するんだ」

「ん？」

花菱が「何の話？」とでも言いたげに首を傾げる。

「誰が聞いたつてあいつがやってることつて訳わかんないし、不愉快だし、ひどいと思うぞ。それなのに花菱はいつも倉本は悪くないみたいに言うから」

「そりゃ僕はレオの友達だから」

恥ずかしげもなく笑顔で花菱はそう答えた。

「友達だからレオのことを信頼してるんだよ。ただそれだけ」  
「ただそれだけ、つて。」

「友達のこと信じて味方するのはあたりまえのことでしょ？」

「そうだよ、あたりまえのことだよ。じゃあ、俺はどうすればいいんだよ？」

花菱のいうとおり、倉本が本気で俺のことを気に掛けてくれたのなら、倉本の話は全部本当のことつてことだ。それつてつまり、桜井は俺を何かに利用しようとしてるつてことで、同時に俺に何か隠し事をして、嘔吐してるつてことで。

「花菱がそこまで信頼してる倉本の言葉をもう疑おうとは思わないよ。けど、俺は桜井のこと大事な友達だと思ってる。信頼してる。」

その桜井が俺のこと騙して何かに利用しようとしてるなんて聞かされたら、どうしていいのかわかんないよ」

何で？どうして？何のため？考えてもわからない。だつて桜井は俺に何も話してくれないから。桜井が何を考えているのか、俺、本当は全然わからないんだ。だから倉本の言ってることは絶対に間違つてるつてキツパリ否定も出来ない。俺はいつたい誰を信用すればいいんだ？

「桜井くんはそんな人間じゃないよ」

花菱はいつもと変わらぬ優しい目をして俺のことを見ていた。

「桜井くんが海生を利用しようとしてるだなんて、そんなことあるわけないじゃないか。仮に桜井くんが海生に何か隠し事をしてたり、嘘を吐いてたとしても、たいしたことじゃないよ。誰にだって人に言いたくないことの一つや二つあるだろうし、時と場合によっては嘘をつかざるをえないときだってあるでしょ。海生だってそうじゃない？」

言われてみれば・・・確かにそうゆう時もあるかもしれない。

「桜井くんだって同じ人間だもの、そのくらい普通だよ。そう思わない？」

「そう、だな」

力なく頷き、思わず大きなため息を吐く。

「花菱はなんなんだ？ 倉本を信頼してるって言ったり、桜井の弁護したり。おまえはどっちの味方なんだ？」

「僕は海生の味方だよ」

「・・・は？」

予想してなかった言葉に反応が遅れる。

「レオも桜井くんも自分を守ることを知らない人なんだよ。だからレオも桜井くんも悪目立ちしちゃうだろうね。だけど海生のことは大事だから、なるべく海生に嫌な思いさせないようにしてるんだ。だから桜井くんは海生に嘘を吐くし隠し事だつてする。レオはレオで桜井くんに気を付けるつて言いたくなっちゃうだろうね。それが結果的に海生を傷つけることになつても、自分の印象が悪くなつてもかまわないんだよ」

「・・・花菱の言ってること、よくわかんないんだけど」

「全部わかんなくていいんだよ。とりあえず、海生はみんなから愛されてるつてことだけわかってれば」

そう言つて、花菱はいつもの無垢な子どもみみたいなビッグスマイルを浮かべるから、つられて俺も引きつった笑みを浮かべた。

愛されてるつて、たぶんいいことなんだろうけど、何でか素直に

喜べなかつたり。

「不安になることはないよ。レオも桜井くんも、もちろん僕だって海生の味方なんだから」

「ね？」と花菱に言われ、本当はあんまり納得してなかつたけど、頷いておいた。花菱が俺のことを想っている言ってくれたんだから、これ以上うじうじ言うのはやめよう。昨日ハルちゃんに女々しいって言われたばかりだし、それに、

「なんか花菱に『大丈夫』って言われると本当に大丈夫な気がする」

「そう？じゃあこれから海生が不安そうな顔してたらいつでも『大丈夫』って言うてあげるね。大丈夫じゃないことでも、大丈夫って言うておけば大丈夫になるってことだもんね」

「いや、大丈夫じゃないことを大丈夫って言われるのはちょっと」  
「なんか『大丈夫』って言い過ぎて『大丈夫』ってなんだっけ？  
ていうような変な気分になつてきた。」

「大丈夫、大丈夫」

「花菱、大丈夫はもう大丈夫だから。それにしても花菱はすごいな」  
「何が？」

「倉本も桜井もそんなヤツじゃないって、はつきり否定できるのがさ」

花菱のほうがよくぼど桜井のことを信用してる。桜井だけじゃなくて、倉本のこと、信用して、ちゃんと理解して大事にしている。  
「花菱って実は俺なんかよりずっと桜井のことわかってるんじゃないか」

「そうかもしれないね」

花菱は嬉しそうに笑って、

「でも、海生には海生にしかわからないことがあるんだから。自信持って、これからも桜井くんやレオと仲良くしてやってね」

「うん」

花菱に悪いから言わなかつたけど、倉本とはあんまり仲良くしたくないんだけどな・・・てか、その仲良くって言い方やめてくれな

いかな。

しかしまあ俺も花菱を見習いつて、もっと友達のことを信じてやれる器の大きな人間になろう。そう心に決めた。

五限の英語の授業は関口先生が出張のため自習だった。

課題のプリントは出ていたけれど、頭の悪い俺が自力でやったって散々な結果になることは目に見えていたので、成績はいつも学年5位以内の花菱と、英語の得意な紫音さんの答えを写させてもらった。

おかげで課題は10分で片付いてしまい、残った時間は『園芸部の今後』というテーマで花菱と会議を開いた。

「一番効果的なのはやっぱり人を集めることだよ。たった二人だけの園芸部じゃ関口先生の圧力に対抗するには肉体的にも精神的にも厳しいと思うし、たった二人で花壇を作りたい、園芸部設立を訴えても学校側がOKを出すわけがないよ。同好会を作るにも最低三人は必要だし、何をするにも部員がいなきゃ始められないわけだ」

「なるほど。でも人はどうやって集めるんだ？俺ら園芸部は奇人変人部とか呼ばれてて、みんなから白い目で見られてるんだぞ？」

「はじめっから園芸部に理解のない人に協力を求めても無理だよ。まず仲のいい友達や園芸部設立に賛成してくれそうな人に声をかけて、部設立規定人数をクリアする。そこから口コミで徐々に協力者を募り、同時に学校側にどうして園芸部が必要なのか、園芸部を設立した際に学校にどんな影響を与えるのか、意見をまとめて文書で提出する。園芸部にとって最強最大の難関は生徒指導部の関口先生だけど、逆に言えば、その関口先生さえ突破すればもう行く手に立ちふさがる敵はいない。関口先生のOKさえ出れば、園芸部が設立できるんだよ」

「でもあの関口・・・先生を納得させるなんて並大抵のことじゃないぞ」

だってあの人が園芸部設立を邪魔するのはただ単純に桜井が嫌い

だからだろうし。桜井がいる限り、あの人が園芸部を認めることはないんじゃないか。

「こちらが理になかった方法で正々堂々と戦えば、関口先生だって折れざるをえないよ」

「うまくいくかな？」

「大丈夫。まずは三人で頑張ろう」

「三人？」

怪訝な顔で尋ねると、花菱はニッコリ笑って、

「僕も今日から園芸部の仲間入りさせてもらうよ。園芸部は正式な部活じゃないから、入部届けも何もないけどいいよね」

「・・・大丈夫なのか？」

「何が？」

「剣道部とか生徒会とか。いろいろ忙しそうじゃん」

「大丈夫だよ。園芸部に支障が出ない程度に頑張るから」

「いや、頑張るのは園芸部の活動のほうじゃなくて」

花菱はなんてことなさそうにしていたが、俺はちよつと不安だった。もちろん花菱が俺らの力になってくれるのは嬉しいけど、それが原因で、余計に関口先生の神経逆撫ですることにならないかとか、桜井が花菱のことを嫌がらないかとか。

「それにね、僕の友達で二三人、園芸部に協力してやってもいいって言ってくれてる人がいるんだ」

「マジか」

そりゃ有難い。有難いが、なんというか・・・物好きだな。

「いつそんな話したんだよ？」

「昨日の夕方、海生と別れてから。何だか海生の話を聞いたらいてもたつてもいられなくなつてね。何人か希望ありそうな人にメールしてみたんだ」

「やるのが早いな」

「実は今日の放課後に具体的な話がしたいから裏庭に集まってほしいってお願いもしてあるんだけど」

「え、それは嬉しいけど、いくらなんでも気が早すぎないか？桜井に何も言っていないのに。あんまり先走った行動はまずいんじゃないかな」

「そっか。じゃあ、まず桜井さんに話を通さなくちゃね。今日は部活やるんだよね？」

「それが今日は、」

「やらないの？」

「やることがないし、三日月祭の準備もあるからってことで」

「三日月祭？」

花菱は少し不思議そうな顔をしていたがすぐに笑顔に戻って、

「じゃあ、せめて話だけでもさせてもらえないかな？みんなにはまた別の日に集まるうってメールしとくから。僕が一人で行ってもびつくりするかもしれないから、海生も一緒に三人で今後のこと話し合おう。ね？」

「それは、いいけど」

でも、なんだって花菱はこんなに張り切ってるんだろう。昨日俺が話したことがそんなに花菱に影響を与えたのか。

「頑張ろうね。みんなで力をあわせて絶対に園芸部を復活させよう！」

自分で言っで、自分で「おー！」と右腕を天井に突き出して、花菱は本当にいつでも楽しそうだ。

「花菱もその話知ってるんだな」

「その話？どの話？」

「昔、園芸部があったって話だよ」

俺がそう言くと、花菱は右腕を天に突き上げた格好のままかたまたまつぶやいた。

「花菱？」

「それ、どんな話？」

右腕をゆつくりとおろし、笑顔を俺に向けて言う。

「どんなって、花菱が知ってるのと同じ話だよ」

「うん。でも聞きたいんだ」

花菱はじつと俺を見上げる。

「本当に、ただ昔この学校にも園芸部があったってだけで」

「それだけ？」

「園芸部は弱小部だったから当時の生徒会に圧力かけられて廃部に追い込まれて」

「それから？」

「当時の園芸部の部長がそれなら学内に花壇を作ろうって、学校に訴えたんだけどダメで、結局廃部になっちゃったって話」

「それで？」

「それでって？」

花菱は目をパチパチさせて、

「ううん、それで話は終わりなのかなあって思ったんだ」

「ああ、そういえば、新藤さんておじいさんの家で野菜を栽培してたって話もしてた」

「それから？」

「園芸部が廃部になったあと野菜の栽培を続けて・・・のちに新藤さんが自分の土地を学校に寄付したって」

「それで？」

「それだけだよ、俺が知ってる話は」

「そう。海生は誰にこの話を聞いたの？」

「倉本」

「レオ？」

花菱は倉本の名前が出たのが意外そうに呟いた。

「レオが何でそんな話を知ってるの？何で海生に話したの？」

「さあ？」

「レオがね・・・」

花菱は一番前の席で本を読む倉本に目をやる。いつも笑顔の花菱には珍しく無表情で何を考えているのかは、わからなかった。

「ちなみに花菱はこの話、誰に聞いたんだ？」



「僕？僕はねえ・・・誰だったかな？」

花菱はまた笑顔を浮かべ、困ったみたいに頬を掻く。

「いつか誰かに聞いた気がしたんだけど、誰だか忘れちゃったよ」

「そうか」

「うん、ごめんねー」

「謝る程のことじゃないけどさ」

なんとなくだけど、また花菱に笑って誤魔化された気がした。誰に聞いたか忘れてたって、本当に忘れたのか。

「ところでさ、このこと、桜井くんにはもう話したの？」

「いや、まだ・・・花菱や倉本が知ってるなら桜井も知ってるかな」

「もしかしたらね。どっちにする桜井くんには話さないほうがいいと思うよ」

「何で？」

「何でって、」

花菱は言葉につまり、一瞬妙な間が出来た。

「あんまりいい話じゃないでしょ？これから園芸部設立のために頑張ろうって言うてるのに」

「まあ、確かに」

「だから、ね」

「わかった、桜井には言わない」

「それがいいよ」

その時、誰かに見られている感じがして目をやると、つい今しがたまで本を読んでいた倉本が冷めた目つきでこっちを見ていた。

花菱は気付いていないようだったが、倉本は俺と視線が合うと目を細めてニヤリとすごく嫌な感じに笑った。

放課後、桜井のクラスに行った。事前に「会わせたい人がいるから放課後時間くれ」とメールをしておいたが、「四時頃までなら」と返事をくれた桜井をSHRや掃除当番やらで三時五十分まで待たせてしまった。

「桜井、ごめん！」

誰もいない教室の一番後ろの席に座り、桜井は読んでいた本から顔を上げて、俺を見た。

「遅かったな」

「ごめん、ホームルームが伸びた上に掃除が終わらなくて」

「まあいいけど、俺もそんな時間ないんだ。悪いけど、用事があるなら早く済ませてくれ」

「ああ、うん」

ちらりと後ろに視線をやるとニコニコ笑顔の花菱が俺を見上げている。

「何してんだよ？」

「あーうん、あの、桜井、怒らないで聞いてくれな」

「何だよ。何か俺が怒るようなことしたのか？」

「いやあ、そんなつもりはないんだけど……念のため確認。怒らないでな」

桜井は訝しげに頷き、「で？」と話を促す。

「実は俺のクラスメイトで園芸部に入りたいって言ってるヤツがいる」

俺がそう言うと、桜井は目を真ん丸くして、

「それはそれは……その何処が怒るような話なんだ？」

「それが、」

口で説明するより、実際に対面してもらったほうがいい。後ろ手で合図をし、花菱を前に出す。

「こんにちは、桜井くん」

俺の後ろからひよっこり現れた花菱はお得意のビッグスマイルを浮かべ、右手を差し出した。

「君とは小学校から一緒だけどもともに話したことは一度もないから、あえてはじめましてと言わせてもらうね。2年C組在籍、生徒会長兼剣道部副将の花菱聖です。縁あって園芸部のお手伝いをさせてもらうことになりました。これからどうぞよろしく」

桜井は差し出された右手をしばし茫然と見つめていたが、花菱の自己紹介が終わるなり、信じられないという顔を俺に向けて言った。

「どうゆうこと?」

「こーゆーこと」

はにかみ笑顔で答えると桜井は顔をひきつらせ、何か言いたげに花菱を見下ろした。

「そーゆーこと」

花菱は桜井の手をとると「よろしくねー」と楽しそうに握手をした。

わかりきっていたことだったが、桜井の答えは、

「気持ち嬉しいけど、生徒会の手は借りたくないから」  
だった。

「違うよ桜井くん」

花菱はめげずにニコニコ笑う。

「手を貸すのは生徒会じゃなくて、僕、花菱聖っていう一個人だよ。僕が所属してる生徒会の意志とはまったく関係ない、個人の感情で言ってるんだ」

「どっちだつて一緒だ。関口の息がかかってるヤツなんかと楽しく部活動なんかできるかよ」

その言い方はひどいんじゃないか？そう思っても気の弱い俺は、さつきから不機嫌そうに顔をしかめ、椅子にふんぞり返り、会話はしても、花菱と目を合わせようとしない桜井が怖くて、なんだか申し訳なくて口に来ないでいる。

桜井が本当に顔も見たくないくらいに花菱のことが嫌いだったなんて思わなかったから・・・桜井にも花菱にも悪いことしちゃったよな。

「あんたが園芸部に入ったらどーせまた関口の野郎に花菱を脅して無理矢理入部させたんだろとか、くだらないいちゃもんつけられるに決まってる。面倒なことはごめん」

「僕がどんな部活に入ろうと関口先生には関係ないと思うけどな」  
「そう思ってるのはあんただけだよ」

「大丈夫だよ。僕は桜井くんに脅されたりしてません、自分の意志で園芸部に入りましたって言うから」

「誰が信じるんだよ、そんな話」

「誰も信じなくなつていいじゃない。嘘吐いてないし悪いことだつてしてないんだから、堂々と胸を張ってればいいんだよ」

「そうゆう問題じゃない。俺はあんたに園芸部に関わってほしくないんだよ。あんたみたいな真面目でいい子ちゃんな生徒会長様が俺みたいな出来損ないの不良に関わるとすぐに新しい悪い噂がたえられる。はつきり言って迷惑なんだよ」

今のは俺の胸にもぐさつときた。だって俺もどっちかっていうと真面目・・・というか地味でおとなしいタイプで、実際俺が園芸部に入ったせいであることないこと噂流れまくってるし、そもそも園芸部に入ったのも桜井に無理言っただけだからだし・・・。

「そんなの桜井くんの見た目に問題があるんであって、僕は関係ないじゃない。だって桜井くんは誰とつるんだって結局は悪い噂たてられちゃうでしょ？海生がいい例だよ」

花菱は何の悪怖れもなくさらっと笑顔でとんでもないことを言いやがった。

これには花菱のこと無視を決め込んでいた桜井もさすがに目を剥いた。

「桜井くんは一人でいたってワルだ不良だって言われるんだ。そう言われるのが嫌ならもっと地味で目立たない格好をすればいいんだよ。誰かに悪く言われるのが嫌で僕を園芸部に入れたくないっていうのは、入部を拒む理由にならない」

桜井は花菱を睨み付けて口を開いたが、それを遮るように花菱が言った。

「それに、本当の本当に他人のことをそう思ってるなら、寂しい話だよ」

口元に笑みを浮かべたまま、まるで何かを訴えるかのように花菱はじつと桜井を見つめた。

面白くなさそうな顔して桜井も花菱を見ていたが、ふいと顔を背けて、決まり悪そうな調子でつぶやいた。

「言い過ぎた。悪い」

「いいよ。気にしてない。僕こそ失礼なことと言ってごめんなさい」

「いや、あんたの言うことは正しいと思う。でも俺はあんたの入部

を許可する気にはなれない」

「困ったねえ」

困ったというならもつと困ったような顔をすればいいのに、花菱は笑ってる。まったくたいしたやつだよ、こいつは。

一触即発の危険な状況を回避できた安心から思わずため息を吐く。花菱には悪いけど、連れてくるんじゃないかな。こんなに桜井と相性が悪いとは。相性が悪いというか、桜井が花菱を一方的に嫌がってんだよな。まあ今日の花菱はやたら強気で好戦的でした。桜井でなくても嫌がるかもしれないけど。本当にひやひやした、まさかあの桜井にあんなこと平気で言つてのけちゃうんだもんな、天然というのは恐ろしいよ。

「海生もいいかな？」

「え？なに？」

いかん、すっかり物思いに耽ってしまった。

「僕、このあと体育科の松長先生に頼まれて、体育倉庫の片付けをしなくちゃいけないんだ」

「はあ」

「で、偶然、桜井くんも先生に頼まれて体育倉庫の片付けをする事になってたらしくてね、もし海生が嫌じゃなかったらこの話の続きは倉庫の片付けをしながらしない？ってことなただけ」

つまり俺にも倉庫の片付けを手伝ってほしいと言ってるわけか。

「かまわないけど。桜井の用事って倉庫の片付けのことだったのか？」

桜井はばつが悪そうに首を縦に振った。

「まさかとは思うけど、それって関口先生から」

「違う。保健体育の時間に居眠りしてな。そのペナルティーだ」

「たかだか居眠りで倉庫の片付けか？」

「松長先生厳しいからね。僕は今度の三日月祭でカラーコーンを使いたいって話をしたら、倉庫に閉まってあるから探すついでに片付けてくれって言われちゃって」

「そんなの体育委員に頼めばいいのに」

「今の時期はみんな三日月祭の準備で忙しいから頼みづらいんだよ、きつと」

花菱はそう言ったが、俺はまだ何かがひっかかっていた。

なんだろう、こっ・うまく言えないんだけども、なんとなく疎外感。二人が体育倉庫の片付けを頼まれたのはただの偶然なのに、なんとなく仲間外れになったような気分。変だな。

「僕、松長先生のところに行って鍵借りてくるね。さきに倉庫に行つてて」

パツと走りだした花菱に桜井が後ろから怒鳴るような声を上げる。

「廊下を走るなっ！ 転ぶぞ！」

花菱はびっくりして足を止め、きよとんと桜井を見る。

「歩いてけよ。倉庫は逃げやしないんだから」

「・・・そうだね。そうする」

「ご忠告どーもー」とひらひら手を振りながら花菱は教室を出ていった。

「まったく、騒がしくて落ち着きがなくてガキっぽくて、よくあんなんで生徒会長が勤まるよな」

冷めた目で花菱を見送る桜井に、おそろおそろ声をかける。

「だから花菱が嫌いなのか？」

「なに？」

意味がわからなかったらしく、桜井は俺の顔を見上げた。

「花菱が騒がしくて落ち着きがなくてガキっぽい生徒会長だから嫌いなのか」

「別にそうゆうわけじゃない」

「じゃあ桜井は花菱の何がそんなに嫌なんだよ。あいつは良い奴だよ。桜井のことにも園芸部のことにも理解がある。あいつは本気で俺たちの力になりたいって思ってくれてる」

明確な理由もないのに、突き放すのはひどいじゃないか・・・口にはしないけどさ。

「あいつは駄目だ」

桜井は真っ直ぐ前を見て、何かを睨み付けるみたいな目で言った。  
「誰かに手を借りたいなんて思っていない。海生ひとりで十分だ」

それはどういう意味なんだろう？疑問に思っても口に出す勇氣はない。「そうか」とだけ言って話を終わらせた。

「付き合わせて悪いな。さっさと終わらせよう」

「うん」

先に歩きだした桜井の後ろを、いつものように少しだけ離れて歩いた。



体育倉庫の片付けをしてる間は話し合いどころじゃなかった。

というのも体育の松長先生からは四時に集合と言われていたのに、俺らが行ったのは四時半過ぎ。たかだか三十分と思うが、時間に厳しい松長先生は一分の遅刻も許してくれない。

「時間を守れない人間は最低だ」と説教されたあと、先生も含め四人で片付けをした。しかし先生はただ片付けをしていたわけではなく、私語厳禁を言い渡し、俺たちがちゃんと働いてるかをしっかりと監視していた。そんな状況じゃ園芸部の今後なんて話し合えるわけがなく俺たちは黙々と倉庫の片付けをするしかなかった、というわけだ。

「まあこんなもんだろ。おまえらもう帰っていいぞ」

先生からそう言われたとき時計の針は六時を回っていた。

「悪かったな三人とも。三日月祭の準備で忙しいのに。助かった」  
松長先生は俺たちを差別せず三人とも同じ態度で接してくれるし、こうしてちゃんと生徒を労ってくれるから好きだ。

「頑張ったご褒美」ということで個包装のクッキー一枚と缶のお茶をもらい、俺らは校門にむかって歩いていった。

「で、さっきの話しなだけだよ、」

花菱が嬉々として口を開きかけたのと同時に、前を歩く生徒を見て「あれ？」っという顔をした。

「レオだ！」

嬉しそうな声を出して、花菱は走りだした。

「だから走ると転ぶっての」

桜井がぼやいた瞬間、本当に花菱が派手な音をたててすっ転んだ。

「うわ、痛そう」

「自業自得だろ」

桜井・・・花菱が嫌いだからってその言い方はちょっと冷たくな

いか？

「何やってんだよ、会長」

と思いきや、一番近くにいる倉本よりも先に花菱のもとに行つて手を貸してやつてる。桜井には例え自分の嫌いな相手でも、転んだ人間には手を差し出す優しさが備わっているようだ。何だかそれを見たら少し安心した。

そうだよ、桜井はそうゆうヤツだよ。優しくて、気配り上手ないヤツ。

「ごめんねーありがとー」

花菱はへらへら笑い、桜井の手を借りてひよいつと起き上がった。「珍しい組み合わせだね」

その様子を近くで見ていた倉本は口元を歪め、楽しそうに言った。「生徒会長と札付きの不良が一緒に下校だなんておかしな光景だ」「あつちに海生もいるよ」

花菱は俺の方に目をやると満面の笑みを浮かべ、「早くおいでよー」と手招きした。

不機嫌MAXな顔で倉本を睨み付ける桜井と、どこか人を馬鹿にしたように笑いながら桜井を見つめ返す倉本。そんな険悪な雰囲気気付かず、二人の間で無邪気に手を振る花菱・・・正直、このまま一人で帰りたい、あの三人のなかに入りたくない。でもそんなことしたらあとが怖いんだよなあ。

「真田、ダツシュ！」

倉本にそう言われ、反射的に三人のもとに駆け寄ってしまった。

突然走ってきた俺に桜井と花菱は驚いたような、何か言いたそうな顔で俺を見てきた。

「真田は犬みたいなのがあつてね、普通に言ってもダメだけど、強い口調で命令するということをきくんだよ」

誰が犬だ！と言い掛けたが、倉本に目で「黙れ」と言われてしまったので、口を閉ざさずをえなかった。

「へえ、レオつてばすごいね。海生のこと犬みたいに言うときか

せられるくらいに仲良くなったんだ」

「仲良くなつたんじゃない。真田がそれくらい僕のことを恐れ、崇拜するようになったんだよ。人と犬のように、僕らは主従関係で結ばれてるんだ」

「だから誰が犬だよ！何が主従関係だよ！いつから俺がお前のことを崇拜するようになったんだよ！！」

「言つてやりたいことは山ほどあるのに、情けないかな、倉本の冷たい視線が怖くて何も言えない。」

「すごいね！二人ともいつのまにそんな仲になったの？」

「なつてないから！何でもかんでも倉本の言うこと真に受けるなよ、

花菱！

「海生、」

桜井が哀れむような目で俺を見上げる。

「お前もいるいる苦労してるんだな」

「ありがとう、桜井。同情してくれるのは嬉しいけど、俺は倉本と主従関係とか結んでないからな」

桜井はボンと優しく俺の肩を叩いた。わかってんだかわかってないんだが、いまいち不安が残る反応だ。

「で、三人お揃いでこんな時間まで何をしていたの？」

「体育倉庫の片付け」

「ああ、関口の園芸部に対する嫌がらせみたいな雑用を花菱が手伝つてやつてたわけね」

「違うよ。頼まれたのは僕と桜井くんで、手伝つてくれたのが海生なんだ」

「花菱と桜井が倉庫の片付けを頼まれたの？」

「倉本の言いたいことがわかったのか花菱は手を振って、」

「そうじゃなくて、僕は松長先生に三日月祭で使うカラーコーンを借りるついでに。桜井くんは、」

「保健体育の授業で居眠りしたペナルティーで」

「そうなんだよ。だから別に二人一緒に頼まれたとかじゃないんだ。」

偶然、松長先生が倉庫の片付けを頼んだのが僕と桜井くんだったってだけなんだ」

「ああ、そう、そうなんだ。それは丁寧に説明してくれてどうもありがとう。誰もそんなこと尋ねちゃいけないけどね」

最後の一言は余計だよ！見れば桜井はムツとしたようすでさつきよりも厳しい目付きで倉本を睨んでいる。一触即発再び、か？

「レオはこんな時間まで部活？」

空気を読んだのかたまたまか（たぶん後者だろうけど）いいタイミングで花菱が話題を変えてくれた。

「演劇部は舞台の稽古があるし、茶道部はお茶会の準備があるし、三日月祭まで大変だね」

花菱の話からすると倉本は演劇部と茶道部の両方に所属しているようだ・・・そういえば同じクラスの紫音さんは確か茶道部の部長をしていたはずだ。こんな性悪が部員じゃ、紫音さんも大変だな。

「それもあるけど、今日はちょっと調べものをしに図書室に寄ってたんだ。明後日から学年末試験だしね」

「試験？」

ヤバい。忘れてた。そんな俺の心情を見透かしたように倉本はクスツと笑う。

「倉庫片付けの手伝いは感心だけど余裕だね、真田。2学期の期末、数学かなり悪かったんじゃないか？しかも本当なら赤点だったのに先生におまけしてもらってなんとか赤点免れたんだよね？」

何でそんなこと倉本が知ってたんだよ。いや、でも今回は本当に赤点かもしれない。

「大丈夫だよ、海生。赤点とっても進級はできるんだから」

笑顔の花菱にそう言われ、俺は力なく笑う。

それはそうなんだけど、春休みに補習受けなきゃいけないし、それに赤点なんかとったら母ちゃんになにを言われるか・・・。

「赤点が嫌なら勉強すればいいだけの話だろ。数学は最終日なんだし、今日からやれば4日は勉強できる」

桜井のまったくもってそのとおりな正論に、花菱が「はいっ！」と元気よく手をあげる。

「そしたら皆で勉強会やろうよ。明日から短縮授業になるから、放

課後どこかに集まって勉強しよ」

「うげ、」

俺と桜井の声が重なり、お互いに顔を見合わせる。俺は倉本が嫌で、桜井は花菱と倉本、二人とも嫌なのに四人で勉強会なんて。

「いいよ、俺らは。花菱も倉本も自分たちだけで勉強したほうがはかどるだろうし、そのほうがいいだろ」

「あたりまえだろ」

ハンと馬鹿にしたように笑い、倉本は俺に目をやる。

「でもね、自分の勉強時間犠牲にしても、慈悲深い僕がお前たち阿呆二人に勉強を教えてやるって言ってるんだよ」

「なっ」

何だよその上から目線！ちょっと成績いいからって人のこと馬鹿にしすぎだろ！？つか勉強会しようって言ったの花菱だし！

「レオは学年一位以外になつたことないもんね。でも桜井くんも頭いいよ。いつも学年二十位までに入ってるもの」

「ね？」と笑顔を向ける花菱に「まあ」とお茶を濁す桜井。

「へえ、それは意外だな」

桜井には失礼かもしれないが、確かに意外だ。

「でも、何で花菱はそんなこと知ってるんだ？」

「定期テストの度に学年三十位までの点数と名前が発表されるじゃない。あれで見たんだ」

「ふーん。僕は見たことないから知らなかったよ。見なくても自分の順位なんてわかりきってるし」

倉本め、本当に嫌味なヤツだな。

「でも、花菱だって僕には及ばないにしろ成績はいいほうだろ？」

「うん。だいたいいつも五番以内には入るよ」

「それなのに自分よりずっと後ろにいる桜井の順位を知ってるんだ」  
「うん、知ってるけど？」

花菱は「何かおかしいかな？」と首を傾げる。

「いいや。ただ自分の順位だけ確認できれば十分じゃないかなって

思っただけ。だってそうだろ？ほとんど面識のない他のクラスの生徒の順位をわざわざチェックする必要がどこにあるって。僕ならそんなことしないけど。花菱は生徒会長だし、他の生徒の成績の動向もしつかり把握してるんだ。さすがだね」

「そんな僕なんてまだまだ・・・」

倉本はうつすらと微笑み困ったように頬を掻く花菱を見据える。

初めは笑っていた花菱も視線に耐えられなくなったのか目を伏せ、「とにかくさ」と元氣よく言った。

「せっかくレオもやる気になってくれてるんだし、四人で勉強会しようよ。お互いにお互いの苦手分野カバーしあえば赤点なんか怖くないから。ね、海生？」

「え、俺？」

「そうだよ。僕らの中で赤点候補生は海生だけなんだから、肝心の海生がやる気出さなきゃ意味ないでしょ？」

確かにそのとおりなんだけど、その言い方ちよつとひどくない？「桜井くんはいいよね？参加してくれるんだよね？」

桜井は一瞬驚いたように目を見開き、すぐさま、対花菱用の不機嫌顔になって「やだね」と言った。

「何で？」

「一人で勉強する方が好きだからだ」

「みんなで勉強するのも楽しいよ？」

「別にあんたらと楽しく勉強なんかしたくねーよ」

桜井は俺の方に向き直り、「そうゆうことだから」と言うなり、一人でスタスタ歩き出した。

「桜井くん帰っちゃうよ？海生、追いかけていいの？」

「・・・ああ、いいよ。どーせ帰り道違っし、夜にでもメールしとく」

「そっか」

花菱は目を二三度パチパチしばたかせると、ニツコリ笑い、

「じゃあ僕も帰るね。桜井くんとは同じ方向だし、園芸部の話しも

「したいから一緒に帰る」

止める間も無く、花菱は走り出す。今の会話が聞こえたのか、桜井の歩く速度が若干上がった気がする。

「大丈夫かな」

桜井は花菱のこと苦手みたいなのに、しつこくされてぶちきれたりしなきゃいいけど。

「さて、僕らも帰ろうか」

「え？」

てつきり一人で帰るもんだと思っていた倉本は俺の顔を見上げると、エンゼルスマイルを浮かべさざりと言った。

「僕、チャリ通なんだ。今日は特別に真田を途中まで乗せてあげよう」

優しい言葉の裏に隠された真の意味に気付き、そろそろと尋ねてみる。

「それってもしかして、乗せてやる代わりに俺に自転車漕げさせてる？」

「それ以外に何かあるんだい？」

「・・・だよー」

倉本に爪が刺さるくらいがっちり腕掴まれてるから逃げるに逃げられない。

人の心配なんてしてる場合じゃなかったか。



昨日の夜はハルちゃん、そんでもって今日は倉本とチャリンコ二人乗りの帰り道。

ハルちゃんとはデートの帰りって感じでちょっとドキドキして楽しかった。倉本を乗せて帰るのは決して楽しいものではないが、制服でチャリンコ二人乗りって、何かすごい青春って感じした。

「青春だねえ」

鼻唄交じりに後ろの倉本は楽しそうに言う。

「こーゆーの大好きなんだよね。『青春』て言葉を絵に描いたような感じ。健全な学生のあるべき姿だよな」

人に自転車漕がせといてよく言うよ。でも自転車二人乗りのどこが健全なのかはわからないが、『青春』だと感じてる部分では初めて倉本と意見があつたな。

「時に真田、おまえはなぜ僕の忠告を聞かないんだ？」

「うわー、でたよ。この感じだとまためんどくさそうな話聞かされそうだな。」

「えーなにー？」

わざと聞こえなかったようなふりしたら、倉本に思い切り背中を叩かれた。

「痛っ！」

「何故、僕の話を目に聞こうとしないんだと言ってる」

「・・・だってよお、俺が誰と仲良くしようが俺の勝手じゃんかよ。無視したらまた何かされると思ったから、しぶしぶ答える。」

「あの不良はお前に嘘をついて隠し事してるんだぞ」

「逆に聞くけど、その嘘とか隠し事って具体的にどんなこと？」

「今はまだ言えない」

「なんだそりゃ。でもさ、人間生きていくうえで人には言えないことと言つ必要のないことってあるじゃん。桜井が俺に隠し事してるっ

てのも、その類いじゃないのか？」

もし本当は違ったとしても俺はそう信じてる。

「あの不良がお前のことを利用してるとしてもか？」

「利用してると言ってもさ、実感がわかないんだよ。俺自身いつたい何に利用されてんだかわかってないから。園芸部復活のために雑用手伝わせるのが利用してると言うなら俺は喜んで利用されてやるよ」

「まいったね。これじゃ」

そう呟いたように聞こえたが、「何がまいるんだ？」と聞くよりも倉本が喋るのが早かった。

「真田は何であいつの肩を持つ？」

「別に肩を持つてるわけじゃないよ。あたりまえのことしてるだけで」

「あたりまえのこと？」

いぶかしげな声からすると、倉本は俺が何を言いたいのかわからないらしい。

「桜井は俺の友達だから。友達のことを信じて味方するのはあたりまえのことだろ」

て、花菱の受け売りだけださ。

「友達？」

「そう、友達」

「友達、ね」

一瞬の間があつて、突然倉本が大きな声で笑いだした。

「何だ！？どうした!？」

あんまり大声であんまり楽しそうに訳も分からず笑うもんだから、半ば本気で倉本は気が狂ってしまったのかと心配した。

そういえば昨日の夜も自転車乗ってたらハルちゃんが突然笑いだしてびっくりしたつけ。何これ。デジャブてやつか？

買い物帰りと思われるおばさんにすれ違いざま冷たい視線をあびせられ、俺は慌てて倉本をたしなめた。

「倉本ちよつと落ち着けよ。俺たち何か変な目で見られてる」

「それは困るな。変なのは僕じゃなくて真田なんだから」

「何でだよ」

「まさかそこで友達だからなんて言葉が出るなんて思わなかった。小学生や幼稚園児じゃあるまいし、よくそんなことが恥ずかしげもなく言えたもんだね」

俺も初めて聞いたときは恥ずつ！て思ったよ。

「でも大事なことだろ」

「そうだねー。友達は大事にしなくちゃねー・・・まったくおめでたいヤツだよ、お前は。まあせいぜい桜井と一時の友達ごっこを楽しめばいいさ。どーせそのうちあいつとは口も利けなくなるんだから」

「あのさあ、」

自転車を止めて、後ろに座る倉本を肩越しに見やる。

「倉本は俺に何か恨みでもあるの？」

「お前は僕に何か恨まれる覚えがあるのか？」

「じゃあ桜井に恨みがあるのか？」

「あの不良とはまともに口をきいたこともないけど。なんだい急に真面目な顔して」

倉本は笑顔を浮かべ「意味が分からない」と俺を見る。

自転車を降り、でも倒れないようにしっかりとハンドルを握ったまま、倉本に向き直る。

「倉本は俺に何をしたいんだ？」

「別に何も？」

「だったら何で俺に突っかかるような言い方するんだよ」

「僕はまったくそんなつもりはないよ。お前が勝手に僕の言葉に過剰に反応してるだけだろ？」

「昨日も今日も俺のこと馬鹿だの阿呆だの散々罵ったじゃないかよ」

「別に罵ってはいない。僕は事実を述べたまでだ。それともお前は自分のことを馬鹿でも阿呆でもないと思ってるのか？」

思わずぐつと言葉につまる。そう言われると返す言葉が出てこない。自分でも馬鹿だなんてしみじみ思うことあるし。

「ついでに言うならお前は頭も悪いし要領も悪い。運動神経もよくないし、無駄に背が高いわりに小心者、どうしようもない愚図で救いようのないヘタレだ。おまけに、」

「もういいよ！」

倉本から見て俺がどれだけ情けないダメ人間かはわかったからもう勘弁してくれ！

「倉本は俺のことが気に入らないから人の気持ちを考えずポンポン平気で本当のこと言うんだな。よくわかったよ」

倉本は答えない。面白そうな顔してこの後の展開を期待して見ている。

「倉本の言うとおり俺は馬鹿だし阿呆だし無駄にでかい愚図だよ。全部事実だから俺は何言われても怒らない」

怒らないけど、人並みに、いや、人並み以上に傷ついているんだぞと心の中でつけたす。

「だけど桜井のこと悪く言うのはやめてくれよ。倉本は笑ったけど、桜井は俺にとって本当に大事な友達なんだ。倉本が知らないだけであいつは優しくてすごい奴なんだよ。その桜井が俺のせいで悪く言われるのは嫌なんだ」

ましてや倉本みたいなねちっこくて嫌みったらしい性悪に馬鹿にされるのは腹立たしい通り越して、桜井に申し訳ない。

「倉本がいつたい桜井の何を探ってるのか分かんないけど、俺はあいつが隠し事してようと嘘ついてようといい友達でいたいんだ。頼むから桜井のこと、園芸部のことはそつとしておいてくれ」

「やだ」

「即答かよ！」

ちよつとは考えてくれたっていいのに！

「僕の趣味は人の面倒事に首を突っ込んで引つ掻き回したいだけ引つ掻き回すことなんだ。それをやめろって言われてやめられるわけ

ないだろ」

唇を三日月型に歪め妖しく笑う倉本を、出来ることならこのまま自転車ごと横倒しにしてやりたかった。

「真田は勘違いしてるね」

「何を？」

「僕は決して真田が嫌いなわけじゃないんだよ」

寂しそうに笑い、倉本はそう言った。

「え？」

戸惑う俺に、倉本はの例のとびきりの笑顔を向けると、

「僕はね、真田だけじゃない、桜井も含めて、お前ら園芸部が大っ嫌いなんだ」

清々しいくらいにはつきりと言われ、思わずよろめき倒れそうになるのをなんとかこらえる。

「不良少年とごく普通の平凡な少年がひょんなことから協力して園芸部を作ることになった。権力振りかざして力でねじ伏せようとす学校との闘いの中で友情を深めながら、二人は園芸部設立を目指す・・・なんて青春ドラマでもやってるつもりなの？毎日毎日裏庭のゴミを拾って、関口に押し付けられた雑用こなして、挫けそうになればお互いに励まし合って支えあう。なんと美しい友情だろう。

本当、美しすぎて気持ち悪いくらいだよ。園芸部を設立して花壇を作って誰が何の得をするってのさ？同じことの繰り返しで全然報われないのに、『でもいつかきつと・・・』なんて思ってるんだろ？馬鹿馬鹿しくて言葉も出ない。そーゆーの全部がうっとおしくて目障りなんだよ。花壇も園芸部も必要ない。僕はお前らを排除したいんだ。そのためにあの不良桜井のことを徹底的に調べあげて弱味を握り僕の言うことをきかせる必要がある」

「だから真田こそ僕の邪魔しないでよね」と倉本は軽い調子で言い放った。

それなのに俺は何か固くて重い物で頭をガツンと殴られたみたいな強い衝撃を受けていた。

こんなに楽しそうに、こんなに酷いこと、口に出来るヤツがいるなんて、信じられなかった。

「どうしたの真田？何とか言いなよ？」

目の前の倉本は今、自分が言ったこと、まるで何でもないみたいに平気な顔をしてる。

「お前、ひどいな」

倉本は表情を変えず俺の顔を見上げる。

「俺、倉本のこと好きじゃないけど、好きにはなれないけど、口は悪いし性格もものすごい悪いけど、根はいい奴なんだろうなって心の何処かでひそかに思ってたんだよ」

だって花菱がそう言ったから。「レオはいい子なんだよ」って言ったから。花菱が言うんだからそうなんだろうなって思おうとしたのに。全然まったく見当違いだった。

「ひどいな、倉本は。ひどいこと言っても平気な顔してられるなんて、ますますひどいな」

「忠告を聞かないお前が悪い。僕は言ったよね、巻き込まれなくなかったら桜井から離れろって」

冷たい声。目を細め倉本は不適に笑う。

「真田。今言ったことは僕からの最後の忠告だと思え。僕はこうゆう人間なんだよ。お前がやめると言おうがひどいと言おうが僕は僕の好奇心が満たされるまで何もやめるつもりはない。もうこれ以上僕にあーだこーだいちやもんつけられて傷つきたくないと思うなら、あいつから離れろ」

倉本は自転車から俺の手をはずすとそれに股がり振り向いた。

「明日の勉強会。お前は来ない方がいい。僕は何を言うかわからないから」

それだけ言うと倉本は自転車をこいで行ってしまった。

右も左も分からない、中途半端なところに身も心も置き去りにされて、俺はただ途方にくれるしかなかった。

倉本、恐ろしい奴。何度も何度もため息をついて、いつもの倍の距離をとぼとぼ歩いて帰った。いつもの倍、疲れた。

ようやく家の明かりが見えた頃、外灯の下で誰かが立ち話してるのに気付いた。ハルちゃんと、もう一人は誰だろう？

「おお、遅かったな」

俺が声をかける前に、ハルちゃんが先に言った。

「ただいま」

ハルちゃんの向かい側に視線を投げ掛ける。

街灯の下にいるせいかわりに青白く見える男。大学生くらい。ハルちゃんの友達？

「皆川、海生」

ハルちゃんが顎で交互に俺らを示し、お互いに「ああ」と納得する。そうか、この人が。

「こんばんは」

「どうも」

「昨日はありがとうね」

「あ、いえ、」

人見知りがちで口下手な俺はこうゆう時、うまく会話ができない。緊張のせいかなんだかどもってしまふのだ。

皆川さんは俺のことを爪先から頭のとっぺんまで舐めるように見て、笑った。

「背、高いんだね」

「はあ、まあ」

「海生、早く入りな。今日はカレーだつて」

気がつかつてか、話の邪魔だったのかハルちゃんがそう言ってくれた。

皆川さんに軽く会釈し、中に入ると玄関で仁王立ちする母ちゃん

に出迎えられた。

「見た!？」

「何を？」

「ハルちゃん。と、その彼氏」

「彼氏って・・・ああ皆川さんのことか」

「あの人、皆川くんて言うの？」

「そう。でも彼氏じゃないよ。友達だつてハルちゃんは言つてた」

「本当に？」

「本当だよ。それにこれから男になろうつて言つてるハルちゃんに彼氏なんているわけないじゃないか」

「あ、そうか」

「何惚けたこと言つてんだよ」

脇をすり抜け階段を上がる。

「着替えたらすぐに降りてきなさいよ。」ご飯にするから」

「わかつたよ」

部屋の中は当たり前だが真っ暗だった。鞆を放り投げるとそのままベッドに倒れ込む。

目を閉じると、朝、桜井とあつたところから、倉本と別れるまでの一日の出来事が断片的に蘇る。

特に印象的で強く記憶に残っているのは強気な花菱の発言、終始顔が怖かつた桜井、それから倉本の発した非情な言葉の数々。

人間好き嫌いあるから仕方ないといえば仕方ない。でも、ただ何か気にくわないうって理由であんなボロクソに人のこと罵倒していいはずがない。

だけど倉本はまったくもってそれを悪いことだと思つていない。むしろ悪いのは倉本の忠告とやらを素直にきかなかつた俺だと言われた。そんな話あるかつての。

そういえばシヨックのほうが大きくて、倉本に何にも言い返せなかつたな。

「性悪自己チュー野郎め。頭のおかしい奇人変人はお前の方じゃな



いか」

「……やめよう。誰もいない部屋で悪態ついても虚しくなるだけだ。情けなさ過ぎてもうため息も出ない。」

花菱は何である奴のこと、「いい子」なんて言ったんだろう。全然いい子なんかじゃない、最悪な奴じゃないか。

倉本は桜井のこと嘘を吐いてるなんて言っただけど、それ言うなら花菱のほうがよくばど嘘つきだ。

「暗い部屋で何やってんだ？」

ハルちゃんの声がしたのとともに明かりがつけられ、まぶしくて一瞬目を閉じてしまう。

「おばさんが呼んでるぞ。飯にするから早く来いって」

「ああ、うん」

でも何だかすぐには動きたくない気分だったり。のろのろと体を起こし、上着を脱ぐ。

「何かあったか？」

「え？何で？」

「元気ないじゃん」

「そんなことないよ」

ハルちゃんは俺の頭に手を置くと、わしゃわしゃと髪を撫で回した。

「海生は昔からこれ好きだったよな。何かあるといつもこれをやって、最初のうちは安心するのか笑ってるんだけど、そのうちに泣き出して、近所の悪ガキにいじわるされた」とか言っただ」

「そんなこともあったね」

目を閉じてハルちゃんの手の暖かさを感じとる。なんだろう、ただそれだけで本当に心のギスギスした部分が丸く落ち着いてきた気がする。

「ありがとハルちゃん。ちょっと落ち着いた」

「やっぱ何かあったんだな」

「うん。でも大丈夫」

昨日の今日で桜井に関することで落ち込んでるなんて話したら、また女々しいって言われるかもしれないしな。

「皆川さん来てたんだね」

「おう。あいつ驚いてたぞ。海生が想像以上に男前だったって」

皆川さんは俺のことどんな奴だと想像してたんだろ。

「そういえば・・・昨日の話は聞いたの？」

ちよつとドキドキしながら尋ねるとハルちゃんは首を横に振った。

「いや、また明日話すって」

「明日？」

「久しぶりに二人で遊びに行こうって。映画見て適当に買い物でもして、飯でも食おうって」

ハルちゃんは軽く言っただけ。が、

「それってデート？」

「デート？いや、そんな雰囲気じゃねーだろ。なんせ俺と皆川だからな」

ハルちゃんはケラケラ笑っているが、俺は笑えない。

「でも二人で行くんだろ？」

「そうだよ」

「じゃあやつぱりデートじゃん」

「だから違うって。友達と二人で遊びに行くだけなんだから。お前だって桜井くんと二人で遊びに行ったりするだろ？それと一緒にだよ」  
その例えはあまりよろしくない。だって俺と桜井は二人で気軽に遊びに行くような仲じゃないから。説得力に欠ける。

「ハルちゃん、男になるって自覚あるの？」

「もちろん」

「だったら何でこれから性転換する予定の女が男とデートになんて行くんだよ」

「だーから、デートじゃないっての。何回言えばわかるんだよ」

「ハルちゃんにとってはデートじゃなくても、皆川さんにとってはデートだよ」

「お前もしつこいね」

ハルちゃんは呆れたような目で俺を見下ろしたため息をつく。

「だいたいにして俺が誰と遊びに行こうと俺の勝手だろ。何でお前がムキになるんだよ」

「俺はハルちゃんの弟分として心配してやってるんじゃないか。何かあったらどうするの？」

「何かって何だよ？何を心配してんだよ。そんなこと言っつて、お前さ」

ハルちゃんはニヤニヤ笑いながら俺と視線を合わせて言った。

「俺が他の男と出掛けるのにヤキモチやいてんじゃないかねえの？」

咄嗟に返す言葉が出てこなくて、息がつかまってしまふ。ハルちゃんはさらにニヤニヤしながら、「図星か？」と俺の頭を片手でぐしゃぐしゃ撫でた。

「そんなんじゃないし。何言ってるの。ハルちゃんちょっと自意識過剰だよ」

手を振り払い、下を向いて部屋を出る。

「そりゃあ悪かったな」

軽い調子。全然悪いと思ってる。俺は本気でハルちゃんのこと心配してるのに、ハルちゃんのこと思って言ってるのに、真面目に話してるのに……。

「海生、」

ハルちゃんの手が背中に触れる。

「ごめん、怒ったか？」

さつきとは違う。ちょっと不安そうな声。謝るなら始めからあんなこと言わなきゃいいのに。

「怒ってはいない」

ただ悲しいというか寂しいというか空しいというか、そんな気がしただけだ。

「俺って真面目な話をしてるのに、真面目に話を聞いてもらえないんだなって思っただけ」

「そんなことねーよ。そりゃ今のは結果的にちょっとからかったようになっちゃったけど。でも真面目な顔で尋ねるようなことでもないからさ」

「何が？」

「海生は俺が皆川と出掛けるのにヤキモチやいてるのかって」

「だからっ！」

「そうだったら嬉しいなって思ったんだよ」

前に回ってハルちゃんは正面から俺を見上げる。

「泣き虫弱虫で俺がいなきゃなんも出来なかった海生がこんな男前になって嬉しかった反面、実はちょっと寂しかったんだ。桜井くんのことさ。お前があんまりに熱心に話すから、いい友達が出来てよかったなって気持ちと、なんとなく海生をとられたような変な気持ちとがあって……だから昨日もつい意地悪な質問しちゃったし」

意地悪な質問?・・・て、

「桜井が実は俺のことを嫌ってたらってやつ?」

「そう。お前、すごい一生懸命に桜井くんの弁護して、言うんじゃなかったってちよつと後悔した。やっぱイトコの姉ちゃんと仲のいい男友達じゃ勝負にならねーよな」

勝負って、ハルちゃんはいったい何を桜井と争ってたんだろう。

「だから海生が皆川にたいしてヤキモチやいて、イトコの姉ちゃんとられて寂しいなって思ってくれてるなら嬉しいなーって。本当に自意識過剰だな」

そんなことないよ。そう言いたかったのに、その後なんて言えばいいのか、言葉が見つからなくて、結局何も言えなかった。

「悪い、何か変な空気になっちゃったな」

違うのに、ハルちゃんは悪いことなんてしてないのに。謝る必要なんてないのに。

「さつさと飯食いに行こうぜ。おばさんに怒られちまう」  
階段を降りようと先に歩き出したハルちゃんの腕をたまらず掴んでしまった。

ハルちゃんもびっくりしていたが、当の本人である俺もびっくりしていた。何やってんだ、俺。

「どうした?」

ハルちゃんは優しく微笑み俺に向き直る。

「何か言いたいことがあるのか?」

言いたいことはたくさんあるはずなのに、言葉がうまくつむげない。

何を言えばいい?

今、言わなくちゃいけないことは何だ?

「とりあえず、」

「とりあえず?」

「ハルちゃんは悪くないから謝らなくていいよ」

「そうか」

「それと、」

「うん？」

「ちよつと・・・や、だいぶ・・・かなり、皆川さんにヤキモチやいてる、かも」

「そうなのか」

「俺の知らないことたくさん知ってるから」

俺とハルちゃんの空白の九年間、そのうちの何年間かは皆川さんはハルちゃんと一緒に過ごしてて、その時を経て今はハルちゃんの親友で一番の理解者で、俺が一番知りたいたいこと、ハルちゃんが男になりたがってる理由を知ってる。

「ハルちゃんは、皆川さんのこと友達として信頼してるし、大事に思ってるんだよね」

「もちろん」

「じゃあ、もしも皆川さんが、」

そんなことを聞いてどうするのか自分でもよくわからないけど。

「男になるのやめろって言ったら、ハルちゃんはやめる？」

俺の質問にハルちゃんは目を丸くしたが、すぐに真顔に戻った。

「やめないよ。俺は俺の意志で生きてんだ、テメエの指図は受けねえって言ってる」

「そうだね」

それを聞いて、何故だか少しだけ心の中にあつたモヤモヤした雲のようなものが消えた気がした。

「何でそんなこと聞くんだ？」

「何でもない。早くご飯食べに行こう」

ハルちゃんを促し、階段を降りる。

問題は山積みで何にも解決はされてない。でもとりあえず今は腹ごしらえが先だ。

明日も頑張らなくちゃいけないんだから。

女の子同士でトイレの個室に入る・・・てのもどうかと思うけど、例えばそれを誰かに見られたとしてもそこまで変な目で見られることはないと思う、あくまで個人的な見解だけど。

でもそれが野郎同士だったら、どうなんだろう。しかもそれがファミレスの男女兼用トイレの、一つしかない個室。

もし万が一若いおねーちゃんとか入ってきて、順番待ちしてる時に、中から複数の男の話し声や物音がしたら不審に思うんじゃないだろうか。

不審に思うだけならまだいい、もし出てきたところをばっちり目撃された上に汚物でも見るような冷たい目で一瞥されたら、それが全然知らない人でも、違うんです！やましいことは何もしてません！て全力で否定するしかないだろう。

「真田、話聞いている？」

倉本に捕まれた前髪を思い切りひっぱられ、慌てて「聞いている！聞いてます！」と返事をする。

「ならいいんだよ。で、」

腕を組み倉本はドアに寄りかかるとうっすら微笑みを浮かべる。

「昨日、あれだけ言ったのに何で勉強会に参加してるんだか、その理由を知りたいんだけど？」

「俺だつて来るつもりはなかったんだよ。話せば長くなるんだけどな、」

「簡潔にまとめろ。あいつらに覚られる。無駄話してる暇はない」

あいつらとは店内の窓際の席で仲良く？勉強をしている桜井と花菱のことだ。

「桜井に頼まれたんだよ。三人じゃ気まずいから来てくれって」

「僕の忠告よりも不良の脅しのが怖かったわけか」

「そうじゃなくて本当に頼まれたんだ」

いつものように、昇降口で靴を履き替えていたら、昨日の朝みにまたもや腕を引つ張られ、職員トイレにつれていかれた。

「だから職員トイレはまずいって、桜井」

桜井は外の様子を伺い、誰も来ないのを確認するなり、腰をほぼ直角に曲げて頭を下げた。

「桜井！？何事！？」

そんな外が気になるなら職員トイレなんて入らなきゃいいのにと  
いう文句は、驚きのあまりどこかへ飛んでいった。

「海生、頼む。今日の勉強会一緒に行ってくれ」

何を言われるのかと身構えていたら、なんだそんなこと・・・。

「て、急にどうした。桜井行かないって言ってたのに」

「事情が変わったんだ。お前こそどうしたんだよ。今朝メール見て  
びっくりしたぞ。俺は海生が行くと思ったから参加することを決めたのに」

事情ってどんな事情？と聞くよりも早く桜井が身を乗り出してきた。

「頼むよ、海生がいなかったら俺一人であの二人の相手をしなくちゃ  
いけなくなる。そんなの耐えられねーよ」

「そう言われても・・・」

桜井の気持ちはよくわかる。俺が桜井の立場だったら確かに嫌だ・  
・花菱には失礼だけど。でも行ったら行ったで、また倉本に何を  
されるか分からないという恐怖もある。

別に俺は倉本に屈したわけではない。あれだけ言われてまだ懲り  
ないのかと自分でも思うが、俺はこれから先も桜井との付き合いを  
続けていくつもりだ。倉本に何を言われようが関係ない・・・関係  
ないけど、今日の勉強会は別。行ったら痛い思いするってわかって  
て行くほどバカじゃない。それにもう、本当に、昨日の事でこたえ



たんだ。学校では同じクラスだから嫌でも1日1回は顔を合わせてしまうが、それ以外の場所ではなるべく倉本と関わりたくない。

「桜井もそんなに嫌なら行かなきゃいいんじゃないか？別に強制じゃないんだから」

「それは出来ない」

「何で？事情が変わったって言うてたけど、何がどう変わって、勉強会に参加することになったんだ？」

桜井は答えない。目をそらし、眉を下げ困ったようにトイレの床を見つめている。学園一の不良と謳われる（？）桜井でもこんな顔するんだなとしみじみ思っていたら、逆に訊ねられた。

「海生は何で行くのやめたんだよ」

「桜井と花菱が帰った後に成り行きで俺と倉本の二人で帰ることになっているんな話をして最終的に倉本に来るなって言われたから」

「何だつて倉本はお前に来るなんて言ったんだ？」

説明してもよかつたんだけど、長くなりそうだし、倉本が桜井のことこう言ってたんだって話すのは、俺にとっても桜井にとってもあまりいい気はしないだろうと思っただから「ちょっと倉本の機嫌を損ねることを言っちゃって」と誤魔化した。

桜井は納得してなさそうだったけど、それ以上深くは追求してこなかった。

代わりに「頼むよ。後生だから」を繰り返し、結局俺はまたもや倉本の忠告（と言う名の脅迫？）を無視し、勉強会に来てしまったと言っわけだ。

学校は一時以降立ち入り禁止のため、近所のファミレスまで先に三人で行き、勉強をしていたところに一人遅れて倉本がやってきた。俺の姿を見るなり「馬鹿が」と俺にしか聞こえないように低く唸るように呟いた。

それから、

「一分したらおいで」

小声で囁くと、倉本は「ちょっとトイレ行ってくるね」と席をた

った。

で、一分たつてトイレに向かったところ、中で待ち構えていた倉本にむんずつと前髪つかまれて強制的に便器に座らされ・・・今に至る。

「俺だつて倉本の忠告とやらにおとなしく従いたかつたよ。だけど桜井がどーしてもつて言うから、友達の頼みを無下には出来ないだろ?」

倉本は額に手をあて、盛大なため息をついた。

「どうして僕の周りはいこうも人の話を真面目に聞かない無礼で不愉快なヤツが多いんだ・・・まあいい」

俺に対する文句らしきことを一人でぶつぶつ呟きながらトイレのドアを開けた。

「さっさと出る。お前に聞くことはもう何も無い」

ようやくお許しを得て、俺はいそいそと個室から出る。

「どうなつたつて、僕はもう知らないからな」

冷たい眼差しで俺を一瞥すると、倉本はトイレを出ていった。

それがどういう意味なんだかはよくわからなかったが、その一言で早くも俺は自分の行動を後悔し始めていた。

それは唐突にきた。

「昔、うちの学校に園芸部があったって知ってる？」

「は？」

「え？」

「なに？」

みんな黙々と自分の勉強をしていたから、突然倉本にそんなことを言われ、ちゃんと返事が出来なかった。

「昔、うちの学校に園芸部があったんだよ」

倉本は俺たち三人を順番に見回し、「知ってた？」と質問を繰り返した。

「知ってたも何も、お前が話したんだろ」

「真田はあの時が初めてだったね」

倉本は頷き、隣の花菱を見る。

「花菱も知ってたよね？真田に話を聞く前から」

「うん、まあね」

花菱も笑顔で頷き返したが、どこことなく歯切れが悪い。

「桜井は？」

「そんなこと聞いてどーすんの？」

桜井は質問に答えず、逆に倉本に尋ね返す。

「何か理由がなきゃ訊いちやいけない？」

「時間の無駄だろ。今日は勉強しにきたんだからよ」

今日の桜井は倉本が来てからずっと機嫌悪かったけど、心なしか何だか急に不機嫌の度合いが大きくなったような……。

「勉強の息抜きに少し面白い話をしてあげようと思ってね」

「誰も頼んでねーよ」

桜井はイライラしたようにテーブルを指で叩く。

「そっだよ。僕は誰にも頼まれちゃいない。僕は僕の考えがあって、

この話をしようと思ったんだから」

「レオの考えってなに？」

花菱が訊ねると倉本はニヤッと口元を歪め、静かな口調で言った。「桜井が花壇を造り、園芸部を復活させようとしている真の理由を暴こうと思ってるね」

真の理由？

「倉本、それは説明しただろ。俺らは裏庭のゴミをなくすために」「そう思ってるのはお前だけだよ。何度も言ってるだろ。桜井は嘘をついて、園芸部を復活させる真の理由を隠している。それに間違いないはないんだ」

倉本は右手の人差し指を、拳銃に見立て、桜井の鼻先に突き付ける。

「僕はだいぶその真実に近づいてきている。いや、もうほとんどわかっていると言ってもいいくらい」

「俺がいつたいどんな嘘を吐いて何を隠してるって言うんだよ」

桜井は真正面から倉本を睨み付ける。

倉本はそんな桜井の殺気をものともせず「いいの？」と軽く微笑む。

「真田の前で言っても？真田に知られたくないから隠してたんじゃないの？」

何でそこで俺の名前が出てくるんだよ。

「言えるもんなら言ってみろよ。残念ながら俺には身に覚えがないもんでね、何のことやらさっぱりだが」

口ではそう言うが、くだらないこと言いやがったらただじゃおかない。桜井の身体からはそんなオーラが滲み出ているようだった。

「そう。なら教えてあげるよ」

倉本はにんまり笑い、口を開いた。が、

「あ　っ！」

と突然、花菱がすつとんきょうな大声をあげ立ち上がったものだから、俺たちはもちろん、周りの客や店員までもが、何事かと一斉

に花菱を見つめた。

花菱は眉を八の字に下げ、心底悲しそうに、

「コーヒーに砂糖入れちゃったよー。甘い嫌いなのにー」

思わず全員がくしつとずっこける。いや、本当にずっこけはしないけど、心理的にはそんな感じ。これがマンガなら本当にこの場で全員ずっこけてたところだ。

「アホ！ そんなことでいちいち騒ぐんじゃないよ！ 何かと思っただじゃねえかつ！」

代表で桜井がツツコミを入れる。周りの客も店員もすごい剣幕で花菱を怒鳴る桜井を見ると、息を呑み、瞬時に目を逸らした。

「何で甘い嫌いなくせに砂糖なんか入れるんだよ！」

「レオの話を夢中で聞いてたら無意識に……」

「んなくだらねーことで騒ぐな！ 店内であんなでかい声出したら周りの迷惑だろうが。ちつとは考える！」

花菱よりも、むしろ花菱を怒鳴る桜井の方が迷惑だよ。その証拠に後ろの席のおばさん方、レシート持って慌ててレジに向かったぞ。みんな桜井が怖くて、そわそわ落ち着かなくなってる。

「つーか、ドリンクバーなんだから新しいの持ってきてくりゃいいだろ？」

「だってまだ一口も飲んでないんだよ？ もつたないじゃない」

「そう思うなら飲めよ」

「だから甘い飲めないんだってば！」

「何なんだよお前は！ めんどくせえな！」

俺の目の前で繰り広げられる桜井と花菱の口喧嘩。きつと止めた方がいいんだろうけど、怖くて口を挟めなかつたり……。桜井が怒鳴るって怒るところを始めて見たけど、想像通りの恐ろしさだ。しかし、そんな桜井と互角に（？）言い合える花菱もすごい。こいつは恐れるということを知らないのか？



「……おい」

バンっ！とテーブルを一つ叩き、倉本がくだらない言い合いをする桜井と花菱に爽やかな笑顔を向ける。

「いい加減にしるよ、馬鹿どもが。これ以上みつともない姿をさらすなら、上官のビンタ往復でお見舞いするからな」

周りの人間に気付かれぬように笑顔のまま、地の底から這い上がってきたみたいな低くどすのきいた声で倉本は宣った。

上官のビンタって……具体的にどんなのかは想像つかないけど、とりあえずかなり痛そうだ。

桜井と花菱も同じことを考えたのか、すぐごと着席する。

倉本は満足げに頷き、

「桜井。花菱の新しいコーヒーを持ってきてやれ」

一瞬、桜井は「何で俺が」という顔をしたが、倉本が右手を上げると、そそくさとドリンクバーコーナーへ向かった。

倉本は花菱の作った砂糖入りコーヒーを一口飲むと、ようやくいつもの調子に戻って言った。

「まいったね。もうこの店、来れなくなっちゃうよ」

「ごめんね、レオ。僕がコーヒーに砂糖を入れたばかりに」

問題はそこなのか？ いや、騒ぎの原因はそこなんだろうけど。

「普通さ、甘いのが嫌いな人間が無意識で砂糖なんか入れるかな？」

倉本はドリンクバーコーナーに目をやりながら言う。

「たまにはそうゆうこともあるんじゃないかな」

「いつも紅茶にミルクと砂糖を入れてる人が、その日は気分を変えて烏龍茶を頼んだとする。だけど友達とのお喋りに夢中で、自分が烏龍茶を頼んだことを忘れて習慣的に砂糖を入れてしまう……それならわかるんだけどね、花菱はコーヒーをいつもブラックで飲んでるよね。いつもブラックで飲んでる人間が砂糖を入れる、いつもな

らしい動作を無意識でしてしまう可能性ってそんなに高くはないと思うんだけど」

「どーでもいいけど、何で砂糖in烏龍茶を例え話に使ったんだろう。烏龍茶に砂糖入れるのもそうそうないと思うけどな。」

「烏龍茶に砂糖入れたのってレオの実話だったよね」

「話をすり替えるな」

ピシヤリと命令口調で言われ、花菱は口を閉ざす。

「桜井と話している時、視界の端でお前の行動が見えたよ。僕が桜井の秘密を話そうとした直前、お前、自分でシュガーポットに手を突っ込んで、わしづかみにした砂糖をコーヒーにぶちこんだら？」

「え、そうなの!？」

花菱の真向かいに座ってたのに、全然気付かなかった。それだけ倉本の話しに気をとられていたということだろう。

「真田、飲め」

倉本に花菱の砂糖入りコーヒーのカップを渡される。

何がしたいのかよくわからなかったが、言われた通り、一口飲んでみる……うげっ。

「何これ。げる甘い。こんなん飲んだら、気分悪くなる」

「だろ? 間違えて入れちゃった」と言う割りには入れすぎじゃないか? いったいどれだけ入れたんだか。まあそれくらい必死だったわけだろう」

花菱はヒラヒラと手を振りながら、

「違う違う。本当に間違えて入れちゃっただけで」

ガチャンッと派手な音を響かせ、中のコーヒーが飛び散るくらい乱暴に、倉本はカップを花菱の前に置いた。

「花菱、これ以上つまらない嘘を重ねると本当に上官のビンタくらわせるぞ」

「それは嫌だな。レオに叩かれると痛いから」

花菱、上官のビンタくらったことあるのか……いや、今はそんなことより、



「砂糖入れ間違えたのが嘘だって言うなら、何で花菱はあんなくだらない騒ぎ起こしたんだよ？」

疑問を口にした俺を倉本は「余計な口を挟むな」と言わんばかりにギョッと睨んできた。

「くだらないってひどいなあ。僕は僕なりに一生懸命考えたのに」言葉とは裏腹に花菱は楽しそうに笑った。ドリンクバーコーナーを一瞥すると、急に真面目な顔になり、身を乗り出した。

「レオ、ああゆうやり方はよくないよ」

「僕に指図しようってわけ？」

「そんなつもりはないよ。レオが桜井くんは何を言おうとしているのかはわからないけど、もし本当に桜井くんが嘘を吐いてたり隠し事してたりするなら、それには何か理由があって仕方なくやってるんだよ。好奇心で他人が勝手に暴いていいものじゃない」

いつつもヘラヘラニコニコ笑ってしまりのない花菱が真面目な顔して真面目なことを言うと、何だか妙な感じがする。

「それじゃあ花菱は倉本の話を止めさせるため、咄嗟にあんな騒ぎを起こしたんだな？」

花菱は頷いて、倉本を見る。

「もうすぐ桜井くんが戻ってくるけど、もうこの話はしないであげてほしいんだ。お願い、レオ」

倉本は無表情で花菱をじっと見つめる。

「俺からも頼むよ。何か変な空気になるし、倉本だって嫌な思いしたくないだろ？」

無駄だとは思つが、俺からも倉本に訴えてみた。こいつが「わかったよ」なんて言うことはまずないだろうけど、こいつだって人の子なんだから可能性0ではないだろ。

「わかった。いいよ」

「え、いいんだ!？」

倉本が怪訝な顔で俺を見る。

「あ、いや、何でもない」

まさか「いいよ」なんて言うなんて思わなかったからびびった。

「ありがとう。レオってやっぱり優しいよね」

安心したように微笑む花菱に倉本はバカにしたように鼻で笑う。

「喜ぶのはまだ早い。交換条件だ」

「交換条件？」

「桜井のことを暴くのはやめてやる。その代わりに、花菱、僕の質問に正直に答える」

「いいよ。なに？」

花菱は何を聞かれるのかワクワクしているようだった。

「昔あった園芸部の話、花菱は真田に聞く前からあの話を知っていたな？」

「うん。知ってたよ」

「それは誰に聞いた？」

「それが誰に聞いたんだが忘れちゃったんだよね」

花菱は笑いながら頬を掻く。

「花菱、僕は正直に答えると言ったはずだ」

「だから正直に言ったよ。忘れちゃったんだ」

「僕の叔父は昔、この学校で教鞭をとっていたことがあるんだ」

「何の話？」

「僕の叔父は当時の生徒会の顧問をしていたね、園芸部を廃部に追い込んだ張本人だからそのへんの事情には詳しいんだよ」

なるほど。だから倉本は園芸部があったことを知ってたのか。

「園芸部は今も昔も弱小だからね、存在を知る生徒はまずいない。」

ましてやおじいさんが土地を寄付したことなんていうのは、当時の園芸部の部長と一部の先生しか知らない。そして今現在、学内でこの話を知ってるのは生徒指導部兼生徒会顧問の関口以外いない。でも園芸部を目の敵にしている関口がこんな話をお前にするはずがないよね」

倉本は優しく微笑み、

「では、いったい誰がお前にこの話を聞かせたんだらう？」

花菱は答えない。ニコニコと笑顔を浮かべたまま固まっている。

「可能性として考えられるのは、花菱が当時の園芸部の部長から直接話を聞いた場合。もしくは当時の園芸部の部長と関係する誰かから間接的に話を聞いた場合。どっちにしろお前は当時の園芸部の部長を知ってるはずだよ。じゃなきゃ園芸部があったことを知る術がないんだから」

倉本は笑顔をしまい、テーブルの上で手を組むと、本物の非情で冷徹な上官のような命令口調で「答える、花菱」と言った。

花菱は「あはは、参ったなあ」と笑ったが、倉本からの無言の圧力に耐えられなかったのか、目を逸らした。

何だかさつきから俺一人だけ話についていけないような……。

「なあ、倉本。その当時の園芸部の部長て何者なんだ？倉本の知り合いなのか？」

「僕の知り合いなわけないだろ」

「じゃあ花菱の知り合い？」

「知り合いなんてもんじゃないよ。花菱はその人のことをよく知ってるはずさ」

目をやると、花菱は首を横に振った。

「残念だけど、そんなによくは知らないよ。ほとんど記憶にないんだから」

「なら後者の方が」

「レオは全部わかってるんだね」

目を合わせたくないのか、花菱は倉本を見ようとしない。

「当然。何が忘れちゃったーだよ。僕を騙そうなんざ百年早い」

「レオは目的のためなら手段を選ばないからなあ。こわいこわい」  
「……あのさー、」

また変なタイミングで口を挟んで倉本に睨まれたら嫌だなと思いつつ、そろそろと声をかける。

「結局、園芸部の部長って何者なんだ？俺が聞いたときもそうだったけど、何で花菱は『離れた』なんて嘘をついたんだ？」

花菱は窓の外を眺めたまま、何かを考えているようだった。

「教えてくれないのか？」

「当時の園芸部の部長は僕の友達のお父さんだよ」

花菱は向こうをむいたまま静かに言った。

「花菱の友達のお父さん？」

別に隠すことはないと思うんだけど。

「彼のお父さんは僕らが物心つくまえに亡くなって。だから僕には彼のお父さんの記憶がほとんどないし、あまり人に話したくなかったんだ」

「そうか……何かごめん」

何だか悪いことを聞いてしまったような気がする。

「僕は構わないよ。彼の前でその話をしないでくれれば」

「それはもちろん……あ、でも、その彼って、花菱の友達って誰なんだ？俺の知ってる奴か？」

花菱はそれには答えず。窓の外を眺めている。

「花菱？ 聞いている？」

それとも言いたくないから黙ってるのか？

「ねえ、あれ、どう思う？」

ようやくこちらを向いた花菱は窓の外を指差しながら言った。

「さつきから気になってたんだ。何だかケンカしてるように見えるんだよね」

「どこ？」

倉本と二人、窓に顔を近づけ外を見る。

店の外の少し離れた駐輪場に二人の男。何を言ってるかはわからないが、確かにお互い眉をつり上げて身ぶりを交えながら激しく言い争ってるように見える。

「あれ？なんか、」

花菱を押し退け、窓にへばりつく。

二人のうち背の高い方が俺に気付き、焦ったようにもう一人をなだめようとしている。が、もう一人が噛みつかん勢いで何かを捲し立て、お話にならない様子。

背の高い男は一度相手の腕をとるが、振り払われ、それにムツとしたのか、手首をがちり掴むと、無理矢理何処かへ引つ張つていこうとした。

「あれ？・・・あれ!？」

まるで俺の視線から逃げるように、相手を引き摺る男は昨夜、街灯の下で見た皆川さんに似ていた。そして何かを喚きながら皆川さんらしき人に引き摺られるように歩く相手はハルちゃんによく似ていた。

「ていうかハルちゃん本人じゃね!？」

「ハルちゃん？」

「誰それ？」

「すぐ戻る!」

花菱と倉本の質問には答えず俺は慌てて外に飛び出した。

「テメエに話すことなんて何もねーよ！さっさとどっかにいっちなまえ、馬鹿野郎！！」

外に出るなり聞こえてきた、乱暴な言葉、あの声、間違いなくハルちゃんだ。

声のする方、店の裏に走っていくと、そこにはやっぱり皆川さんとハルちゃんがいた。

皆川さんはハルちゃんを壁に押し付け、抵抗できないようにハルちゃんの腕を抑え込み、あるうことがハルちゃんの顔に自分の顔を近づけていた。

「もしか、ハルちゃん、貞操の危機？」

「何をしてるんですかー！」

そう思った瞬間にはもうすでに全力疾走、俺の声に驚いてこつちを見た皆川さんにそのままの勢いで体当たり、皆川さんは派手にぶっ飛んで地面に落ちていった。

「あんた恥ずかしくないのかよっ！？白昼堂々こんなか弱い女の子に不埒な行為を働くなんてっ！ましてや自分の友達だぞ！？それなのに、こんな、力で、押さえつけて……」

後の方は言葉にならなかつた。急に身体が、声が震えてきて、よろよろと壁に身体をあずけてしまった。

今更ながら心臓がバクバクしだして、変な汗が毛穴から一気にどばつと出てきた。

「海生？」

ハルちゃんが目を丸くして俺の顔を覗き込んでいる。

「ハルちゃん」

「海生、おまえ、どうしてここに？」

ハルちゃんは目を見開き、不思議そうに尋ねた。

「どうしてって、明日からテストだから学校の友達と勉強会を……」

そんなことより、ハルちゃん大丈夫だった？」

「何が？」

「何がって、ハルちゃん皆川さんに襲われそうになってたじゃないか」

「襲われる？」

ハルちゃんは眉を寄せ嫌そうな顔をした。でもすぐに、「ああ」と頷き、

「ちがうちがう。あれは止められてたんだ」

「止められてた？」

「て、何を？」

「皆川にム力つくこと言われて喧嘩になつてな。あんまりにも腹がたったもんで、殴つてやろうと思つたら腕を捕まれて、もう一方の手で殴ろうとしたらまた腕を捕まれて、放せ！ってあばれたら壁に身体を押し付けられて、落ち着け話を聞け、って言われてるところにおまえが突っ込んできたんだよ」

「ああ、なんだ、そーだったのかあ……え？」

油の切れたブリキの人形よろしく、ゆっくりと下の方に目をやる。

皆川さんは地面にあぐらをかいて座り、「そういうことなんだ」と苦笑いしながら言った。

さーっと血の気が引いていくのが自分でもよくわかった。ふらふらしながら地面へたりこみ、そのまま深々と頭を下げる。

「すみませんでした。俺、勘違いして」

「おまえが気にすることね　よ、海生。おまえはちーつとも悪いこととしてねーんだからよ」

皆川さんの代わりにハルちゃんが答え、俺の腕を引っ張って無理矢理立ち上がらせた。

「こんな奴に頭下げることなんてない。帰るぞ」

「え、ちよつと」

帰るも何も俺、花菱たちのこと待たせてるのに、ハルちゃんも皆川さんのことおいていく気なんだろうか。

「待て、ハル。まだ話は終わってない」

皆川さんは立ち上がり、ハルちゃんを呼び止める。

昨日、外灯の下で見たときも思ったけど、皆川さんは俺ほどでな  
いにしろ、背が高い。

何かスポーツでもやってるのか身体はしまってるさうだし、袖をま  
くりあげたシャツから伸びた腕は適度に日焼けし、筋肉もついてい  
る。

ただ背が高くて、ひよろいだけの俺とは違う。よくこんな人を突  
き飛ばせたもんだな。

「だからおまえに話すことは何もねえっての」

「おまえになくても俺にはあるんだ」

皆川さんがハルちゃんに手を伸ばすが、ハルちゃんはさっと俺の  
後ろに隠れてしまった。

え、そういうの困るんですけど。

「俺に話があるならマネージャーを通してからにしてくれ。海生は俺  
のマネージャーだからな」

何それ。いつ決めたんだよ、俺、そんなの聞いてないし。

「海生くん、ハルと話をしたいんだけど」

皆川さんも素直にハルちゃんの言うこと聞かないですよ！

「どうするハルちゃん？」

後ろのハルちゃんにお伺いをたてるが、ハルちゃんは首を振り、  
皆川さんとの面会を拒絶する。

「あ、嫌みたいです」

「ハル、ふざけるんじゃない。海生くんもハルの悪ふざけにのらな  
くていいから」

先にのつたのは皆川さんじゃないかつ！

「マネージャー、帰ろうぜ。俺、こんな奴と同じ場所の空気を共有



してるのも嫌なんだ」

すごい拒絶の仕方だな。皆川さん、ハルちゃんに何を言ったんだか。

「いい加減にしろ」

皆川さんが再びハルちゃんに手を伸ばすのを、俺は何故だか咄嗟に腕を広げガードしてしまった。

「海生くん、どういふつもりかな」

皆川さんの声は静かだったけど、なんとか自分を押さえてる感じがひしひしと伝わってきた。

「あの……ハルちゃんが嫌がってるみたいなんで……やめてください」

「君には関係ないことだと思っけど」

「関係なくないです。俺はハルちゃんのマネージャーってわけじゃないけど、弟分なんです。ハルちゃんが困ってるのにほっっておけません」

自分でもびっくりするくらい、とても落ち着いた声が出せた。身体中冷や汗だらだらで、内心めちゃくちゃパニックってるってのに。

「立派な心意気だね」

皆川さんは笑ったが、目が笑っていない。中学生のガキに邪魔されたのが気に入らないんだろう。

もし、ここで皆川さんがキレて殴りかかってきたとしたら、俺、絶対負けるだろうな。力ないもんな。

かと言って走って逃げる自信もない。足遅いから。

でもこの人、桜井みたいに顔が怖いわけじゃないし、倉本みたいに笑顔で人をいたぶる趣味もなさそうだし、あの二人に比べたらましじゃないか？

そつだよ、桜井と倉本に比べたら皆川さんなんて怖くないよ、全然平気だよ……と自分に言い聞かせてみるが、でもやっぱり殴られたら嫌だなと思うと足が震える。

この人ハルちゃんの友達なんだし、話し合って、どうにか穏便に

ことをすませられないかな。

「海生くん、どいてくれ。これは俺とハルの問題なんだ」

「そう言われなくても」

ここで「はい、どうぞ」なんて後ろに隠れるハルちゃんを差し出したら、弟分として……もっとカッコいい言い方するなら、『男』として最低だ。ハルちゃんに顔向けできなくなる……いや、そんな大袈裟なことでもないか？

「俺は君を傷つけたくはないんだけどな」

ひー！ やる気だ！ この人、マジで俺のこと殴る気だ！

「俺も、痛い思いするのは嫌ですっ！」

だから、どうかここは穏便に。

「じゃあ、どいてくれ」

「それは無理です」

「聞き分けのない子だね」

皆川さんが一歩足を踏み出す。

俺は一歩足を下げる。

身体中の水分が汗になって出ていってしまったのか、喉がカラカラでびったりと張り付いてしまいそうだった。

なんとか唾を飲み込み、覚悟を決めてギョツと目を閉じる。

本当に殴りやがったら、花菱の声にも負けない大音量で、「助けてえ！」て騒いでやるからな！

人の動く気配 来るっ！

「すとおおおつぶつ!!」

やたら馬鹿でかい声が聞こえた。

あ、と思つて目を開いた瞬間、風が顔の脇を駆け抜け、後方から飛んできたサブバッグが皆川さんの顔面を直撃、皆川さんは声も出せずに、再び卒倒してしまった。

え、なにこれ。

「ごめんなさい！ 大丈夫ですかー？」

とたとたと間の抜けた音をたてながら走ってきたのは花菱だった。皆川さんを一瞥、「うわあ、やっちゃった」と呟くなり、真面目な顔で振り向いた。

「大丈夫、海生？」

「え？」

え、何が？ てか何で花菱がいるの？

「海生がお店を飛び出したまま戻ってこないから、もしかして帰っちゃったのかなって様子見に来たんだよ。そしたらこの人が海生のこと殴ろうとしているように見えたからびっくりして」

「この人」と言いながら花菱は倒れてる皆川さんを指差す。

「喧嘩してるなら止めなきゃと思って走ったら、途中でけつまづいで、持ってたカバンが飛んでっちゃってね」

「その結果がこれか」

「怜悯、皆川さん。」

見れば花菱の顔や制服は砂やホコリにまみれ、汚れている。何だかすごい転び方をしてみたいだな。

「何だか逆に悪いことしちゃったかな？」

「うん、たぶん……でも、まあ、ともかく、ありがとう。助かった」「いいえー。どういたしまして」

花菱は嬉しそうにっこり笑った。

「海生、いまのうちに逃げるぞ」

ハルちゃんが俺の手をとる。

「せっかく皆川が気絶してるんだ。このチャンスを逃すな」

「ええ!？」

俺としてはここでちゃんと皆川さんと話し合った方がいいと思うんだけどな。

「話は明日でも出来るだろ。今日はもう、こいつといたくないんだ」  
ハルちゃんは俯き、俺の制服の袖をぎゅっと掴む。

花菱はそんなハルちゃんをじっと見つめ、それから俺に目を向けた。

「海生の事情はよくわからないけど、帰ったほうがいいんじゃないかな?」

「でも、」

「この人には僕が適当に話しておくよ。危なそうな感じだったら桜井くん呼ぶし、レオもいるから心配しないで」

あの二人が相手だったら、むしろ皆川さんの方が心配になる。

「ん、」

気絶していた皆川さんが僅かに身動きする。

花菱は落ちてたバッグを差し出すと俺の背中を押した。

「ほら、早く行って。めんどくさいことになる前に」

「うん、悪いな花菱」

ハルちゃんの手を引き、皆川さんに気付かれないよう、向こうの通り目指して走りだした。

花菱と別れ、俺とハルちゃんは走って家を目指した。が、体力のない俺は三分もしないうちにはててしまい、結局歩いて帰ることになった。本当に情けない。

時々後ろを振り返り、皆川さんが追ってこないか確認をする。

「そんな後ろばつか気にしてちんたら歩いてたら逆にすぐ追い付かれるんじゃない？」

「そうかな？」

「ま、あいつもそんなに足が速い方じゃないし、大丈夫だろう」

ハルちゃんは大きく伸びをし、ついでにこれまた大きな欠伸をひとつすると、なんの脈絡もなく、「無力だなあ」と呟いた。

「誰が？」

「俺が」

「どうしたの？」

何だかハルちゃん、急に元気がなくなっちゃったような。

「あいつ、皆川のこと、ム力ついたから殴ってやるうと腕を振り被ったとき、すぐによけられて腕をとられた」

「うん」

「振りほどこうとしたんだけど全然びくともしなくて、仕方ないから空いてる手で殴ろうとしたらもう一方も押さえられて。めっちゃくちゃに暴れたけど、あいつ平気な顔して俺のこと壁に押し付けやがって。まったく身動きとれなかったんだ」

自分の両の掌を睨み付け、ハルちゃんは吐き捨てるように言った。「思い知らされたんだ。自分が女であること、所詮女の力じゃ男には敵わないってこと。最悪だ」

ハルちゃんは「はあ」と息をつき、肩を落とす。

そんなハルちゃんの姿が痛々しくて、俺は何か言わなくちゃと思いつながら、何も言葉が見つからなくて、餌を求める金魚みたいに無駄に口をパクパクするしかなかった。

「強がってたけどさ、あんどきはちょっとヤベエかもって焦ってたんだ。だからおまえが来てくれて、びっくりしたけども、嬉しかった」

俺が言葉をかけるより先にハルちゃんの方が顔をあげて、微笑んだ。

「遅くなったけど、助けてくれてありがとな」

「俺は別に、そんな、お礼言われるようなことなんてしてないよ」  
勝手に勘違いして突っ込んでいっただけで。

「皆川さん怖かった。殴られたらどうしようって思ったら、変な汗が出たし足が震えた。情けないでしょ？」

「それでも俺のこと庇ってくれたじゃん。皆川の前に立ちふさがる姿はカッコよかったぞ」

ハルちゃんは照れたみたいに笑って、片手で俺の背中を軽く叩いた。

「後ろから見る海生の背中はやっぱりすごく大きかった。成長したんだなってしみじみ思ったよ。弱虫泣き虫な海生はあの日の約束通り、強く逞しい男になったんだって。感動した」

「そんな大袈裟だよ」

なんて謙遜してみたが、実はすごく嬉しかったり。

ハルちゃんに誉めてもらえたってこともそうなんだけど、一人の男だって認めてもらったことがすごくすごく嬉しかった。

「しかし、あの少年、皆川と二人にして大丈夫だったかなあ」

「花菱なら大丈夫だよ」

「なんだって最強・桜井とある意味最強（最凶？）・倉本がついてるんだから。」

「それより俺は明日のテストの方が心配だよ。勉強会途中で抜けてきちゃったから」

ああ、それに明日の朝、倉本たちにあったら今日のことをなんて説明すればいいんだろ？

桜井・花菱はいいとしても、倉本は「一人で勝手に帰ったことに対する制裁を！」とかなんとか言い出しそうだし……テストよりもそっちのが不安になってきた。

「なに暗い顔してんだよつ。中学生の勉強くらい俺が教えてやるつて」

「うん、ありがとう」

でも今心配してるのはそっちじゃないんだけどな。

「さつさと帰ってみっちり勉強するぞ！ 目指せ100点！」

「それは無理だよ！」

ついさっきまで沈んだ顔してたハルちゃんが一応元気になったみたいだからよかった。

だから訊けなかったんだけど、ハルちゃんは皆川さんにいった何を言われたんだらうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8817p/>

---

みんな仲良し

2012年1月6日19時51分発行